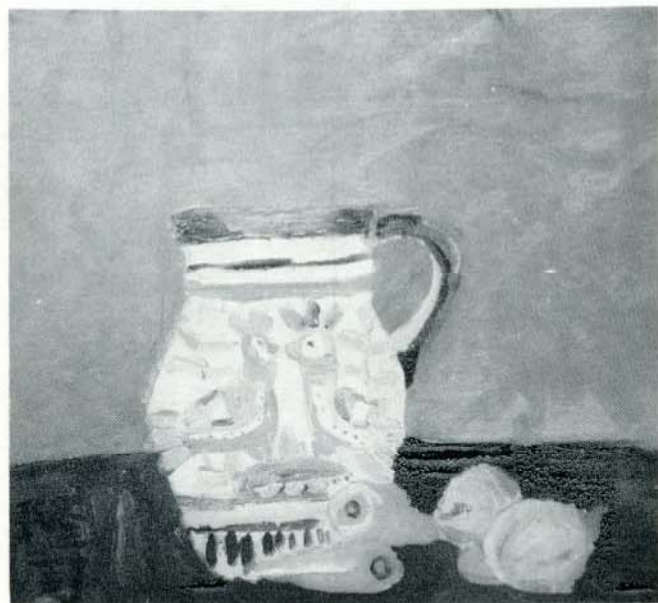


演劇会議



今日のリアリズム シリーズ⑤

湿原夕映え演劇祭〈北海道演劇祭（第17回）in釧路〉

戯曲『千年の丘』

中本信幸

尾田 浩

北野 茨



しいの実シアター 星降る丘の木の劇場

しいの実シアターロングラン公演ご案内

喜劇

「ブラボー！ファール先生」

作・平石耕一 演出・園山土筆

「昆虫記」のファール先生が
20才の頃にまきおこした奇想天
外、大傑作！

10/26(日)・11/9(日)

11/23(日)・11/24(日)

・午前/午後の2回公演

・上演時間 2時間

・チケット発売開始9/25

・チケット取扱い

TEL 0852-54-2400

FAX 0852-54-2411

建築面積388㎡（延面積418㎡）

1階 舞台、客席、ロビー、
エントランスデッキ

2階 オフィス、ミーティングルーム、
オペレータールーム、楽屋

客席 108席（車椅子4席含む）

舞台 間口8.8m（4.9間）

奥行6.3m（3.5間）

高さ4.5m（2.5間）



劇団 あしふえ しいの実シアター・稽古場・事務所

〒690-21 島根県八束郡八雲村平原481-1 Tel.0852-54-2400 Fax.0852-54-2411

[E-mail Address] shiinomi@web-sanin.co.jp

[URL] http://www.web-sanin.co.jp/amuse/shii/

広島事務所/〒733 広島市西区山田新町2-9-23 Tel.082-272-9331

京都事務所/〒617 京都府長岡京市友岡3-7-12 Tel.075-955-3066

◇劇団京劇『国語元年』
作・井上ひさし／演出・平岡秀幸



◇京浜協同劇団『旅★自分を探しに』
作・山本忠利／演出・藤井康雄
演出補・ミズノタケジ



◇演劇集団和歌山
『ワンス・アポン・ア・タイム』
作・鐘下辰男／演出・水口広平
・イン京都Ⅲ―錦小路の素浪人―



■ も く じ

●グラビア(舞台)	1
●今日のリアリズム シリーズ⑤ リアリズム? 「スタニスラフスキー・システム」の見直しから(その1) 中本信幸	8
●湿原夕映え演劇祭(北海道演劇祭(第17回)in釧路) 尾田 浩	19
●北から南から(劇団通信)	27
●はじめての海外劇団招請公演(韓国・劇団馬山) しいの実シアター公演を終えて 有田美由樹(劇団あしぶえ)	42
●劇評 京浜協同劇団『旅★自分を探しに』 黒川 栄(湘南演劇鑑賞協議会事務局長)	45
劇団いこら『姉弟』フタリッコ 楠本幸男(演劇集団和歌山)	47
劇団大阪プロデュース『プレヒト酒場PARTⅢ』 小松 徹	48
劇団演劇街『サラエヴォのゴドー』 猿渡公一(福岡現代劇場)	50
劇団山形『もうひとつの教室』 高橋 寛(劇団だいこん座)	52
劇団潮流『NIPPON漂流』・大阪新劇団協議会プロデュース『がめつい奴』 神沢和明(国立奈良高専助教授)	54
●中グラビア ― 顔 ― (渋谷幸子, 菊地昭一, 三沢和子, 栗木英章)	58
●<ロシア演劇レポート8> 俳優レーベジェフ80歳 その他 桜井郁子	66
●戯曲『千年の丘』 北野 茨	74
●中国話劇のホットな話題(今なぜ北京でイブセン?) 坂手日登美(劇団息吹)	101
●訃報<故 寺下 保> 森本景文(劇団未来)	108
●事務局だより	110
●全日本リアリズム演劇会議 劇団住所録	114
●編集後記	120

公演

舞台

宇部市民劇団若者座『ちらい』



◇黒石演劇研究会

『北のうた——鳴海要吉・その愛と苦悩』
作・きしだみつお／演出・中辻鉄雄



◇劇団やませ『もと子』

作・征谷伸夫／演出・加藤健太郎



◇劇団未来『LOVE』

作・山田太一



◇劇団かすがい(新春稽古場公演)

『騒がしい子守歌』

作・飯沢匡／演出・樋口伸廣



◇劇団からっかせ

『ジプシー・千の輪の切り株の上の物語』

作・横内謙介／演出・布施佑一郎

公演

舞台

公演

◇劇団名芸『夢家族』
作・栗木英章／演出・片野耕治



◇劇団静芸『思い出のブライトンビーチ』
作・ニールサイモン／訳・鳴海四郎
演出・伊藤幸夫



◇劇団四紀会『火ようびのこちそうはひきがえる』
作・ラッセル・E・エリックソン
構成・演出・劇団四紀会



舞台



◇東京芸術座アトリエ公演『マゲノリアたちの朝』
作・ロバート・ハリーング／訳・青井陽治
演出・高橋左近



◇劇団潮流『NIPPON漂流』
作・木村玩／演出・平田一紀



◇劇団はぐるま『新島の飛騨んじい』
作・演出・こばやしひろし

公演

舞台

公演

舞台

◇劇団名古屋演集『日本の面影』
作・山田太一／演出・北原雅子



◇青年劇場『唱歌元年』
作・島田九輔／演出・松波喬介



◇劇団埼玉・久喜座『見沼の波留』
作・長谷川美智子／脚色・一柳俊邦
演出・由布木一平



◇劇団蒼生樹『季節はずれの長屋の花見』
作・吉永仁郎／演出・濱田重行



◇劇団すがお『ONとOFFのセレナーデ』
作・古城十忍／演出・加藤武夫



◇大阪新劇団協議会プロデュース合同公演
／企画劇団大阪『がめつい奴』
作・菊田一夫／演出・熊本一

公演

舞台

リアリズム？ 「スタニスラフスキー・システム」 の見直しから（その1）



中本 信幸

『ロシア演劇、いまだ死せず！』『ロシア最優秀女優
— 黄金のマスク受賞者・荒木かずほ』『ロシア最優秀
女優はロシア語を話さない』

さる三月二十四日、ロシアの演劇祭「黄金のマスク」の授賞式がモスクワのワフタンゴフ劇場で催され、ドラマの部に参加した『砂の女』（オムスク・アカデミー・ドラマ劇場、安部公房原作、O・ニキフォロフ脚色、V・ペトロフ演出）で好演した東京芸術座の荒木かずほが主演女優賞を受賞したが、外国人の受賞は今回が初めてとあって、マスコミがセンセーショナルに報じた。

ロシア国内で上演されたオペラ、バレエ、ドラマ、人形劇の話題作をモスクワで競演する同演劇祭は一九九五年に始まり、今回は三回目、三月十四日から二十三日までおこなわれた。「黄金のマスク」理事会に招かれて、ほくも訪口した。

オムスク劇場は『砂の女』で、最優秀演出家賞（V・ペトロフ）、主演男優賞（M・オクネフ）、主演女優賞（荒木かずほ—日本の女優）と三つの賞を獲得し、さらに、古参女優エレナ・プサレワが功労賞に輝いて、賞を四つもさった。

この一月、モスクワの日本大使館で「黄金のマスク」を主催するロシア演劇人同盟の担当者から、「日本演劇文化を紹介する展示会を催してほしい」と要望された。ロシア

が上演されるモスクワ芸術座のロビーと市内の俳優会館ホールが予定された。準備時間と資金がないのを承知のうえで、ほくは微力を尽くすつもりでモスクワに出かけた。

小山内の絵葉書を発見し、一連の企画を精力的に推進してきた宮下啓三（慶應大教授）、寺川知男（松竹演劇部）、上田美佐子（シアターX）、両国界隈美術館企画室ら旧実行委員会の面々、おおくの同好の士、現地の大使館、国際交流基金の方々の絶大な協力をえて、モスクワ芸術座ロビーで、日ロ演劇交流を紹介する展示会を催すことができた。



「黄金のマスク」受賞者
左から荒木かずほ、M・オクネフ、V・ペトロフ

側の主催者と日本大使館員のなかに、一九九五年十一月二十八日から十二月二日まで、東京・両国のシアターX（カイ）で開催されたイベント「小山内薫とモスクワ芸術座—日本の近代劇・映画劇の草分け」を知っている方がいて、小山内薫がモスクワで集めた演劇絵葉書の、里帰り、展を中心とする「小山薫とモスクワ芸術座」の開催が求められたのだ。会場としては、まず第一に、『砂の女』

ИЗВЕСТИЯ 26 марта, 94



イズベスチャー紙



歴史の終わり、演劇の死？

「ロシア演劇、いまだ死せず！」(『ネザビシマヤ・ガゼータ』紙、一九九七年三月二十六日付)の見出しは、ふかい意味をもっている。

八〇年代半ばから、ロシアをふくめて世界の演劇人のあいだで「演劇の死」が叫ばれるようになった。一見すると活況を呈しはじめている昨今のロシア演劇界だが、心あるロシアの演劇人は、世界とロシアの現代演劇を楽観視していない。歴史の終わり、時代の終わりは、ベルリンの壁の崩壊とソ連邦の解体によっても白日のもとにさらされた。

九四年三月の拙稿「『混迷』の時代を照らす「孤独の太陽」」(『神奈川大学評論』第十七号)から引用する。

二〇世紀の「現代」という時代は、第一次大戦とロシア革命から始まった。進歩を基調とする歴史の歩みの到達点としての「現代」は、人類の「未来」や「希望」を実現するソ連邦を中心とする東側と、資本主義体制の維持をめざす西側との「冷戦」構造から成り立っていた。ソ連邦の深奥から沸き起こった「ペレストロイカ」の波動がたちまち全世界をゆるがし、一九八九年一月、突如として、東西ベルリンの間を隔てていた「ベルリンの壁」が崩壊し、翌九〇年一〇月、東西ドイツの統一が実現される。九一年末、ソ連邦が解体する。搾取と階級のない万人平等の社会の建設をめざして、一九一七年のロシア革命をへて成立した人類史上はじめて誕生した社会主義国家ソ連邦が、革命から七四年、ソ連邦成立(一九二二年一月)から六九年にして瓦解した。今世紀最大の歴史的ドラマ、壮大な実験が幕を閉じた。まさに、現代というひとつの時代の終わりであった。

「混迷」のなかに、いま、輝かしい明日を照らしたす「二筋の光」がさしていることも強調しておこう。ここ数年、ロシアの演劇界にも「光」がさすようになった。ひと



「小山内薫とモスクワ芸術座」展
オムスク・ドラマ劇場支配人
B・シズドリチ

ころ観客がへっていたが、このところ、人びとが劇場に戻ってきたし、注目すべき芝居もある。そして、未来を担う演劇人の教育も着実になされている。

さる三月十五日に六十歳の誕生日を祝ったイルクーツク在住の作家ラスプーチンが、インタビュに答えて、「モスクワでは、マイルイ劇場だけがロシア演劇文化のよき伝統を守っている」し、「ロシアの文化を保つには、ロシア文化のよき伝統が生きている地方に、とくにシベリアに首都を移すべきだ。たとえば、ノボシビルスクに」と提案した。今回の「黄金のマスク」祭の参加作品をみても、いま、地方の演劇に見るべきものがある。オムスク・ドラマ劇場が「黄金のマスク」賞を独占したことが、「地方の時代」を象徴している。

日本の演劇界は

「歴史の終焉」・「歴史の終わり」を迎えたいま、世紀末における「文化の終わり」、「演劇の終わり」、「演劇の死」が、ロシアで論議されるようになってきている。今回の「黄金のマスク」授賞式のイベントも、「演劇の死」という現状認識から発想されていたのである。

ところで、ほくも今日の日本の演劇界、文化状況を楽観視していないし、ある意味で、日本の演劇は、いま、「死

に体」であると思つてゐる。とはいへ、ロシアと日本の演劇の未来に希望をもつてゐる。ロシア革命にはじまる二十世紀の「現代」を虚妄の歴史、「無」の歴史、いや、「マイナス」の歴史とみて、歴史をミイラとして葬り去ることは、「現在」を見えなくさせるだけでなく、「未来」を切り開くことにならない。「ロシア未来派」、「ロシア・アヴァンギャルド」などの前衛芸術、なによりも、スタニスラフスキー・システムを葬り去り、凍結のままにしておいていいのか？

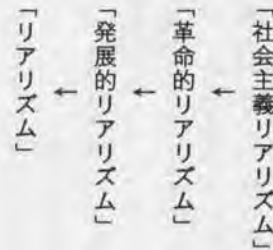
まず、凍結した「現代」の解除作業にとりかかろう。いま、小山内薫のはじめた事業を総合的にふりかえり、再検討することが必要である。わが日本の文化状況・演劇



スタニスラフスキー

の現状は、依然として貧しい。小山内薫らをはじめた事業、つきあつた問題は、いままも新しい。まず、「古きをたずねて」という狙いで出発したのが「小山内薫とモスクワ芸術座」の企画である。スタニスラフスキーやモスクワ芸術座、ロシア・ソビエト演劇の優れた伝統に学んで日本演劇を豊かにしようと苦闘してきた小山内薫、その後継者である土方与志、村山知義、千田是也ら新劇の創始者たちのことや、築地小劇場以来の日本演劇に与えたロシア・ソビエト演劇の影響、日ロの演劇交流の歴史と現在を写しだしたというのが、今回のモスクワでの展示会の狙いであつた。

ふるい文章を読むことにしよう。



「新劇合同論」ノ組織的役割ハ以上ノ様ナ成果ヲ生ジマシタガ其ノ芸術的、基本的方針ニ於テハ「発展的リア

リズム」ニヨル芸術創造方法ノ確立ニアリマシタ。コノ「発展的リアリズム」ハ基本的ニハ創造方法ニ於ケル「唯物弁証法」ノ発展デアリマス。

ソシテ昭和七年ノ末頃カラ、ソ同盟ノ作家同盟、演劇同盟ハ芸術理論ノ討論ノ過程ニ於テ「創造方法ニ於ケル唯物弁証法」ノ芸術方針ガ哲学的理論ノ限界ニ止メラレ、機械的ニ解釈サレ哲学理論ノ限界ニ止メラレテ芸術ノ具體的活動ニ不適當ナ結果ガ生マレタノデ、ヨリ芸術活動ノ具体化ヲ計ルタメ「社会主義リアリズム」ヲ基本方針トシテ採用スルニ至ツタノデアリマス。

日本ニ於テモ、ソ同盟ノ理論的成果ニ倣イプロットハ昭和八年ノ末頃カラ「社会主義リアリズム」ヲ芸術ノ基本方針トシテ採用シタノデアリマス。只、コノ命題ノ名称上ノ上デ日本の現実(革命前期ノ資本主義的段階ニアル)カラ「社会主義リアリズム」ヲ「革命的リアリズム」と称シタノデアリマス。尚、コノ革命的ト言フ言葉ガ發展上支障アル為、単ニ「リアリズム」ト呼ンダノデアリマス。コノプロットノ方針ヲ生カシ新劇合同ノ芸術方針トシテ、村山知義ガ「発展的リアリズム」ヲ再唱工新劇団ノ芸術的方針ニスベク、計ツタノデアリマス。

以上は、一九四一(昭一六)年四月三〇日付けの岡倉士朗の「手記」(「治安維持法違反」)からの引用である。

(岡倉士朗演劇編集『演出者の仕事』未来社)。岡倉は一九四〇(昭一五)年八月、治安維持法違反で検挙され、翌一九四一(昭一六)年一月、保釈が決まり、四二(昭一七)年一月、治安維持法違反により懲役二年、執行猶予四年の判決がくだつた。

社会主義リアリズムは、一九三二年からソ連で提唱された芸術創作方法である。三四年、ソ連作家同盟規約で「ソビエト芸術文学ならびに文学批評の基本的な方法」と規定され、「社会主義リアリズム」とは、「現実をその革命的発展において、真実に、歴史的具体性をもって描く」方法とされ、「現実の芸術的描写の真実さと歴史的具体性とは、勤労人民を社会主義の精神において思想的に改造し教育する課題と結びつけなければならない」とされた。三四年四月、「文学団体再編成についての共産党中央委員会決議」のうち、作家同盟準備会での討議をへてまとめられた。

社会主義リアリズムの提唱は、芸術家に共産主義的世界観や政治イデオロギーを要求する唯物弁証法的創作方法やセクト的なラップ(ロシア・プロレタリア作家協会)にたいする批判と結びついていたため、芸術創造の自立性を擁護する理論とみなされて、ソ連の多くの芸術家に歓迎された。ソ連以外の国の文学・芸術運動にも絶大な影響を与え、とくに社会主義リアリズムのスローガンは反ファシズム文化擁護の「人民戦線」||「統一戦線」運動に政治的立場の

違いを超えて多くの芸術家を結集する役割を果たした。社会主義リアリズムは理論的には体系化されず、帰するところ、前衛芸術を否定し、古典的なりアリズムへの回帰をうながすものとなった。三〇年代半ばには、独自のスタイルを追求する芸術家が「粛清」で大量に抹殺され、メイエルホリド劇場の閉鎖などの、芸術界全般におよぶ「フォルマリズム」Ⅱ「形式主義」批判キャンペーンも展開され、社会主義リアリズムは芸術の画一化のための理論になっていく。

第二次大戦後、社会主義リアリズムは、ますます硬直化し、スターリンの個人崇拜の色を濃くするが、一九五六年のソ連共産党第二〇回大会に始まるスターリン批判以後、この理論への関心がおとろえる。

社会主義リアリズムの理論は一九三三（昭和八）年から日本に紹介され、弾圧によって崩壊にひんしていたプロレタリア文学運動に決定的な影響を与え、それまでの「政治優位性」の理論のかわりに、「現実をありのままに描く」という世界観無用論に道をひらくことになった。ともあれ、岡倉士朗が記しているように、日本では「社会主義リアリズム」のことを「革命的リアリズム」「発展的リアリズム」ないし「批判的リアリズム」と呼び、さらに「リアリズム」というようになったのである。

ソ連では三〇年代半ばから、スタニスラフスキー・シス

テムだけが演劇における社会主義リアリズムの正統派とみなされ、スタニスラフスキーの仕事が教条的に拡大解釈されて政治的に利用された。スタニスラフスキー・システムがもつばらモスクワ芸術座の実践のなから生まれたかのように説かれ、あたかもモスクワ芸術座だけがその体現者であるかのようにいわれた。

日本の演劇界には、スタニスラフスキーⅡ小山内薫Ⅱ久保栄の路線を「社会主義リアリズム」Ⅱリアリズムの正統として位置づけ、メイエルホリドⅡ土方与志（あるいは村山知義）の路線を異端とみなし、土方与志を形式主義者、機械的唯物論者と呼ぶ観点がひろまっていた。

ソ連邦解体以前の一九八〇年八月に刊行された『ゲストウス』誌のつた千田是也「土方与志の演出——（土方与志没後二〇年記念の会）での報告——」（千田是也演劇論集）第9巻、未来社）と大橋喜一「驚馬（どば）のリアリズム——ブレヒト・新劇・リアリズムについての断想——」は注目に値する。

千田是也は、社会主義リアリズムが、「ラップその他のプロレタリア芸術団体を解消してあらゆる流派の芸術家や芸術団体も社会主義の建設という現実の仕事に参加させるための統一戦線スローガン」であると断定し、その統一戦線スローガンが創作方法にすりかえられたと説いている。「社会主義リアリズム、いったい現在この理論は有効な

のか無効なのか不思議な言葉だ。

人類の歴史は必然的に社会主義に向かう。たいへんなことだが、まあそうだろう。その観点をあらゆる芸術作品に反映させようという、そういうリアリズムらしい。

（中略）だが、地球上に社会主義国家がふえつつあるという歴史の歩みにのっかって、リアリズムは社会主義がつかなければならぬと考えたとしたら問題はややくしくなる。」

以上の大橋喜一の疑問は、今日、痛切にひびく。

社会主義リアリズムが消えればリアリズムも消えることになるのか。ともあれ、社会主義リアリズムⅡリアリズムの正統派とみなされてゆがめて解釈されてきたスタニスラフスキー・システムを見直す必要がある。

「型からはいれ」とスタニスラフスキー

「グロトフスキーがパリの大学で最近おこなった公開講義が評判になっていました」

モスクワ芸術座ロビーで催された「小山内薫とモスクワ芸術座」展に東京から飛んできたシアターX（カイ）の上田美佐子さんが、その後、ポーランドをへて、パリに立ち寄り帰国そうそう、パリで印象に残ったことを電話で伝えた。上田さんは、三月二十四日朝、モスクワからワルシャワに発ち、ぼくはその日の夕刻、夜行列車「赤い矢」号でモスクワからサンクトペテルブルクに向かったのだ。

「わたしはスタニスラフスキー・システムに学んだ。スタニスラフスキーが偉大なのは、晩年になるまで探求をやめず、自分の過去を否定したことだ。そして、晩年には《型》から、《様式》からはいれと言った」

グロトフスキーのこの発言が、パリの演劇人にショックを与えているというのだ。

「歌舞伎のように《型》ないし《様式》からはいれと、スタニスラフスキーは言ったのでしょか」と上田さんが言う。

そこで、ぼくは、グロトフスキー発言の主旨は、スタニスラフスキーが晩年、「身体的行動の方法」を最重要なものとし、そのことであり、すでに日本でも土方与志はじめ多くの先駆者たちが、スタニスラフスキー・システムの見直しをはじめていたと、上田さんに愚見を述べた。

不幸なことに、日本ではスタニスラフスキー・システムが一時の流行として葬り去られ、ミイラのように凍結されたままで、正しく解釈されていないのである。

「戦後の二十数年間をふりかえてみると、若い演劇志願者をかきたてたシステムは、最初が千田是也の『近代俳優術』であり、つぎがスタニスラフスキーの『俳優修業』、三番目がブレヒトの叙事的演劇、四番目が不条理劇である。なかでもスタニスラフスキー・システムは、一九五四年の前後には、新劇界の大きな流行となった。このシステ



昨年十一月、旭川で人知れず一人のロシア人女性が亡くなった。エレナ・ニコラエフナ・レージナさん、

五十歳。

旧ソ連作家同盟の外国委員会、長く日ソ両国の演劇や文学研究者の交流の橋渡し役として活躍した。

チェーホフ研究の第一人者、中本信幸・神奈川大教授は、レージナさんが作家同盟

旭川での客死

知日家の彼女が、なぜ旭川で寂しく客死することになったのか。

の知り合いだが、彼女が北海道に来ていたことも、死したことも知らなかった。

ロシア人作家からの手紙で計報(ふほう)を知らされ、驚いた教授は旭川まで足を延ばし、関係者から聞き取り調査をした。

一月末には、モスクワで書と花に囲まれたお墓を訪ねるとともに遺族からも話を聞いた。

その結果、レージナさんは滞在先のホテルで倒れているのを発見さ

れ、病院に収容されたが、骨盤の悪性腫瘍(しゅよう)があちこちに転移し、手遅れだったことが分かった。彼女は、医者と葉が大嫌いで検診を受けなかった。遺品にも故人が病気を知っていたことを示すものはなく、葉もなかった。

日本語に堪能で第一級の通訳者として多くの出会いに立ち会い、大江健三郎の「ヒロシマ・ノート」なども翻訳しているレージナさん。

通訳として、暮らしの糧を得るのが目的だったらしい。ベレストロイカ(改革)時代には大いに活躍したソ連の演劇。日ソの演劇・文化交流に貢献したレージナさんの死は、憂鬱するロシア演劇界の現状を象徴するかのようでもある。残念でならない。

死することになったのか。彼女は当時、ロシアサーカスの興行を手伝っていた。実は、一昨年も北海道に来ていた。川で寂しく客死することになったのか。彼女は当時、ロシアサーカスの興行を手伝っていた。実は、一昨年も北海道に来ていた。

「北海道新聞」'97(H9)3.14(夕刊)

ムに移植に功績があったのは、翻訳者の山田肇と杉山誠であり、実践者としては山本安英、岡倉土朗、八田元夫、下村正夫らが、その日本の適用のために努力したのである。(菅井幸雄著『新劇の歴史』新日本出版社)

千田是也の『近代俳優術』(早川書房)の上巻は一九五九年五月、下巻は翌一九六〇年三月に刊行され、この類似書がなかったため、その後の二十年ほどのあいだに四十四版を重ねた。著者によれば、本書は、「下敷きになっていたのは、いわゆる劇詩的(ドラマティック)な演劇、スタニスラフスキー風の感情同化を狙った演技技術であった。」(『近代俳優術』あれこれ)、千田是也演劇論集第8巻、未来社)

スタニスラフスキーの『俳優修業』第二部が英訳本からの翻訳で出版されたのが一九五四年である。このところが「スタニスラフスキー・システムの流行」、スタニスラフスキー旋風」の頂点ということになる。

「戦後、スタニスラフスキー・システムもプレヒト理論も、不条理劇も残酷演劇もいち早く模倣されたが、一部をのぞけば、ほとんど根をはることがなかったと言える。」(毛利三彌・西一祥著『東西演劇の比較』放送大学教育振興会)

スタニスラフスキー・システムは、今日にいたるまで次のように解釈されている。「……舞台の上に展開される

ものは、できるだけ、実人生そのまま、つまり日常的生活の断片の「再現」representationでなければならぬことになる。したがって俳優は、別の次元の実を「再現」することpresentationではなく、実人生における人間そのものを生かすことが理想だということになる。すなわち「真」を創りだすこと——その極点が、スタニスラフスキー・システムであったにほかならない。」(河竹登志夫著『演劇概論』東京大学出版会)

「スタニスラフスキーの演技演出論は、演じてみせるのではなく舞台で生きるのだというリアリズムの基本理念を理論的実践的に体系づけたもので、近代写実主義の方法の集大成ともいえるべく、日本を含む諸外国のリアリズム演劇発展に大きな影響をもたらした。」(同上)

鈴木忠志が一九八八年に出した『演劇とは何か』(岩波新書)にみられるスタニスラフスキー・システム観をみてみよう。

鈴木忠志は、「現在でもソ連のみならず、アメリカでも彼の演技論は大変な影響をもっています」といい、スタニスラフスキーの著作『俳優修業』について書いている。

「私はいまでも、演技について書かれたいちはば面白い本をあげると言われれば、まず第一にこの書名を口にすると思うのですが、また反面、演技についていちはばんの誤解を世界にふりまいた書物であるということをつけ加えるの

も忘れないでしょう。演技というものがわれわれの日常生活の描写、つまり近代リアリズム演劇が描いてきたような日常生活の人物を再現するものだという考え方を世界的に確立してしまったのは、このスタニスラフスキー・システムだからです。」

十九世紀に盛んになった近代リアリズム演劇が「人間の内面を表現する演劇」で、スタニスラフスキー・システムはものばら近代リアリズムの演技、内面的演技を追求してきたということになる。「アメリカの俳優たちがギリシヤ悲劇のような、非常に様式的な演劇を上手に演技できないのはスタニスラフスキー・システムの影響が強いからです」と、鈴木忠志は指摘する。

欧米諸国でスタニスラフスキー・システムが誤って紹介され、その悪い影響が日本にもおよんでいるのだ。

一九八九年二月二十七日から三月九日までモスクワで開かれた国際シンポジウム「変わりゆく世界におけるスタニスラフスキー」に招かれて出席したばかりの旧稿から引用する(「くみつくせぬスタニスラフスキー」『朝日新聞』一九八九年四月六日付)。

「今回のシンポジウムでも、一九三〇年代になされたスタニスラフスキーの著作の英訳が不十分なものであることが確認された。これまでその英訳からの重訳でスタニスラフスキーの著作が諸外国に紹介され、スタニスラフス

キー・システムの術語の解釈に混乱が生じたというのである。

(中略)講演会でも、リハーサルするときもリュビームフは同席している諸外国の演劇人、スタニスラフスキー研究者たちにあてつけがましく、欧米諸国でスタニスラフスキー・システムが誤解されていると繰り返し力説した。『タガンカ劇場の演出家ユーリー・リュビームフは、ブレジネフ時代に亡命して、諸外国の演劇人と接した体験をふまえて、「スタニスラフスキー・システムが誤解されている」と強調したのである。これは、グロトフスキー発言とつながるものだ。

すでに千田是也が「土方与志の演出」で警告していた。

スタニスラフスキーが十月革命後そのシステムの最後の到達点として、〈超課題〉や〈交流〉とともに〈身体行動〉の原理をあげていることは、別の道を歩みながらかれも主観的(心理主義)の残滓を洗いおとして、メイエルホリドと同じ地点に達したからだとも言えないこともありませぬ。

今回は、スタニスラフスキー・システムの「誤解の様相」を検討していく予定です。

〈筆者紹介〉

中本信幸(なかもと・のぶゆき)

一九三二年、栃木県足尾に生まれる。

一九五五年、東京外国語大学ロシア語科卒業(文学士)。

一九六一年から六三年、ソ連国立モスクワ大学留学。

ロシア文学者、演劇評論家。

神奈川大学教授、岡山大学・上智大学各講師。日本アジアアフリカ作家会議世話人。ロシア東欧学会・日本ユーラシア協会各理事。

主な著書／『チェーホフのなかの日本』(大和書房)、『エカテリーナ二世物語』(千趣会)、『ソ連はどこまで変わるか』(新時代)、『インデアスの迷宮』(勁草書房)、『他。主な訳書／モローゾフ『シェイクスピア研究』(未来社)、

アーニクスト『シェイクスピア』(明治図書)、バラバノビッチ『チェーホフとチャイコフスキー』(新時代)、トフスノーゴフ『演出家の仕事2』(理論社)、他多数。

主な脚色台本・翻訳台本／チェーホフ原作の『ねむい』『下士官プリシベエフ』、『熊』『プロポーズ』他を翻訳・ゴリキー『子供たち』『どん底』『ワッサ・ジェレズノワ』(俳優座、千田是也演出)他。トルストイ『アンナ・カレーニナ』他、多数。

主な論文／『ロシア革命と作家の運命』、『演劇人ドストエフスキー』等多数。

平成八年一〇月一〇日から一三日までの四日間、釧路市民文化会館を会場に開催された「第一七回北海道演劇祭 in くしろ」は、観客組織数目標五、〇〇〇名のところ六、〇〇一二人の方々に観劇いただき大成功に終わることができました。

この演劇祭は、北海道内の一九劇団及び五個人で構成する北海道演劇集団が中心となり、二年に一度道内各地持ち回りで開催されてきて、三二年の歴史を刻んでおります。その歴史は北海道の地域演劇の歴史と言えます。二年前の平成六年江別市で開催され、江別市制四〇周年の記念事業として、演劇以外の文化団体の小ホールでの発表会も含め八、〇〇〇名の観客組織数で大成功に終了したものを受けての釧路開催でありました。

まず、地元で中心となる受け皿は釧路演劇協議会が中心になる事で、当時活動が停滞していた協議会の活性化に向けて取り組みました。(釧路演劇協議会は、市内七劇団で構成。北海道演劇集団加盟は釧路演劇集団のみ)平成七年に協議会創立二〇周年として記念公演「ねずみとり」(アガサ・クリステイ作・加藤直樹演出)を行い、さらにこの演劇祭へと結実しました。今回、道内から参加した劇団の方々が、釧路の実行委員の中核を担った面々が市内の各劇団であることを知り、「まるで一つの劇団員のような感じがした」と大変関心しており、道内の各地域では考えられない状況だと羨ましいがられました。

演劇祭の内容・規模をどうするかという企画については、当初からここ数年大きく変わる文化状況をどうとらえ、どう反映するか、その視点をしっかり見据える努力をしました。そして、それをこの地域でどう実践するかでした。

「演劇によるまちづくり」をテーマに

一昨年以來、三カ月毎に札幌でおこなわれていた舞台芸術環境フォーラムのメイン講師が今回招聘した演劇評論家

湿原夕映え演劇祭

第17回

北海道演劇祭 in くしろ

北海道演劇祭 in くしろ実行委員会事務局長

尾田 浩

(釧路演劇集団所属・北海道演劇集団創造委員)

平成八年一〇月一〇日から一三日までの四日間、釧路市民文化会館を会場に開催された「第一七回北海道演劇祭 in くしろ」は、観客組織数目標五、〇〇〇名のところ六、〇〇一二人の方々に観劇いただき大成功に終わることができました。

この演劇祭は、北海道内の一九劇団及び五個人で構成する北海道演劇集団が中心となり、二年に一度道内各地持ち回りで開催されてきて、三二年の歴史を刻んでおります。その歴史は北海道の地域演劇の歴史と言えます。二年前の平成六年江別市



オープニング（児童生徒50名によるダンス）

の衛紀生氏であり、全国の実際の状況と提言が大変参考になりました。また、前回の江別演劇祭の反省も加味され、このテーマの設定がされました。当初よりこの演劇祭を一種イベントにしてはいいけないと考えていましたし、実行委員会の中でもそういうように発言してきました。私の考え方もしれません、イベント

というと一時的盛り上がりで、成果や反省についての継続性に疑問があるからです。街づくり論議は盛んに行われています。また、「街づくりは人づくり」とも言われています。そして、「ハードからソフトへ」とも言われています。しかし、具体的に何をするのかと言うと、なかなかその実際が見えてこないのが現実だった訳です。「人づくり」は「地域のコミュニティづくり」であり、そのツール（道

具）として「演劇」が有効であるというのが、衛氏の提言でした。「演劇は、人間が生身で人間を演じる等身大の芸術であり、また、役者・裏方・制作と多くの人々の力が必要であり、また多くの議論を重ねながら作り上げていく演劇の創作過程に、現代の人が忘れていた真剣なコミュニケーションの場がある。各々の意見の違いがあっても演出家を中心とした中で作品として完成していく、手づくりの場であり、多くの無駄を必要とする場である。」そのコミュニティづくりの第一歩が、広範な市民の方々に参加してもらった実行委員会づくりでした。これも一五〇名の参加者を得ました。しかし、当日までの実行委員会の運営になると多々反省する事もありました。

もう一つの視点は、ここ二年ぐらい前に紹介された「アウトリーチプログラム」の考え方です。私たちはいつも入場券を広めるのに苦労するわけですが、この考え方は、この取り組み全体を視野にとらえながら、「創る楽しみ・観る楽しみ・参加する楽しみ」をトータルに考え、企画し、実践しようというものです。この発想から生まれたのが一般公募の市民参加劇やオープニングのジャズダンスであり、市内各企業への支援依頼でありました。企業・個人支援は、三回券三枚の購入をお願いし、その企業の方や社員の家族の方までも含めて観てほしいというお願いでした。また、それは企業としての文化福利事業としてとらえて欲しいと

いうお願いであり、地域における企業メセナのあり方への模索でもありました。これは、二三八社の企業と個人のご支援をいただきました。そして、これは新たな演劇への観客作りの取り組みでもありました。

次に、創り手側の問題です。演劇を愛好する者が演劇を公演する。至極あたりまえの事なのですが、上演する行為を公共的な文化活動として高めていく、意識の変革であり

上演作品に責任を持つという事です。そのために、創造的

力量を高めていく作業であると思います。その中で、現在最も充実した仕事をしている演出家の一人である、東京の演出家岩松了氏を、四月から三回にわたり計二八日間迎えての市民参加劇「アイスクリームマン」の取り組みは、まず中央の芸術家の地域滞在型の試行であり、地元で育ちにくい演出家の補完作業であり、現代の青年達の集団形成の実践であり、そして、九〇年代の演劇と言われている「静かなる演劇」の実際と地元への紹介でありました。

このように、今回の演劇祭を行うにあたり、事務局として考えた視点を書きましたが、現実には多くの問題点もあり、反省すべき点も多々あります。また、当日の公演時間の変更の周知等、お客さまから厳しく指摘もされました。また企業支援についても、押しつけがましいお願いになったのも事実ありました。市民参加劇の取り組みについても、苦惱する中から生み出されました。ノウハウの甘さを痛感しておりますが、次

風の子北海道 中島茜さん指導



「実践的劇づくり — ワークショップ」



シンポジウム「演劇によるまちづくり」

への蓄積としていきたいと思えます。
 四日間にわたり上演された十一作品は、大変好評で道内劇団の役者陣の厚さが示された演劇祭になりました。
 また、全り演の議長団から中野健氏（シンポジウムのパネラー）事務局から熊本一氏が参加して頂きました。その他北海道内の演劇関係者が参加していただき、多くの情報交換と交流が生まれた演劇祭になりました。

来年は檜山管内江差町で開催されます。北海道演劇集団としても、今度は町での開催と加盟劇団がない所での開催となり、新しい取り組みとなります。

開催の成果と反省

(1) 北海道演劇集団が、積み重ねてきた演劇祭のノウハウが生きた。地元実行委員会の充実と参加劇団費用負担の



デフ・シアター北斗星「おせきとムジナと戻り橋」(釧路)
 (岡安伸治作・尾田浩演出)



ドラマシアターども「かまどがえしの系譜96」(江別)
 (安念智康作)



劇団さっぽろ「三まいのおふだ」(札幌)
 (松谷みよ子原作・高坂純脚色・飯田信之演出)



劇団シアターII「ヘンリー伯爵夫人」(札幌)
 (渋谷健一作・演出)



劇団にれ「赤毛のアン」(札幌)
 (ルーシー・モード・モンゴメリ原作・関口英一脚色・演出)



劇団北芸「にしむくさむらい」(釧路)
 (別役実作・加藤直樹演出)

軽減(参加劇団の地元で公演を行い、釧路公演の舞台仕込み費のみを負担する。)また、創造的に向上を図るための努力がされて上演作品が一定以上の評価を受けた。

①北海道演劇集団の創造委員会を中心に、上演劇団及び上演作品について一年半前より取り組むことより、子供から高齢者までの作品が揃い、北海道の演劇の現状が反映されたものになった。

(2) 釧路市民各層に呼びかけての一五〇名の実行委員会作りが、市民への浸透に力になった。

(3) 「演劇によるまちづくり」をテーマとして、演劇評論家をメイン講師として招き、また、六月の実行委員会に特別講演会を開催し、テーマについての掘り下げが出来たことにより、テーマへの理解が得られた。

①市民参加の実践がなされた。

・オープニングジャズダンス——一般公募の小中学生50名による取り組み。

練習から上演まで、実行委員会である、釧路子ども劇場の母親5名により責任を持たせた中で取り組んだ。子ども劇場として創造型の実践となった。

・聴力障害者の芸術活動の追求を目的に公演した「おせきとムジナと——」釧路演劇集団を中心に、手話の会も加えて大きな成果があった。

②「アイスクリームマン」の取り組み

・地元で育ちにくい演出家の補完作業として、中央の演出家の地域滞在型創造活動の試行であったが、大きな成果が得られた。

・地元の若い劇団を中心として、一般公募も交え四〇名の参加者は、稽古への結集等苦慮した面があり、また、創造集団としての形成方法に課題を残した。二十三名の出演者が交互に舞台上に登場する作品であった為、地元の演出担当に負担をかけた。

・中央の演出家と、真剣に対峙し、妥協を許さない演出に大変勉強になった。

・地域滞在型は始めての取り組みで、宿舎等についてはホテルを用意したが、長期にわたる為、もっと気軽にリラックスできる方が良かったようである。

・九〇年代の演劇と言われている「静かな演劇」の実践と



劇団新劇場 「ゴジラ」 (札幌)
(大橋泰彦作・山根義昭演出)



劇団湖 「ナナカマドの挽歌」 (三笠)
(秋庭ヤエ子原作・渋谷健一脚色・加藤元演出)



劇団海鳴り 「流水の来る町」 (紋別)
(渋谷健一作・神山昭演出)

公演は、大変意義があった。

(4) 企業の文化支援

①企業寄付でなく、入場券三回券三枚(九〇〇〇円)の購入依頼による、社員や家族を含めての文化福利事業の提案とお願いについては、二三八社の企業、個人に協力いただき、あらたな観客の掘り起こしとなった。

(5) 各助成団体の支援

①各助成団体より多くの支援をいただき、演劇祭が大成功に終了した。今回の演劇祭は、現在の北海道の演劇状況を、上演作品は元より地域演劇のあり方と各地域が置かれている現状の中で、芸術・文化の存在意義と役割について演劇を通しての実践が大きな目標でありました。シンポジウム・ワークショップを加え、企画が先行し、その費用負担及び助成・共催支援を依頼していった。企画



市民参加+東風+SEDET (大学演劇部)
「アイスクリームマン」 (釧路)
(岩松了作・岩松了、前田慶演出)



劇団ZERO 「寝盗られ宗介」 (釧路)
(つかこうへい作・菅野秀哉演出)

実現の為の意志が各助成・共催団体の理解を得たと考えらる。

財団法人地域創造三、五〇〇千円

北海道文化財団三、三〇〇千円

芸術振興基金五〇〇千円

釧路市一、五〇〇千円（総事業費一五、二三三千元）

(6) 当日の運営については全体的には（上演時間・舞台仕込み・受付等）スムーズに進行したと思うが、細部については問題があった。開催前の打ち合わせが不足した面があった。

事業内容

①演劇公演 一一劇団

○地元劇団 四劇団

・岩松了氏をむかえ、地元青年四十名による「アイスクリームマン」を劇団東風を中心に。

・聴力障害者、釧路演劇集団、手話の会による手話劇の上演。

・劇団北芸・劇団ゼロの上演。

○道内劇団 七劇団

・劇団さっぽろ・劇団シアターII・劇団新劇場・劇団にれ（以上札幌市）

ドラマシアターども（江別市）

劇団湖（三笠市）

劇団海鳴り（紋別市）

②ワークショップ（市民対象）中島茜氏（劇団風の子北海道）

③シンポジウム

テーマ「演劇によるまちづくり」（市民対象）

パネラー

衛紀生氏（演劇評論家）

森啓氏（北海道大学法学部教授）

飯田信之氏（演出家・北海道演劇集団創造委員長）

中野健氏（演出家・全リ演議長団）

コーディネーター

鈴木喜三夫氏（演出家・北海道演劇集団加盟）

・ゴンちゃん劇場（釧路市）

参加団体

①北海道演劇集団加盟劇団 一五劇団四個人延べ二八〇名

②その他

北海道文化財団 三名・北海道演劇財団 二名

全日本リアリズム演劇会議 二名

道内他劇団 三劇団 一〇名（事務局確認分）

北から 南から 劇団通信

【関西芸術座】

今年に劇団創立四十周年を迎える。

去る二月一日、大阪市立中央公会堂で、祝賀パーティーを開催。こばやしひろし、後藤陽吉、藤沢薫、梶武史の議長団。城谷護、熊本一の事務局長、次長らをはじめ全リ演の仲間たちも出席。こばやし議長には鏡開きに加わってもらった。広い会場に約三〇〇名も集まり盛況裡に記念行事のセレモニーを終えた。記念公演第一弾は、劇団内の新しい作家、坂本真貴乃の創作「木の咲くとき」を大井敦代・演出で3月19日、23日、関芸スタジオ公演。

この戯曲は94年度文化庁の創作奨励賞佳作に入選し、今回さらに加筆したもので、多くの期待がよせられている。

第二弾には田辺聖子作、ふじたあさや脚色、

道井直次演出による「お母さん疲れたよ」を8月29・30日、エル・シアターで大阪労演例会として上演。全国演鑑連の巡演をめざしている。

関芸おなじみの田辺作品であるが、ふじたあさや氏脚色という新たな企画への関心が強い。

第三弾は、好評中の「蕪いんご」につづき中学・高校及び一般公演にむけて「遙かなる甲子園」戸部良也原作・西岡誠一脚色・鈴木完一郎演出を9月末、試演会。98年度巡演を予定している。

作品は、実話を元に漫画や映画にもなった聴力障害を持つ高等部の生徒たちが、野球部をつくっていく感動的な物語りを、今回は青年座の鈴木完一郎氏に演出をお願いした。

第四弾は、シェイクスピアの「ロミオとジュリエット」を岩田直二演出で、12月12、13日近鉄小劇場で上演。

劇団にとって、初のシェイクスピア作品であり、かつて土方与志氏演出で、ロミオ役に岩田直二が出演したことがあった。

以上が40周年に向けての新作群であるが、劇団の40年の歩みの資料を作成、歴史をふりかえり、今後の活動にむけて国内での議論の

場を計画している。

【劇団だいこん座】

春の公演は「ブンナよ木からおりてこい」を五月十七日（土）に鶴岡市中央公民館ホールにて公演する予定で稽古に入っています。だいこん座の力量ではなかなか大変な作品なのですが、幸い何回か公演しているという劇団弘演よりいろいろの援助を受け歌や踊りの稽古も始まっています。水上勉さんの原作で小松幹生さんの脚色なのですが、「生と死」「転廻転生」などが出てきて奥の深い内容なので、知り合いの和尚さんと呼んで「転廻転生」についての学習会を開いて勉強しています。

中学一年生の女子が入団してきました。みんな平均年齢が下がったといって喜んでいますが、なによりも古い劇団員にとっては活力源になります。

【劇団湖（うみ）】

92号に寄稿せず古い内容になりますがお話しを。昨年は「ナナカマドの挽歌」（前編・大雪山の母子）を5ステージ上演しました。

これは旭川市在住の秋庭ヤエ子さんの手記（実子殺しの罪業を背負い逆境を生きぬいた愛と痛恨の半生記）を、シアターIIの渋谷健

一氏が脚色し加藤元が演出したものです。

9月28・29日は地元三笠での一般公演、翌30日は学校公演(市内の中学生の観劇会)を経て10月12日に釧路市で開催の北海道演劇祭で発表することとなり、劇団支木の中野健さんと劇団大阪の熊本一さんにも観て頂き光栄と汗顔が相半ばしました。その後11月17日に隣り町の美幌市(原作者の出生地)でも公演されましたが、相変わらず道演集の仲間等9名もの客演(釧路では劇団さっぽろの飯田信之氏も出演)にすがり何とか切りぬけることができました。今年後は後編になるのでしようか。目下、江別の劇団川公演(3月1・2日)の「静けき河の岸辺」に劇団員5名が客演として参加しているところです。

【劇団海鳴り】

新しい年が明けて、もう二月も中過ぎ、叙別は流水がびっしりとオホーツク海を埋めつくし、砕氷船ガリンコ号Ⅱも大活躍です。仲間の皆さん是非一度御来紋下さい。

さて、昨年は創立三十周年記念行事をすべて終え、オリジナル作品三作目となった「流水のくる街」も好評の内に幕を下ろす事ができました。又記念式典には道内及び市内の関係者約百二十人が出席して下さい、昔の仲間

と思い出話に花を咲かせて楽しい一時を過ごすことができました。

劇団の定期総会を四日に行い、今年度の活動方針その他を決定。昨年の春から、若い団員で一本芝居を創ってみたいとの話があがっており、まずは四月と六月の春の移動公演に向けてスタートしました。年長者は口も手も出さず見守る事になりますが、やる気満々の若者達の舞台今から楽しみます。(我孫子)

【劇団サークル麦の会】

全り演の皆様、如何おすごしですか。年あけから、ペルー人質、ロシア船の油流失、オレンジ共済と次から次へと私共の前に事件が立ちほだかり、めまぐるしい日々です。それにして消費税、医療費のアップには困ったものです。ハラの立つことしきりです。

さて私達、麦の会も今年で創立44年になります。一月末には定期総会で、そういった長い間の積み重ねと、これからの活動をなどなど話し合いました。一体どこまで続けていけるのかを含めて、更に前進していくしかないというところで、いよいよ今年も始動します。現在は、総会の討議をふまえて、秋の公演の台本選定の作業をやっています。全員で出し合い、全員で討議、全員で決めることで、い

ままでもやってきていますが。案外この作業は思ったより大変で、毎年悪戦苦闘の末決めています。ガンバリます。よろしくおねがいします。(吉岡 利根雄)

【劇団すがお】

寒い日が続きます。時々雪のために稽古が臨時休業したりしますが、元気に活動中です。

さて、先に行った公演の報告から。

『ONとOFFのセレナーデ』

古城十忍/作 加藤武夫/演出

11月30日(土) 12月1日(日) 2ステ

桑名市コミュニティプラザ 観客五百人

この企画は、桑名文化スポーツ振興公社との共同企画で今年で3年目の30万円の助成金がありました。それが今回の回転資金として活用出来そうです。観客動員が少し落ちましたが、パソコン通信を背景に、人の死や葬儀のあり方をめぐる面白い作品で、なかなか好評でした。

私営の葬儀場のオープンセレモニーとしても公演し好評を博しました。観客約二百名。

◇次回公演

ななわ小劇場(稽古場公演)

5月23日(金) 25日(日) 4ステ

『トランス』

鴻上尚史/作 なんと/演出

『ここだけの話』

高橋いさお/作 加藤武夫/演出

新人の演出「なんと」を迎えてどんな作品になりますか。ちょっと大変な二本立て公演ですが、頑張りたいと劇団員の決意です。

第2回演劇塾準備中です。

8月7日(木) 桑名市民会館

劇団名芸の栗木英章氏に作品を依頼中。

出演者は公募の市民と劇団員。

*「韓国文化祭」のお知らせ

韓国から、劇団馬山を迎えて国際交流を準備しています。作品は、喜劇『ペピジャン』

韓国の古典を現代風に演出した作品で、大変に面白そうです。昨年、劇団あしぶえのしいのみシアターで上演) 夏のフェスティバル楽しみにしています。全国の仲間との出会いに期待して。

【宇部市民劇団若者座】

十月十九、二〇日、自立の会の「ちらい」を上演。大いに笑っていただきました。これからの予定。昨年夏に早坂暁作「失われし時を求めて」(NHK、TV)を天羽新平が、

「私を返してくださいーヒロシマの心」と脚色上演。それが六月四日、宇部商業高校開校七〇周年記念行事で再演することが決まりました。もう一度、脚本から直そうと、意気こんでいるところです。

【劇団コーロ】

皆さんこんにちは。昨夏の総会では特別報告の中で劇団の率直な実情を明らかにし、職業劇団としての苦悩の一端がおわかり頂けたかと思えます。九七年二月には劇団総会を開き、新年度の活動方針を決定し新運営委員会を選出しました。

消費税5%への増税については昨年の総選挙で国民的な規模による「ノー」の意志表示がなされていたにも関わらず強行され、ゆとりのない学校教育の中で公演形態の変化など、劇団経営をめぐる情勢はより一層きびしいものがあります。もう一つの大きな問題は人材の確保が急務である事。新しい俳優を発掘し育成すると共に、若い世代の人達が退屈しない劇団に如何につくることが焦眉の問題になってきています。

私達の目の前にある壁はとてつもなく大きいものです。しかし、生きるために、子どもたちに良質の文化を届けるために壁を

突きくずして前に進まなければなりません。やるしかないのです。

今年も三本の新作をつくりたい。小学校作品として「まよいねこの森」(作・み群杏子、演出・右来在往)、「朝やけ色ってどんな色?」(作・演出・西田豊子)の二作品と、一般公演として平右耕一脚色、演出による新作(タイトル未定)などを予定しています。その他にも続演作品の上演やアトリエ公演など上演日程が目白押しです。作品を創る中で新しいドラマの世界を見つけ出し、より多くのお客様と出会いたいと願っています。

コーロは今年も走り続けます。これからもよろしく御願います。(文責・坂口勉)

【劇団上野市民劇場】

全国の皆さんお元気ですか。お久しぶりです。朝夕の冷え込みが格別に厳しかった伊賀盆地にも、露のとうが、もっこりと頭を出して春を告げています。

前号に通信をバスのため少々漏れて近況を報告いたします。

昨年十月に、劇団創立四十五周年記念として「イーハトーボの劇列車」(杉森正美・演出)を公演、長年の夢であった廻り舞台も実現しOBの出演などで記念公演にふさわしい

ものとなりました。

直ちに十一月は、五年ぶりで韓国での国際演劇祭に参加して新作狂言の上演と他国の舞台を学んで来ました。回を重ねる毎に友情の深まることは意義深いことで全り演でも積極的に進めてゆきたいと思えます。

今年に入り一月に何とか劇団総会を開催しましたが年内の公演は日程のみで作品が決まらないという遅れをとっています。しかし一方では一昨年来より地元有志による骨髄移植ボランティア公演に劇団を挙げて協力しています。(二月二十二日、四日市公演)

地域に、演劇をする仲間が増えつつある中で如何に劇団に新人を迎えることができるかを最重要課題として劇団の活性化と創造の方向を明確にする年にしたいと願っています。

【演劇集団和歌山】

二月七日に鐘下辰男作・水口広平演出により「ワンス・アポン・ア・タイム・イン京都」錦小路の素浪人」を上演しました。観客数は二〇〇と、また赤字になりそうですがいい舞台になり、好評でした。

これからの予定は、三月二十二日に、福井でのアマチュア演劇祭に「花いちもんめ」で参加、五月三日に、憲法施行五〇周年記念行

事、合唱構成劇「五月の陽光(ひざし)」に協力出演、また十二月には「イーハトーボの劇列車」の上演が決まっています。

【黒石演劇研究会】

北国「津軽」の二月は、一年でもっとも寒さが厳しい時期です。春が待ち遠しく感じる今日この頃、全り演の皆さんいかがお過ごしですか？

さて、昨年の定期公演・創立五十周年記念企画「きしだみつお・作、中辻鉄雄・演出、北のうたー鳴海要吉・その愛と苦悩」は、「劇団OB」・「黒石児童劇団」の出演協力を得て十月十三日無事幕を降ろすことが出来ました。観客数の伸び悩みや資金不足という問題を抱えながらも、県内の資料館の協力を得て「ロビー資料展示コーナー」の設置など新しい取り組みもありました。

今後の活動はこれからの劇団総会で決定しますが、今のところ秋公演「アンネの日記」が候補作となっております。今年もよろしくお願ひします。(担当 古川)

【劇団やませ】

暖冬・暖冬と言いながら、やっぱり冬は寒いのです。特に稽古場が……。フアン式一台、

対流式三台。でも、ブルブルブル……。大きな暖房設備は夢のまた夢。気持ちで頑張るしかありません。

昨年の十一月十五日・十六日公演の、笹谷伸夫作/加藤健太郎演出『女が自立を意欲したとき、女の人生が動きだした』と「子が無事終了しました」。

八戸出身で、日本で最初の新聞記者・婦人の自立を旗印に創刊した「婦人の友」・新しい教育をめざした「自由学園」創立・等々、明治・大正を駆け抜けた羽仁もと子の三十歳前後の四年間にスポットを当てた物語です。

おかげさまで、好評で、すぐ再演の声が上がりました。可能かどうか分かりませんが、高校生にも見てもらおうと働いてみようかという話や、来年から再来年の市民劇場の例会にどうかという話もあります。「やませ」の財産として大事にしていこうと思っています。

そのために舞台装置をとっておいっているのですが、大がかりな装置のため、稽古場が狭くなって困っています。なんとかしなければ、お客さんも二日目は立ち見がたくさん出るほどで、三ステージまでもう一息というところ。現在、二月二十二日に、工業高校定時制の文

化祭で『海村』を公演し、六月あたりに予定している、稽古場でのアトリエ公演加藤健太作/演出『短き眠り』に向けて、着々と準備を進めているところです。

九月二日に市内の小中学校での演劇教室、十一月月上旬に八戸市民劇場例会『前原寅吉の夢/我が内なるラビユータ』が控えており、ゆっくりしているヒマはなさそうです。

【劇団やまなみ】

三月九日(日)の公演に向けて、稽古中です。山梨県教育委員会主催 移動芸術劇場 都留公演(劇団やまなみ第一七二公演) 「お世話料〇円」二幕六場

「オレたち生涯現役!」 作/河野通方 演出/きたりもん 於 都留市文化ホール 客席数 八二八席 午後二時 開演(一回) 上演時間一時間半 入場料 県教委の助成による公演のため無料 会場費・器具使用料・アゴ代等、地元負担

特色 今回の公演は、昨年の春の同公演を観た「福祉を考える会」のメンバーが、市に働きかけて実現した。従来、学校公演が主体でプラスα一般で、動員についても、地元役場(教育委員会等)にお任せで、結果、助成目当ての消化公演となりがちであ

つたが、今回は、従来より望ましい方向の公演が組んでいます。しかし、劇団の対応は、充分といえません。稽古も、順調に進められてはいません。劇団は、四十二歳にして金属疲労状態にあると言えます。

例年一月開催の総会を(期末が十二月)公演後の三月下旬に延期し、『地域劇団』の存在理由、存在価値、更に、そこに参加することの意味について、時間をかけて論議します。

【劇団未来】

昨年11月16・17日、22・23・24日に劇団未来ワークスタジオにおいて山田太一・作「LOVE」を上映した。いつも比べ観客数が若干少なかつたものの8ステージを無事に終えた。この「LOVE」で沢比呂子役を演じた森田祐利が新劇協同協議会から女優奨励賞を受賞した。現在は2月21・22・23日に近鉄劇場にて上演予定の新劇協同公演菊田一男・作「がめつゝい奴」に上田、天野、則清を中心に参加している。また劇団未来初の試みとしてプロデュース公演が企画されている。

演出は初めてになる吉田実を軸とし、3月7・8・9日ワークスタジオの上演に向けて稽古に励んでいる。台本は第一回OMS戯曲

賞を受賞した松田正隆・作「坂の上の家」。(森田)

【劇団名芸】

二月六・九日、名古屋劇団協議会(名劇協)の合同公演『桜の園』を打ち上げたところ。客数約千八百人、舞台成果のまとめはこれからですが、チェーホフ劇の難しさ魅力をあらためて感じました。

さてその間準備を進めていた名芸の新人連による新人公演を次のように行います。

『銀河旋律』

作/成井豊 演出/梶谷千枝 三月二十二・二十三 名芸平針小劇場

引き続き名劇協若手による合同公演『愚者には見えないラ・マンチャの王様の裸』(作/横内謙介 演出/菟谷直樹)を、五月六日(十一日、名演小劇場招待公演として上演します。また、恒例の「反核舞台人の集い」、97の舞台も八月にひかえています。

名芸は今年創立三十五年を迎え、秋には記念公演を計画していますが、その前に地元天白区(あの一月の市議補選で全国に話題となった)に待望の文化小劇場が完成し、名芸が中心団体でもある「天白文化フォーラム」として、開館記念公演(こけら落とし)を次の

ように行います。

太白の昔話より、音楽劇『地蔵ものがたり』

脚本／栗木英章 演出／佐野秀明

六月二十一日・二十二日 太白文化小劇場

専門家や地元合唱団と協力しての大きな仕事になります

あれこれと走り続ける一年になりますが、古手のがんばりと若手の台頭で、次代へとつなげる集団と舞台創りに励んでいきたいと思っ

【劇団かすがい】

早いもので、自前の稽古場を持つてから2月10日で1年が経ちました。血管が切れそうなほど忙しい日々でしたが、これからもまだまだ続きそうな予感です。団員を増やす事、観客を増やす事、器材を充実させる事、劇団の名前をもっと地域の人に知ってもらう事など、課題てんこもり。

1月24・26日に新春公演『殿がしい子守歌』を終えました。あと5月・12月に稽古場公演、9月は久しぶりにピッコロシアターを使って、と公演が目白押し。

おまけに!! 4月から、研究生第一期生を募集してしまおうという一大プロジェクトも進行中!!

去る2月11日、総会を開き具体化あれこれを決めました。

もちろん、兵庫での演フェスもぼつちり、にらんでいます。小教精鋭、裏担ぎ頑張ります。

全国の皆さん!来てね!

というワケでーやっぱり貧乏ヒマナしです。(前回と同じオチ:)

*五月9・11日かすがい稽古場にて

『河童証文』

【劇団からつかぜ】

遠州のからつかぜが吹く中、稽古場のすきま風に身を震わせて、踊りをおどったり、歌をうたったりと寒さを吹き飛ばして、練習に励んだこの作品「ジブシー、千の輪の切り株の上の物語」も十一月二十三日福祉文化会館の上の物語に、十一月三十日入野中学移動公演を皮きりに、十一月三十日入野中学移動公演そして二月十五日十六日アトリエ公演で無事終了しました。

現在、公演の反省をして、三月下旬に予定されている総会の準備にとりかかりつつあります。

次の作品も決めていかなければならないしホッと息つく間もなく来年度にむけて、活動開始です。

にも大きく助けられた上演であった。

この通信を書いている今、劇団作家、小原輝夫による「トム・ソーヤのぼうげん」の脚色台本の最終稿が完成、印刷、六月七日(土)、市民演劇祭にむけて、劇団は稽古に入

三月十五日、県演連の講習会に森脇京子作「鮮やかな朝」をモデル上演をするため、演出伊藤幸夫と俳優二名がこれに参加する。

【劇団生活舞台】

昨年の十一月の「乞食と王子」は、作品内容、観客動員とも成功裏におわり、ホッとしました。

でも休む間もなく、劇団では、新しく公演を企画しました。昨年入団した若い劇団員を中心に「白い晴着(一幕)」「ポール・グリーン作」を三月十六日(日)岩田屋ZISSID E夢天神ホールにて、若い世代が競い合いながら一つの作品を二班編成で上演します。

また演出には、これまで役者をやってきたいる平原義行があたります。新人俳優諸君は、眼をらんらんと輝かせながら役にとりくんでおられます。いま、私たちは初心にかえって創造と劇団の体制づくりの総力をあげて取り組んでいきたいと思っております。

【劇団四代会】

恐るべきインフルエンザが猛威をふるった今年の冬、無事に乗り切られましたでしょうか。

さて、前号でお知らせしました、年末殆ど毎週公演をクリアし、「よいお年を」と挨拶したのも束の間、一月二十五日(神戸すずらんホール)、二月二日(兵庫県民小劇場)の百四回公演「火ようびのこちそうはひきがえる」(ラッセル・E・エリクソン作、四代会構成、演出)、「木竜うるし」(木下順二作、岸本敏朗演出)に向けて、正月三日から稽古開始。制作以外のスタッフは、本番の二〇日前に殆どゼロからのスタートという極限状態での公演となりました。本当にどうなるかと思いましたが、お陰様で御好評を頂き(言う迄もなく課題は多々あり)、震災後再開して今回(第二回)が本格的な復活となった家族劇場も、今後に向け、一つの弾みがついたと言えそうです。

引き続き、「火ようび」は、二月十五日

石屋小学校(淡路)でも上演し、更に三月一日は出合小学校(明石)、「木竜」は夏休みにコープこうべ生活文化センターでの公演が決まりました。目が回るなんて言っていた

楽しくて、元気が出て、肩がこらなくて、観たあと何かを感じてもらえるような作品を、やれたらいいなと思っっています。アッ!!ってんこ盛りかな? (飯島 けい子)

【劇団静芸】

前号の劇団通信、公演まったただ中で通信出

来ず失礼いたしました。昨年十一月十六、十七日、静岡県ふじのくにフォーラムに参加。「思い出のブライトンビーチ」(ニールサイモン作・鳴海四郎訳)(演出伊藤幸夫)の公演は、二時間三十分の大作、サールナートホール(席数二〇〇)三ステージともに満席の観客に支えられ、無事終ることが出来た。

大変好評で、二時間半、時間を感じさせない集中をつくる事が出来た。「若い人とベテランのアンサンブルが生まれ、特に若い俳優の成長に拍手」「アメリカの作品だが、家族のありかたに日本の家庭と、おり重ね考えさせられた」

等の沢山の批評感想が寄せられた。はじめてのニールサイモンの作品上演であったが、みんな好きになれた上演であった。

また沢山の専門スタッフに支えられ、共同する関係の中で、質的にも高いスタッフ体制

らゼイタクでしようか。

続いての百五回公演「頭痛肩こり樋口一葉」は、八年ぶりの再演。と言っても、一人を除いて全て新メンバーかつ一部ダブルキャストでの上演です。こここのところ続いている観客数の減少に、歯止めをかける舞台にせねばと肝に命じているところです。

七月の演劇教室卒業公演(演目未定)を経て、八月はいよいよ全リ演劇フェスティバルが、私たちの地元神戸で開催されます。詳細は、これからニュース等でお知らせしていきますので、多くの参加と充実した内容での成

功に向け、頑張りますよう!! 最後になりましたが、四代会はお陰様で本年創立四〇周年を迎えます。記念事業は来年が中心になっていくと思いますが、一つの筋目の年として、奮闘して参りますので、どうぞ宜しく御願ひ致します。

では本当の最後に、前述の分も含めた公演案内をお届けします。(里中)

◇第百五回公演

井上ひさし/作 梶武史/演出

「頭痛肩こり樋口一葉」

六月五日(木、予定) 八日(日)

神戸アートビレッジセンター(四回公演)

◇神戸働くものの演劇教室

第二十八期卒業公演

演目未定

七月十九(土)〜二十(日)

神戸シーガルホール(二回公演)

【劇団集団 あり】

昨年十一月二十二日 米子市文化ホールに於て、米子市文化祭参加公演として、砂本量作「レンタルファミリー」を上演しました。

演出は久々に活動に復帰した、鳥越永美子、交替勤務の仕事と、主婦の困難な時間を克復してやりました。

観客の評価は好評でしたが、観客数二百名程と低く、長年協力してくれていた人からは「何故、以前のように観客が集められないのか頑張った良い舞台を創っているのに残念だ」と、励ましとお叱りを受けました。

新しい仲間が多くなっても、創造面や組織面で、今まで積みあげて来たものの、継承の不足を反省しています。

現在の一面面のみを見た活動ではないのかとの、指摘もありました。

色々な問題も残念ながら、五月三十一日 米子市文化ホールに於て、森田有作「ちらい」を、若手の矢吹誠浩演出で行います。

地域に根ざした演劇活動を進めるため、雪の中を週二回の稽古を進めています。

(宮倉)

【劇団群馬中芸】

ここ「あかぎ未来スタジオ」には、まだまだ冷たい赤城おろしの風が吹きつけ、数日前に降った雪が林の影で白く凍っています。

今年から、毎月第二土曜日に、若手劇団員の制作で「第二土曜劇場」をスタートさせました。これはこのあかぎ未来スタジオで毎月第二土曜日に定期的に親子を対象に公演するもので、二月は新作の「郵便屋のテクルさん」と宛名のない手紙」(作・中村欽一 演出・ふじたあさや)を上演いたしました。

未来スタジオが出来て9年目を迎え、もつともっと人と人との絆を結ぶ劇場として、こうした定期的公演を目指していきたいと考えています。

毎月となると宣伝やチケットの普及が日数がなく大変ですが、たとえ最初はお客さんの数が少なくとも、この公演を定着させていきたいと、若手劇団員が夢に向って活躍しています。

この「第二土曜劇場」の当面の公演予定は、三月八日(土)が「ちよつと昔の物語」

(作・中村欽一 演出・ふじたあさや)、四月十二日(土)、「カチカチ山の理どん」(作・中村欽一 演出・せらだひとし)、五月十日(土)、「バナナベ、バナナベむかしがたり」と続きます。

また、五月三日から五日の連休日には「春のこども劇場」「郵便屋のテクルさんと宛名のない手紙」の公演を予定しています。皆様の御来場をお待ちしております。

(秋山としひと)

【劇団息吹】

96年秋公演「へのへのもへ」は千名を超えお客様に観ていただいたにもかかわらず赤字公演となってしまいました。やはり会場費等の負担はかなり大きくなっています。この上、消費税が5%になればどうなってしまうのか？ますます芝居が削りにくくなってきそうです。(ちなみに公演中「消費税5%反対の署名」を置いたところ観客の1割の方が協力してくれました。ただ、置いておくだけです！)

そんな中でも芝居を創っていくことが私達の活動という訳で春公演は次のとおりです。

「ちらい」 森田 有/作 大坊晴彦/演出

97年5月23日(金)〜25日(日) プラネットステーション

【劇団あしぶえ】

我が劇団二回目のプロデュース公演となった、韓国の劇団「馬山」の舞台は、しいの実シアター満席のお客様で幕が上がった。昨年十二月七日(土)八日(日)のことだ。前日から冷え込んだ八雲村は、七日の午後になつてモーレッツな吹雪となり、見る見るうちに積もり、一面真っ白となった。「馬山」の季代表は「お客が来れなくなるのでは…」と相

当心配しておられたが、両日共に大入り。私達も大成功を喜び合った。喜劇である舞台は言葉の壁はあるものの、開幕して十分も経つと韓国語の美しい響きが、なんともいえず味

わい深く面白く、加えて表現力豊かな役者の表情、美しい動き、体のしなやかさなど、観客は大満足だった。総勢十一名の団員のホームステイのお世話や、村の方々と交流会の企画運営など公演以外の仕事も多かったが、忙しかった分だけ心に残る公演となった。

さて、年新たまって早や二月。八雲村では雪の降る日が続く。「凍結して帰りが怖い。」と言いながらも、皆シアターに集まって来る。あしぶえは五年ぶりに新作に取り組むことに

なった。平石耕一作の『プラボー!ファープル先生』だ。演出は園山土筆。キャストにはなんと俳優の上田忠好氏が加わって下さることになり、たぐいまれい合わせ稽古の最中である。しっかり演技を学びたいと思う。昨年末にやる気のある新人五人が増え、稽古場は更に活気づいている。

今後の予定は次の通り。

- 「セロ弾きのゴーシュ」公演
- 4/13(日) しいの実シアター
- 6/15(日) 兵庫県大屋町おやおホール
- 7/20(日) しいの実シアター
- 「わいわい太鼓」公演
- 8/24(日) しいの実シアター
- 「プラボー!ファープル先生」シアター公演
- 10/26(日)、11/9(日)、11/23(日)、11/24(月)

詳しくはシアターにお問い合わせ下さい。

(伊藤 寿子)

【東京芸術座】

今年四月から、消費税率5%へのアップが企及されていますが、劇団にとっては死活の問題であると同時に、芸術・文化に税金をかけるとは言語道断。そこで、「消費税の税率アップに反対する演劇人の会」に参加してい

る当方も参議院議員委員会館へ税率アップを中止させる要請行動を行いました。

作夏の総会以降は、九月の「家族」(平石耕一作・演出)終了後、二班の旅公演(「二人の怒れる男たち」と「あわて暮やぶけ芝居」)を年末まで。定例十二月アトリエ公演は「マグノリアたちの朝」(作/ロバート・ハリソン訳/青井陽治 演出/高橋左近)

年明けて、「冒険者たち」(原作/斎藤惇夫・脚色/平石耕一・演出/杉本孝司)が全国子ども劇場・おやこ劇場例会公演で四月初めまで。四月八日(火)練馬文化センターで自主公演。続いて「橙色の嘘」(作/平石耕一・演出/早川昭二)は全国演劇連中Bと首都圏B例会で三月から五月のロード。自主公演は六月六日(日)、俳優座劇場で。五月

七月は学校公演二班の旅。「十二人」と「あわて暮」。村山知義没後二〇周年記念公演は「死んだ海」(作/村山知義)を九月に、頑張らねば。

(文責・郡司)

【劇団潮流】

御無沙汰して申し訳ありません。劇団員一同何とか元気で。一月十日から三日間、大阪の帝人ホールで「NIPPON漂流」という芝居を上演しました。その準備で、昨年暮

れから年の始めとあわたたく、とても正月
どころではありませんでした。その作品が大
阪新劇フェスティバルの作品賞に選ばれ、劇
団員の苦勞もむくわれることとなり、今年
幸先の良いスタートになりました。

これは、九月より高校生、一般向けの作品
として巡回公演を行います。お近くでの公演
のおりは一度見ていただき、感想など聞かせ
ていただけたいと思います。寒い日が続きま
すが皆さんお元気で。

【劇団はぐるま】

まずは「新島の飛騨んじい」公演報告から
致します。岐阜と高山で二ステージづつの公
演で岐阜では二一六〇人、高山では二〇一
人の観客動員でした。高山は主人公甚兵衛の
出身地でもあり、遠く新島からも町長を始め
二〇数名の方が来て頂きました。もともとた
さんの新島の方に見て頂きたくて、東京公演
の話もあるのですが、今年はお場の都合が悪
く、来年に延期されました。関東地区の皆様
公演が決まりましたら、その節はよろしくお
願い致します。

現在は鐘下辰男作、POP CORN N A
V Y 鹿屋の四人の追い込み状態です。昨
年暮れから稽古を始め、キャスト・スタッフ

とも若手を中心にして本番を目指しています。
特攻隊を題材にした、セリフ中心の難しい芝
居ですが、その分やり甲斐もあり、この公演
を乗り切ることで、皆大きく成長出来ると思
います。

公演日程は、三月七、九日、一四、一六日
で、金曜日は午後七時、土曜日は二時、七時
日曜日は午前二時と午後二時の計一〇ス
テージで、場所は御浪町ホールです。

(内田 薫)

【劇団名古屋演集】

劇団演集公演「日本の面影」(山田太一作、
北原雅子演出)(九六年十二月六日から十二
月八日迄愛知芸術文化センター小ホールで)
も無事成功に終わり、明るい新年を迎えるこ
とができました。今年に入ってから演集とし
て初の行事「新年宴会」を開いた所、たくさ
んの方々に参加して頂き、楽しい会にするこ
とができました。有り難うございました。

九七年に入ってから名劇協合同公演「桜
の園」(アントン・チェーホフ作、木崎裕次
合本・演出)が名古屋芸術創造センターで
二月六日から二月九日まで行われた。これは

演劇人冒険舎の木崎裕次氏の名古屋芸術特賞
受賞記念であった事が公演の目的であった

(木崎さんおめでとうございました！)

さて、演集は今年が創立四九年目です。来
年五〇周年を迎える訳です。残念ながら具体
的な内容を報告できませんが、今年の秋頃に
記念行事として公演を予定しています。次号
には内容を掲載できると思いますので期待し
ておいて下さい。

また話が変わりますが、今度、名劇協の若
手を中心に五月八日から合同公演を行います。
団体名「名古屋劇団協議会・若手」では余り
芸が無過ぎるということできめました。そ
の名も「NGキッズ」！内容を左記に紹介し
ておきたい。

「愚者には見えないラ・マンチャの王様の
裸」横内謙介作 茹谷直樹演出(予定)、公
演日五月八日(木)、九日(金)、十日(土)
十一日(日)四日間 名演小劇場、これまで
になかったタイプの芝居づくりを目指して頑
張っています。(磯谷 誠)

【釧路演劇集団】

私たち釧路演劇集団は、昨年の十月の第十
七回北海道演劇祭を終え、ホツとしている所
です。昨年、一昨年と大きな取り組みがあり、
今年には久々に劇団の公演として、十月四日・
五日に「アンネの日記」に取り組み予定です。

戦後五十年が過ぎてそれぞれの取り組みがあ
ったが、またぞろ話題にならなくなり、それ
にも増して戦争の事実が一部の人間達により
ねじ曲げられようとしている動きや、米軍の
矢白別演習場への移転問題があり、この作品
を通して考えていきたいと思っています。創
造的にはせりふと舞台での動き・人間の実在
性の演技についても課題として取り組みたい
と考えています。

また、けい古場の老朽化があり新築(プレ
ハブ)に向けて検討に入ります。(尾田)

【劇団名古屋】

'97年は、名古屋劇団協議会合同公演「桜の
園」(チェーホフ作、木崎裕次演出)で幕を
開けた。全キャストが揃ってから二月六日の
初日までの稽古期間は二ヶ月弱。全ダブルキ
ヤストで、専門劇団を中心とした昼間の稽古
組と夜間稽古組に分けられたが、夜間組の
実稽古時間はうんと短かったに違いない。か
ける情熱は同じでも、具体的に演劇にさける
時間の足りぬ状況の中、どんな知恵を駆使し
て本番までを熟成させていったらよいか、
相変わらずの課題を更に深めた公演であった。
が、他劇団の人たちとの共演は刺激的で面白
く、得るところ大の公演でもあった。感謝！

さて嬉しい報告をひとつ。「松原英治、若
尾正也記念演劇賞」の第一回受賞者に劇団の

久保田明が選ばれた。昨春公演「早春スケツ
チブック」の演出に対しての受賞である。故
松原、若尾さんは、名古屋の演劇を産み育て
てこられた方。この賞はそのお二人の業績を

記念し、遺志を受け継ぎ、更に名古屋の演劇
を豊かに発展させようと、若尾隆子さんの尽
力で創設されたものである。想いの深い記念
の賞の第一回受賞者に選ばれたこと、本当に
嬉しく励まされた感じがする。劇団も創立四十
周年。更に良き舞台をと、身も心も引き締め
ての早春の稽古場である。(矢野弘次が全リ
演運営委員の重任を果たした。永い間、本当
にお疲れさまでした。)(ことうてるよ)

【青年劇場】

今年の公演は、二月紀伊国屋ホールでの
「唱歌元年」が、幕開きとなります。この作
品は、青年劇場が九四年に募集した創立三〇
周年記念創作戯曲賞で入選したものです。

舞台は明治一三年、文部省に音楽取調掛が
置かれ、小学唱歌制定の準備が進められると
ころから始まります。慣れない洋楽と悪戦苦
闘する若い掛員たち、道徳教育を盛り込もう
とする天皇側近、キリスト教宣教の疑惑を採

ろうとする密偵、さらには、自由民権運動に
参加して一揆を起こし追われる男など、維新
後の動乱期を生きる人々が、錯綜しながら登
場します。唱歌制定に次代への夢をかけた
人々の姿を、喜劇タッチで描きました。
二月七日から二三日まで二一ステージ
於、紀伊国屋ホール
二月二五日、二六日の二日間、吉祥寺の前
進座劇場です。

公演成功に向けてクラシック関係者特に音
楽家を中心に三百人の方々に、唱歌について
のコメント依頼を送ってこの作品にふさわし
い広がりを作ることが出来ました。

東京公演が終ると間もなく、地方公演への
旅班が発発、高橋正樹・松波喬介演出「キッ
スだけでいいわ」が三月五日、三重県いせ演
鑑を皮切りに中部、北陸の演劇鑑賞会及び労
演、市民劇場を回って四月五日帰京の予定。
(二八ステージ)。

五月の「こんにちかはかぐや姫」は、「青春
の誓」「手紙」「鎮江の英雄たち」「椰子の実
の歌がきこえる」また最近では、飯尾憲士原
作による「殺意」などの舞台を通じ、戦争の
本質を戦争の知らない世代に語り続けてきた
瓜生正美が高校演劇や全リ演でも活躍中の北

野渡氏の原作を得て、中国残留孤児の歴史と現在に迫りながら、真実に触れることで、新たな歩みを始める高校生群像を暖かい目で描く期待の新作！

五月一六～二二日 朝日生命ホール

五月二四、二五日 前進座劇場

五月二六日 かめありリリオホール

で上演いたします。

その他、今年始めて文化庁の主権による青少年芸術劇場公演に「翼をください」が取り上げられたり、春先から多忙で多彩な動きをしている今日この頃です。（宮部 明）

【劇団たけぶえ】

三月の年度末を持たずに私達は「日本アマチュア演劇連盟」を脱会致しました。数年前からこうした気持ちを抱いていたのですが、色んなしがらみもあってズルズルしておりました。十二月の臨時総会で会長が交替したのを機会に意思表示しました。脱会にあたって私達は、以前からお誘いを受けている「全日本リアリズム演劇会議」へ加盟を決意致しました。

この件に付いては今までも折りに触れて話し合ってきたのですが、その都度いつもオロオロしながら活動している私達の様な劇団が

果たしてパワー一杯の「全リ演」加盟の先輩劇団についていけるのだろうか、との不安から二の足を踏んできました。

今は私達にとっては新しい出発となる全リ演加盟が承認されるか否か。

神妙な面持ちで持っている処です。

さて今年の劇団たけぶえの公演計画は、四月に『薔薇のベビー』（作/大和雪彦）を、

そして秋の「市民劇場97」には越前松平忠直の絵師「岩佐又兵衛」を取り上げます。

春は勉強会公演としてすでに本読みに入っております。作品を現代の若者に置き換えた形でやってみたいと考えております。

又、岩佐又兵衛は、県内・三国出身の作家中島道子さんの小説で、目下作者自身が脚色にかかっておられます。二月一杯で脚本脱稿、三月から準備に入ります。公演は十一月二十四日に越前藩の地元・福井市での予定ですが現在武生での公演日程を調整しております。

【三浦半島劇団「海」】

全リ演に加盟して、もう三年が過ぎようとしています。昨年は、新春の集いで大騒ぎ、三宅島では大はしやぎと大変お世話になりました。そのような席には数名の劇団員が参加いたしますが、会議や総会となると相変わらず

ずこ迷惑をおかけしており、この場を借りてお詫び申し上げます。

さて、今私は台本を脇に置き、この原稿を書いています。そう、第十一回公演が迫っており稽古にも熱が入ってきた時期なのです。今回、期待の女性新人が四名加わり、より以上に男性陣が押されつつ稽古がすすんでいきます。

その次回の公演は、三月二十九日（土）、「いのちの水」というタイトルで上演いたします。今回も代表である神田時枝の作・演出によるもので、水の大切さや地域の環境破壊への警鐘をテーマに、さびれた商店街が舞台となる喜劇です。

しかし、「演劇会議九十三号」が発行される頃は、もう何度目の打ち上げをやっているかもしれません。まあ、皆さん三浦に飲みに来てください。（佐藤 守）

【劇団銅鑼】

不愉快なニュースや気鬱りなニュースの続く中ですが、お互いに一陣の春風を巻き起こす活動を繰り広げましょう。銅鑼では九月俳優座に向けて「池袋モンパルナス」の企画が始まりました。創立二十五周年を記念する第一弾です。曲がりなりにも二十五年やって来

ることの出来た幸運に感謝を込めて上演を目指します。大正・昭和にかけて軍国主義の風

に馴染めない画家達の群像をお目にかけていたいと思います。

尚「センボ・スギハラ」のアメリカ公演

（来年一月）が企画進行中です。

【劇団きびがわ】

（菊池 佐玖子）

大阪新劇団協議会の合同公演「がめついい奴」が無事終了しました。ウチからは8名が参加し、観客数二七五〇名と、大変大きな取り組みとなり、参加した劇団員にとっては、とても良い勉強となったようです。ただ創造的には、「もっと練りあげて、本当の人間喜劇にしたかった。」という反省が出ています。

さて、劇団は、春の公演にむけて3月からケイコ開始です。今後の芝居は、出演者19名という大きな芝居ですので、スタッフ、キャストをどう埋めて、良い舞台を創り出しているか、頭の痛いところですが、楽しみでもあります。

（春の公演）

作/本田英郎 演出/林田時夫

「勲章の川」

6月28日（土）29日（日）クレオ大阪西

【演劇集団石るつ】

一月の東京芸術劇場公演「鍋屋の紐はなせ朱い」を終え、ほんの一息ついたところで、又「鍋屋」の練り直しと、その基礎稽古を開始したところ。なんせ、八月に開かれる、フェスティバル、IN神戸、参加上演劇団の「石るつ」としては、のんびりもしていられませんので。

六月公演の方は、故藤沢周平氏原作ものを脚色の最中。が、作家が懐疑しており、前途多難であります。その間八月公演の宣伝とカンパの訴えも兼ね、地域行事への参加等、多忙をきわめているといった現在です。

【劇団蒼生樹（あおいき）】

前号の記載原稿に大きなミスがありました。1996年の12月公演、タイトルは「季節はずれの長屋の花見」です。

「遅すぎた」ではない！作者の吉永仁朗さん、申し訳ありませんというわけで：◇第30回公演報告

1996年12月20日（金）～22日（日）
横浜市教育文化ホールにて

「季節はずれの長屋の花見」

吉永 次郎/作 濱田 重行/演出

毎年12月は、歳忘れ興行、と銘打って、我

が劇団の得意分野「奮もの」を上演していま

す。しかし、得意な筈の江戸長屋ものなのに、気が付けばその芸風は、江戸っ子、というよりむしろやくざと百姓に……。いつの間に培われてしまったのか、今後に課題を残すことになりました。

おかげさまでお客様は暮れを楽しみにしてくださるようになりまして、今回も忙しい年の瀬に大勢ご来場いただきました。（約千三百名）

◇次回公演は

1997年7月11日（金）～13日（日）

横浜市教育文化ホールにて

「法王庁の遊妊法」

飯島 早苗/作 勝崎 若子/演出

なんと自転車キンクリートさんの作品を上演することになりました。

かの有名な「オギノ式」の荻野久作の学説誕生の裏話という形で、バースコントロールに関するさまざまな視点で巧みに盛り込まれています。若いと思った蒼生樹も、座員の平均年齢は30歳（+α）に！

同様に、若いと思っていた自転車キンクリートのパワーも私たちの平均年齢になっっています。今話題のクローン問題にも通ず

るこの作品、飯島早苗さんも、物ごとをとらえる目線が変わってきているなど思わせられ、自然なタイミングで決まりました。

(事務局・清水泰子)

【劇団仙台小劇場】

仙台では今年珍しくまとまった雪が降りました。寒さに煽られながら稽古を続けておりました。

現在は、四月二六・二七日公演予定の「今ひとたびのハレー彗星―長尾四郎右衛門伝」(石垣 作・演出)に取り組んでおります。

仙台市の南西部にあつた生田村というところの明治期の村長の物語を舞台化するのですが、地元の人や区などから全面的な支援と熱い期待が寄せられています。架設舞台、客演の募集と大変ですが、新人も三人加盟し、何とかいい物をと奮闘しています。(石垣)

【劇団 埼玉】

昨年、九月二十九日、彩の国県民芸術文化祭「見沼の波留」公演を無事終わりました。今回の公演は、埼玉県が埼玉演劇協議会に依頼し、埼玉と久喜座の共同で上演したものです。企画そのものにあわたたしさもあり、上演台本の完成から本番迄に二ヶ月半という、今迄にない短い期間で仕上げた為、それぞれ

の登場人物も十分刻み込めたとは云えず、舞台機構の利点に大いに助けられたとはいえ、悔いの残る舞台でした。

しかし、我々の思いとは裏腹に、観客の反応は良く、アンケートの好評と共に、感動的、と地方紙(埼玉新聞)も劇評で取り上げ、地元を舞台にした県民による、いわゆる「県民劇場」の可能性が大きくふくらんだ、と評して下さり、いつものことながら観客の皆様熱い支援を感じた公演でした。

さて、次回第70回公演は、創立30周年記念第一弾として、
「奇跡の人」
ウィリアム・ギブソン/作
額田やえ子/訳 沢田照夫/演出で、

97・6・1(日)久喜総合文化会館大ホール
97・6・8(日)上尾福祉会館ホール
97・6・22(日)蕨市民会館大ホール
と決定しました。

埼玉は昨年二回の本公演が創作劇、今年も30周年記念第2弾、第3弾と創作劇が予定されています。久し振りの名作劇、感動的な舞台を創るべく懸命に取り組んでいるところで、また、この6月公演に先立ち3月16日(日)に岩槻中央公民館で、奇跡の人の夕

イジェスト版を上演します。(Pm1時30分より約1時間40分)昨年同公民館の主催で、市民のための演劇教室、という講座があり、埼玉が全国的に協力した縁で、宣伝の意味もあり、今回の小公演の実現となりました。こうした地域への浸透という大事な仕事も、30周年を迎えた埼玉の今後の大きな課題です。

【京浜協同劇団】

栗原省さんのリアリズム演劇論、興味深く読みました。氏の長年の実践の中から生まれた論理は説得力があります。私たちの集団でもこのごろそうした議論をあまりしなくなっています。若い人たちが入ってきて、レバなどをめぐって世代間の大きな違いが出てきているにもかかわらず、劇団の理念を語り合う機会が持てないままです。

そこで、今年六月の公演は中止してでも、少し止まって考えようと団内学習会を計画しています。二か月間の期間を設け、数人の外部講師、数人の劇団員の主張を出し合い、これからの劇団のあり方や二年後の創立四十周年に向けてのレバ選択について考えていきたいと思います。

今年三月には、川崎市などが主催する「かわさき演劇まつり」(第二十六回)に、私た

ちの劇団が単独で出演しました。出し物は宮沢賢治原作の「よだかの星」と「雪渡り」の二本立て。若林一郎台本、室野定子演出。今回も劇団員の他に一般市民(子供たち)約二十人が舞台にのりました。

稽古場建設を支えた一〇〇人委員会が改組して、このほど、「京浜協同劇団と共に歩む文化の仲間」という会が結成されました。単なる後援会ではなく、地域の文化を考え、自主的な活動もやっという組織でユニークです。笹岡敏紀会長、長坂訓弘事務局長を中心に、現在会員は約五十名。

【劇団支木】

昨年の12月公演は「あま浦町駅」(田辺典忠・作、伊藤一郎・演出)でした。今はなき駅と地元の歴史を重ね合わせた、情感あふれる作品に仕上がりました。

地元紙には、これまでに舞台と客席一体となった作品は珍しいと紹介され、さらにポストターが盗難されるなど、うれしいやら、驚くやら。

なつかしい汽車の汽笛と、ジャズ、ダンスホールでの踊り。総勢40名以上の出演。とはいえ劇団員の参加事情は良かったとはいえませんが、団内外で様々な議論をしました。芝居

を第一に考えボリシーを持てる人は、往々にして、団員の事情を顧みず何事も強引になります。プロは一ヶ月で創造し、われわれアマは三ヶ月かける、そのゆるやかさを考慮にいれなければ、長続きするものではありません。ところであなたは、本当に楽しく芝居をやっていますか。(伊藤)

【劇団京芸】

四年前全国の高校巡演を続けてきた「蠅の王」は、昨年十二月に横須賀、大和おやこ劇場で終演した。こどもたちの合評の記録は新鮮で痛切に私たちの胸を打ち、子供たちの未来に責任をもたねばならぬ大人と創造者の責務を痛感させられた。

「そうべえくらくへゆく」はもう七年目に入りまだ元気に巡演を続けているが、既に四〇〇回をはるかに越え劇団の記録を更新している。四月は四国、九州のおやこ劇場の旅が待っている。

「白いライオン」(岡部耕大作、藤沢薫演出)はまだ二年目、おやこ劇場と小、中学校の公演が並走している。
◇四月公演

「GO to West 西へ行こう」
横山一真/作 幸兎彦/演出



はじめての海外劇団招請公演

韓国・劇団馬山しいの実

シアター公演を終えて

劇団あしぶえ 有田美由樹

九六年十二月六日（金）、めざめると一面の雪。例年より三週間も早い積雪である。

飛行機は大丈夫か、到着が遅れたときの対応は？ 現地受け入れ待機の私には次々と心配がおしよせてきた。

すでに、この日の早朝、代表の團山はチャーターした小型バスで、広島空港へ出迎えに向かっていた。釜山との直行便は近くになく、ソウル経由で、広島空港が一番近いルートだった。

京都の劇団員、広島劇団員も空港にかけつけ、通訳、連絡要員として同乗した。空港から八雲村までは四時間弱。その車中では、通訳をまじえ、確認事項や細かな打ち合わせ、相互理解のための情報交換が行われた。

夕方六時すぎ、すっかり暗くなったシアターに到着。シアター内に入った途端、劇団馬山のメンバーの表情がパッと明るくなった。



劇団馬山とあしぶえのメンバー “雪のシアター前にて”

「すばらしい劇場だ。」と。そして、生き生きと劇場内を探索しはじめた。ここに到着するまで沢山の不安をかかえて重苦しかったにちがいない——と察した。

この瞬間、ことばの壁を越え、演ずる側と受け入れ側の心の交流がスタートしたように思えた。

こうして、はじめての海外劇団招請公演がはじまった。

○なぜ招いたのか、

(一) 一昨年の実シアターがオープンし、あしぶえでは五年後に、八雲村で国際演劇祭を行いたい——と計画しており、その第一段階として、近隣国から一劇団を受け入れたいと考えていたところへ、三重県・劇団すがおの加藤武夫氏より話をいただいた。

(二) 地方の小さな町に暮らす劇団員たちは、地域行事・家庭・農作業・仕事の都合で、なかなか他劇団の活動にふれる機会が持てない。全リ演の夏のフェスティバルや、年一回のセミナーでさえ、参加がむづかしい。一人でも多くの劇団員が他劇団の舞台にふれ、劇団運営はじめ、仕込み、ゲネプロ、バラシに至るあらゆることを吸収し、刺激を受けることは、私たちの財産になると考えた。

(三) 一昨年の「星降る里の演劇フェスティバル」では、国内の劇団の人々から沢山の刺激を受けることがで

きた。

更に、海外の劇団からの言語をこえた刺激を受けたいと願っていたところでもあった。

加藤さんからの急な話で、準備に二カ月しかなかった上に、「おこんの初恋」秋のロングラン公演中でもあったが、九四年アメリカ国際演劇祭参加の経験を思いおこしながら準備をすすめた。

○いよいよ本番

七日（土）ヨル、八日（日）ヒルの二ステージ。

ヨル公演は、一面まっ白な雪の中、ライトアップされたシアターが、おとぎの国のように浮かび上がり、訪れた観客をまず驚かせた。

雪にもかかわらず、満席。

演目は「ベビジャン伝」

国の官僚をめざすベビジャンは、出世をねらって、上司の転勤に同行、地方の勤務につく。が、そこで美しい女性に心を迷わせる。

そんな弱さをもつベビジャンに、上司と側近が相談し、ユーモラスなおしおきの芝居を打つ話。韓国舞踊や色っぽいシーン、コミカルな演技に、ことばは理解できなくても充分たのしめるもので、客席一〇八席のしいの実シアターはベビジャンの心の動きまでが非常によくわかるので、客

席からは何度となく笑いがおきた。
劇団馬山は創立十年。馬山市で昨年秋から国際演劇祭も開催している。

三十代前半の若い演出家は厳しかったが、テンポのよい演出には舌を巻いた。

二十〜三十代の若い役者は体が軽く、コミカルな表現が巧みで無駄がなく、実にうまかった。そして、韓国語が非常に美しく、まるでうたっているような調子にききほれてしまった。

また、ところどころに日本語をおりませ、観客の笑いをさそうサービスも心にくい。

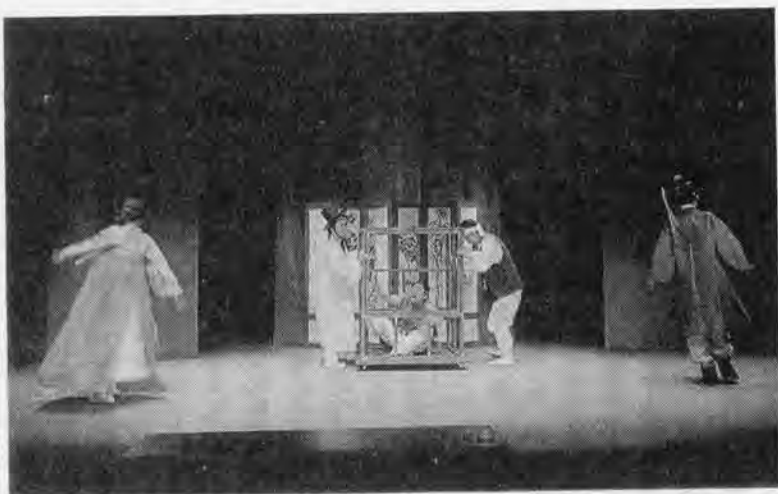
山陰初の海外劇団公演、ということと、韓国への関心が高まっていることも重なり、松江や、県内各地からの観客に加え、村民・地域文化団体・村・県関係者―と、いつものあしぶえのお客様とはちがった観客も多かった。

ことばがわからない芝居への不安を持たれた観客も多かったが、一様にたのしみ感動し、翌日のヒル公演も立見の大入りであった。

○地元八雲村との交流

八雲村で演劇活動をすすめていくことは、地元の人々との交流なくしては考えられない。

昨年、村に「国際交流をすすめる会」ができ、ホームス



劇団馬山「ベビジャン伝」

テイの経験ももっていた。そのメンバーのうち、五軒の家庭にホームステイをお願いした。島根大学に留学している韓国学生や、八雲村に結婚で来られていた韓国女性の心強い応援により、今回の公演は支えられた。また、県

の国際交流員の派遣、国際交流に関する補助金、村からの支援、商工会からのお土産の協力など、多くの援助を得ての「成功」であった。

劇評

京浜協同劇団『旅★自分を探しに』

私たちと等身大の

人間描く舞台

黒川 栄

(湘南演劇鑑賞協議会事務局長)

演劇鑑賞会の事務局になって8年、年間60本近い演劇公演を観るようになった。おかげで自分がどんな演劇が好きなのか、少し分かってきた。そして、そんな私の「好き嫌い」の分水嶺は京浜協同劇団の芝居づくりによって形を成したのではなからうかと、劇団の最新作「旅★自分を探しに」を観ながら考えた。

「旅★自分を探しに」は、様々な事情で高校に行けない(行かない)子供たちを集めて作られた「のむぎOCS(オープン・コミュニケーション・スクール)」という実在の高校(?)をモデルにした創作劇である。元教師だった夫妻は、自分たちの子育てでの紆余曲折をバネに自ら学校を作って

しまおうと決心、様々な問題を抱えた子供たちを受け入れる。舞台は、入学式から卒業までの、子供たちの実体験を点描しながら進んでいく。急勾配にしつえられた開帳場の坂道を、教師・生徒が一同となって川崎から長野県小谷まで歩いて旅したり、アメリカへの留学や沖縄問題の学習を通して子供たちは成長していく。

とはいえ、これが子供たちの成長の記録であったり、教師夫妻の苦勞物語であったならば、この舞台は現実の営みを超えることはできなかっただろう。その意味で圧巻だったのは、生徒の一人「一平」の描き方である。旅の途中で金欲しさからコインロッカーを壊した一平は、シラを切るうとして仲間からの不信をかけてしまう。小谷に着いて再び起きた盗難事件に、仲間たちの視線は一平に集中する。正直に名乗り出るものがないならば学校は続けられない、という教師夫妻の言葉に、結局「やった」と白状したものの、土壇場までシラをきり通す一平を誰もが「仲間と思えない」と突き放す。「仲間の金をどうして盗めるのか」「何故嘘をついたのか」「のぞみを潰してもいいのか」と厳しい叱責が渦を巻く。しかし一平は、「許してください。ここに居たい」と念仏のようにくり返すばかり。初めは「信じられない」と相手にしなかった仲間たちは、いつしか「そう思っているなら本気で言え」と一平にうかがかる。信じるためには一平の熱意が彼らには必要なのだ。追い出

すための口実ではなく、迎え入れるための試練として続けられる「ミーティング」。そしてついに、一平の口から「許してください。ここに居たい」という叫びがほとぼしる。

演劇が人の心を打つとしたら、そこに自分と等身大の人間の葛藤があるからに違いない。こうあるべきと分かっているのに踏み出せない弱さと、こうありたいと願って飛び立ちとうとする強さと、そのどちらか一方ではなく両面を私たちは併せ持っている。だからこそ私たちは、悲・喜劇のドラマを私たちの日常生活に内在しているのではないだろうか。

さりながら私たちの目にする演劇に、そうした現代の社会と人々を写し出そうとする作品の何と少ないことか。もちろんそれを演劇人のせいばかり押しつけるわけにもいかない。自分がそうだからといって他人を巻き添えにするのも何だが、観客もまた、暗がりの客席に身を沈めることに慣れきって新たな刺激を求めに劇場に足を運んでいるのかもしれない。それを娯楽と言いつてはばからず、自分に突きつけられた矛先を巧みに避ける観客にも責任の一端はある。

しかしだからこそ、今回の客席の雰囲気にもこの舞台の魅力を引き出す力があつたことは見逃せない。今回の舞台には、若い生徒役に劇団以外の協力出演者が多かった。け

生活を通して肌を感じている怒りと悲しみを、明日を共に生きぬくための喜びと希望に結びつけていくような舞台。京浜協同劇団が掲げる「この日、この地で、この人々と」というキャッチフレーズからはそんな思いが伝わってくるし、同時にそれが私の演劇観にもなっているのかもしれない。

劇団いこら『姉弟』フタリッコ

『家族』を異化

楠本 幸男

昔は、映画の三本立てというのによくやっていたが、このスピード時代に芝居の三本立てというのは、小品とはいえず、見に行くのに少し決意が要った。上演されたのは栗原省氏の久々の新作「姉弟」（フタリッコ）、山本有三作「ウミヒコ ヤマヒコ」、岸田国士作「紙風船」の三本で、いずれも栗原氏の演出である。

「姉弟」の舞台は現在。二人姉弟の、三十三才になる姉の操（神崎佐江子）は、自分の貸した愛車に乗ってガールフレンドと出かけたままなかなか帰ってこない弟の優（北

つってこねれたとは言えない演技のために生硬に見えた場面がなしとはしないが、それを上回って彼ら一人ひとりの存在感がこの作品に厚みを加えていた。いやもう少し正確に言えば、客席にはモデルとなった学校の関係者や出演者の友人が居て、相手の見えないダイレクトメールではなく、自分宛の手紙として舞台からのメッセージを受け取っている。その舞台と客席の関係が劇場を一つにして、片方の力だけでは生み出し得ない緊張感を作り出していたのかもしれない。誰にでも理解できて、誰にでも許容してもらえ舞台は、毒の無い分感動も薄くなる危険性をはらんでいる。全ての劇団に共通する課題とは思いつつも、特に地域劇団としての存在意義はこうした客席との関係作りにあるのではないだろうか。

さて舞台は、二幕目以降、アメリカへの留学や沖縄問題の学習といった実体験を折りこもうとするばかりに、一人ひとりの心の軌跡が拡散してしまつたらうらみは残る。だからといって今回の創作劇が失敗ということではもちろんない。手を入れ、練り上げることでこの作品はまだまだ生まれ変わる可能性を秘めている。難しいことと分かっているけれど、このままで終わりにせず再演を検討して欲しいし、全国的にも各地の地域劇団を軸にした市民参加による公演方法が検討できる作品に違いない。

小屋直人）をいらいらしながら待っている。そこへやっと帰ってきた優は、何か、もじもじして落ち着かない。聞きだしてみると、車に追突されて姉の愛車が無惨にも後部がべしやんこになっているという。操は怒り狂うが、よくよく聞いてみると、相手の車にのついていたのは暴力団風の男たちで、追突された上、有り金すべて巻き上げられたという。おまけに、ガールフレンドは、追突した相手の方へ乗り換えて、去っていったと言うから、彼女もあまり素性が良くない。弟のあまりのふがいなさには怒るよりも、あきれてしまう操だったが、よくよく考えてみると、このようなことは今回だけではなかった。父母が離婚し、母親とは死別、その後は姉が親代わりとなって、PTAの会合への出席から、弟がいじめにあったときは学校へ怒鳴り込みにも行った。果たして自分の弟の育て方が甘すぎたのだろうか。迷い、悩む操は、恋人に今すぐ会ってほしいと電話をする。それをそばで聞いていた優。そして操は恋人との結婚を弟に話すべき時期だと決意する。つきあうこと五年。弟のこともあって遅すぎた結婚である。やがて、玄関のチャイムが鳴り恋人の到来を告げる。姉の恋人に会うと約束した優だったがいざとなると、逃げ出したい気持ちになるのだった。姉に押され、いやいやをしながらも、少しずつドアへ向かっていく優……

派手な事件があるわけでもない。どこにでもありそうな

日常のスケッチ劇といえなくもないが、台詞の意外性の面白さに加えて、優役がいい。成人になつてなお自立できない、最近よく見かける青年像だが、演出は役者の個性を生かしながら、「間」や、急所をおさえ、ちよつと他の者には真似のできない存在感をつくりあげた。

他の二作はいずれも大正時代に書かれた作品。「ウミヒコ ヤマコヒ」は太古の時代が舞台で、貸した釣り針をなくした弟を叱るウミヒコ（坂元聖子）、素直に謝れないヤマヒコ（田中亜弥）との兄弟愛を描いた作品。「紙風船」は、結婚一年後の夫（吉井孝記）と妻（有田和美）との夫婦の倦怠を描いた作品。いずれも演出の意図が明確で、若い出演者達も、的確に表現していたように思う。

栗原氏が有田郡吉備町で、若い人たちを集めて演劇活動を始めて三年。吉備町は人口一万四千人。一昨年同和問題終結宣言を出して全国的に注目された町である。一面に広がるみかん畑、その真ん中を貫く広い道路沿いに「劇団いこら」の稽古場兼劇場「夢工房あうむ」がある。工場の二階を地元の栗原ファンが無償で提供してくれているという。定員五十名。こんなのかな田園地帯では、さぞ人情も厚く、家族の絆も強いのだろうと想像してしまいが、人情の方はともかく、家庭崩壊の構図は、ここ吉備町でも例外ではないと聞く。新生「劇団いこら」のことを、「私の私塾みたいなもの」と言う栗原氏だが、私財を投入し、青年達

一作年の暮に早過ぎる死へと旅立ったドイツの詩人・劇作家ハイナー・ミュラーの〈ロシアの黎明〉の書き出しである。

劇団大阪プロデュース／プレヒト酒場P A R T IIIとして、市川明翻訳・脚本、堀江ひろゆき演出により、〈死者の飛翔〉というタイトルをうたれて上演された。

ソ連領内深くに攻め入り、快進撃を続ける勢いに自信を持つヒトラーは、「モスクワへの道はほんの散歩道。赤軍は壊滅した」と世界に公言していた。事実敗走を重ねる赤軍（ソ連軍）兵士たちを、敗北への大きな不安が、包み込んでいた。

その時機と場所をまずは直截に切り出し、今は初老を迎えた、当時若き司令官であった一人の男が体験を語る。日本語で読めば二十分そこそこの短い、だがムダのない濃密な作品だ。

ここで敗北すれば、敵のモスクワへの道はヒトラーの言う通り散歩道になる―ことを認識する若き司令官は、兵士たちが不安に打ち勝つことこそ勝利への道だと、恐怖だけが不安を追い払えると考え、川をドイツ軍に見立てて、銃を乱射する。「敵襲だ。銃をとれ。」「ドイツ軍だ」という叫びとささやきが兵士たちの間に拡がり、混乱が生じる一方で、戦闘態勢への転換の可能性も出てきた。そこへ「ある分隊長が部下とともに森への逃亡の途中、自分で自分の

を集め、再び劇団というやっかいなものを育て始めた氏のエネルギーにはいつもながら敬服してしまう。

父が父ではなくなり、母が母でなくなり、子供が子供でなくなりつつある現代、戸籍上の父や母など、もうどうでもよいではないか、自分自身の「父」や「母」になる存在を探せ、この作品でそう栗原氏は若い人たちに呼びかけているようにも思える。

今回の舞台は、時空を越えた三作品を共通の演出意図のもとに上演し、現代の「家族」を異化した好企画だった。見終わったあと、この企画は「三本立て」ではなく、三場からなる一幕劇だったことに気づく。

（一九九六年十二月十四・十五 夢工房あうむ、二ステージ上演）

劇団大阪プロデュース

『プレヒト酒場P A R T III』

小松 徹

われわれソ連軍はモスクワとベルリンの間にいた。

ベルリンから二千キロ離れ

モスクワから百二十キロの地点。

手を撃ちくだった」との報告が届く。捕らえられた本人の申告によると、「偶発的な事故で何故だかは自分でもわからない」と。だが若き司令官は、戦闘から逃れようとしての意図的なもの、臆病者―祖国への裏切りと断じ、部隊全員の前で、直属の分隊の兵士たちによって銃殺―処刑することを命ずる。「自分たちに銃殺する権利があるのでしゅうか」という側近の疑念を押しつけて。その時何か誇りのようなものが、若き司令官の心の中に湧きあがる。が同時に、それを打ち消す恥らしいも心に生じた。自分が命令したからこの男は死んでいく。だが他にどんな命令が出せたのか。ベルリンから二千キロ離れ、モスクワからは百二十キロの地点―で。

銃殺を中止し、裏切り者を戦闘部隊に復帰させようという思いが、若き司令官の心の中に生じる。だがそれは彼のイメージの中だけの一瞬の出来事に過ぎなかった。銃殺は執行され、それによって不安をふくらまされてきた兵士たちは斗う兵士へと変貌し、大隊はモスクワからベルリンへと進撃の第一歩を踏み出す。

だがその斗いの間中、処刑された彼が若き司令官とともに歩みつづける。胸にいくつもの勲章が輝く時彼は負傷した手で敬礼しようとするのだ。戦争の掟に従い、祖国の裏切り者として自分の命令によって処刑されたあの男が、胸のうちに棲みつくことになった。

戦争の年、一九四一年十月
ベルリンから二千キロ離れ
モスクワから百二十キロの地点で。

という今は初老を迎えた一人の男の体験談は、この言葉でしめくられる。と同時に重い課題が読者（観客）に手渡される。モスクワへの道を散歩道にしないための能動的な行為が生み出した辣。抜けることのない辣を生涯抱えて生きるということはどういうことなのかを、ミュラーは問いかけてるように私は考える。まずは自分自信にむけて、それを通して読者（観客）に対して。上演する者たちは当然作者と観客の仲だちの任務を担うこととなる。その点ではプレヒトが唱えた（教材劇）そのものだと言えるだろう。上演された舞台は、その根幹のところは伝え得ていた。

ミュラー自身の（演出のための注）に従って、初老の紳士にベテラン俳優を配し、若き司令官を若い女優によって演じさせた演出は、ダブルイメージの相乗作用を生みだして成功している。見事な異化効果の勝利だ。二人の俳優もそれぞれの好演で、作品の存在感を深めていた。

デテイルにわたって具体的な描写に徹するほど、語ることの普遍性は拡がり深まっていくという言い慣れた言葉を立証するかの如き作品はダイナミックなりズムで現実を

正面から引き受けて生きようとするあらゆる場面で遭遇する問題を提起してくる。それは、更なる再演の積み重ねによって鮮明に浮かび上がってくる筈である。そのことを強く期待したい。とともに今回の上演が、劇団大阪が時折り見せる稽古場での鋭く実験的な試みのラインに、またひとつ大きな支点を築き得たことを明記しておこう。

演劇街『サラエヴォのゴドー』

なぜ芝居をするのか？

猿渡 公一

(1)
一九九六年十二月一日。突然の寒波が襲った。私が住む福岡も庭は雪で真っ白になった。私は、「サラエヴォのゴドー」を観るために山口に向かう。山口に入ると雪はますます激しい。

今日の小公演が行われる劇団「演劇街」の演劇研究所は湯田温泉街のはずれにあった。瀟洒な建物である。内に入ると稽古場の半分が舞台となり、百席程度の客席空間がしつらえてある。

芝居が始まり、終わった。客席を埋めた観客は重たい拍手を送っている。好感の持てる真摯の舞台だった。

会場を出ると外は吹雪だった。傘をさしても横なぐりの雪で身体中真っ白になる。厳しい芝居だった。そして誠実に上演に立ち向かった「演劇街」の若者たちのことを考えながら冷気のなかを歩いた。久しぶりに直球をぐいと投げ込むような芝居を観た。

(2)

作者で、この公演の演出を担当した広島友好は、パンフレットにこう書いている。

ボスニア紛争を題材にした芝居「サラエヴォのゴドー」を書く発端になったのは数年前に聞いたラジオニュースでした。世界の話題コーナーで特派員記者が興奮を抑え気味に次のことを伝えていました。

戦火のサラエヴォでサミュエル・ベケットの「ゴドーを待ちながら」（以下「ゴドー」）が上演された。劇場は打ち続く砲撃のために崩れかけており、12本のろうそくの明かりだけを頼りに行われた舞台だった。しかし、地元の役者たちが演じたその世界的に有名な不条理劇は、現地の人々のあいだに非常な感動を呼んだ。観客は皆涙を流して―その濡れた頬をろうそくの明かりが照らしていた。

私は戦火のなかでの演劇の上演という事実が驚き、心を動かされました。砲撃にさらされたサラエヴォと平和日本の西端の地方都市という遙かな隔たりを越えて、同じ演劇人として彼等の試みを感動して受け入れたのです。何故芝

居をするのか―その答えがそこには一杯詰まっているように思えた。先の見えない日々の中にありながら、演劇人として当たり前の行為として芝居をする強さ、役者たちの意地。芝居することに希望を見いだす態度。等々。

舞台は、ボスニア内戦、戦火のサラエヴォ、ある小劇場、銃声が鳴り響くなか、地元の役者たちによる「ゴドー」を待ちながらの幕が上がるうとしていた。

片足が不自由でびっこをひいている役者ゴゴーは、相手役のデイディーと忙しく装置を組んでいる。ゴゴーは何故かイライラして怒鳴り散らしてばかりいる。デイディーもどこか浮かぬ風だ、とゴゴーを訪ねて一人の女性（マリマ）がやってくる。ゴゴーは会おうとしない。ゴゴーは息子を殺され、妻を連れ去られた。彼は戦場へ行き、片足を失って帰ってきた。そこへ妻マリマが現れた一敵の子を孕んで。デイディーも父と母を銃撃で殺された。この状況のなかで芝居をするとはどういうことなのか、役者に必要なのは台詞だけで武器ではないのか、劇中劇「ゴドー」を待ちながらが開幕する。

二幕は芝居がはねたあとの夜更け、がらんとした舞台。芝居に観客は泣いた。閉じ込められ、腹を空かせ、暴力に怯えて、無気力にうつうつと日がな一日、どこか他所の国の助けを待っている自分たちの姿を舞台の上に重ね合わせて……。ゴゴーは片足になっての演技に絶望し首を吊る

うとしていた。そこへデイディーとマリマが現れる。デイディーは絶望しているゴゴに、彼の演技が有名になったハムレットの墓掘りの話を持ち出す。ゴゴとデイディーの墓掘りの場が始まる。マリマが現れる。彼女は死んだ息子アルーの描いたゴゴの絵を渡そうとする。アルーを殺され、マリマは強姦され、連れ去られ、何度も死のうとしたが、死ねなかったのだ。ゴゴはマリマの腹の子を殺してくれとデイディーにたのみ、彼に殴り倒される。ゴゴは「ゴドー」の一幕の最後の場面を演じはじめ。マリマは、この子は誰の子でもない人間の子だ。私にこの子は殺せない走り去る。

(3)

ゴゴを演じた柳沢悟は好演だった。素直な演技で、自然主義的発想とその裏返しに誇張された演技が気になる部分はあるものの情緒的にならず内面に向かう姿勢は評価できる。マリマは地母神的存在と私は考えるが、書き込まれてない脚本の弱点もあって存在感が薄かった。これは演出の問題でもあるが、その登場する場所を舞台の片隅にしたのは、この小劇場の構造からみても肯けない。演出上の問題としては、「ゴドー」や「ハムレット」の部分が劇中劇として組み込まれていながら、思ったより効果的でなく、演出上の問題も含めて工夫の必要性を感じた。それと「ゴドー」という観客には周知されていない作品が構成の軸と

なるというこの作品の困難さはやはり充分克服できなかったのではないだろうか。
ともあれ、何故芝居をするのかと問いかけて、世界的知の世界をめざし、それに正面から挑んだ試みに拍手を送りたい。

劇団山形『もうひとつの教室』

光る平野の演技

高橋 寛

(劇団だいこん座)

「もうひとつの教室」廣澤栄作は、たしか埼玉で上演されたと思うが、劇団山形が十一月十六日に山形市中央公民館ホールにて公演した。夜間中学を題材にしたものとしては園山士筆作「落ちこぼれの神様」そして、映画では山田洋次監督の「学校」がある。「もうひとつの教室」は山田洋次氏のシノプシスを参考にしながら廣澤栄が創りあげた作品である。

映画の「学校」では西田敏行の先生と、田中邦衛のイノさんが中心で展開するが今回の作は若い女の先生である織田先生が活躍する。ストーリーは、イノさんが中心であると一緒にアメリカへ行ってくれとたのむ。その場をカゲでじつと観ているイノさん。その後イノさんは長期欠席となる。病気が多い。やっと病院につれていって検査するとガンを発見され、三ヶ月の余命だと知らされる。病院に見舞う織田先生、以外に明るく応対するイノさん。その間にふつと病室の花に目をやり、悲しみの後姿をみせる織田先生の演技がなんとも良い。

卒業式である。みんなのお祝いの席に、入学希望の電話がかかってきて来年も夜間中学は続けられそうである。その席でイノさんの死が知らされる。悲しみにくれる生徒たち。イノさんの写真に卒業証書が送られる。イノさんの残してくれたお金で授業開始を知らせるカランカランと鳴る鐘が送られる。織田先生がその鐘をつく。「私はイノさんに教えられました。この夜間中学で生きてゆきます」と。

劇団山形の舞台はそれぞれの役をしっかりとらえ清潔な感じの舞台となった。なによりも織田先生役の平野礼子の演技が光った。もう一人の主役のイノさん役の小山哲夫も適役であったが、欲をいえば底辺を生きてきた者の屈折した感情がもう少しあるといい。窪川、木谷先生も役にはまっていたし、教室の生徒たちもそれぞれに良い味を出していた。最近みた芝居ではとても良い舞台でした。

子育てが一段落した女優陣も三人ほど復帰したというし、今後の舞台が楽しみである。

が、じつは始めて夜間中学にふれ、イノさんと知り合い成長して行く織田先生の物語でもある。

イノさんとの始めての出会い、競馬好きのイノさんにつき合って馬券を買い一喜一憂する姿、そして、授業に「馬券」「配当」「対抗」などの競馬に関する文字を導入して興味をもたせる工夫、一人一人の生徒たちのかかえている重荷。昼はモデルとして働き、夜間中学に通う女性をおどしに来たヤクザを追いかえすイノさんの迫力。一番の低辺で働く彼等は景気が悪くなると、労働条件も悪くなり学校へなかなか来れなくなる。必死に生徒たちの職場を探して経営者を説得し、学校に登校してくれるようにおねがいを教師たち。へんな格好をした人たちが夜間に学校へ集まっているというウワサも広がる。

「人はだれでも教育を受ける権利があるんだ」と叫ぶ教師たち、教室の外からの雑音にも負けず、憲法の条文を群読して学ぶ生徒たちの姿をストップモーションで写し、照明の変化だけで終わる一幕のラストがとても良い。二幕に入り、イノさんは生徒会長に立候補し当選する。ますます授業を真面目にするようになったイノさんは始めて作文を書き、それを織田先生にわたすが、それはなんと織田先生にたいするラブレターだった。

主任の窪川先生への昼間学校への転勤問題、織田先生の恋人、宮森のアメリカ勤務の話、宮森は織田先生に結婚し

神沢 和明

潮流『NIPPON漂流』

〔作・木村 玩 演出・平田 一起〕

(一月十一日 夜・テイジンホール)

高校生を対象とした学校公演用の作品である。事件の展開が加速してゆき、意外な方向へ進むから、飽きさせない。その点で、観客対象にあった舞台作りになっている。

高校生の山本光太郎は、父から「自分の骨を沖繩の海にまいてほしい」と遺言されながら、行動する気力がないままである。そんな彼が、地元の劇団が上演する、祖母の書いた芝居に出演することになった。舞台は、劇中劇の形で進行する。観客(光太郎と同じ世代の高校生たち)は、光太郎と同じ視点で芝居の進行をみてゆくわけだ。観客に親しみを持たせるのに良い手段である。ただそのことを強調しようとして、始めのうち舞台わきに芝居に無関心な光太郎の姿を見せていたのは邪魔だった。さて、芝居の中の光太郎は、父の遺言を果たすべく、足漕ぎボートで沖繩の海を目指している。その彼はいつか、人間魚雷回天の特攻隊員として死んだ、祖父の健太郎に変わっている。健太郎

押し退ける。彼の犠牲的精神は、そのまま特攻行為に結びついてゆく。今の学生は悲壮な場面に出会うと瞬間的に感激するから、泣かせ易い。特攻が美化されないための歯止めは効いているか。生まれなかった少女は、健太郎に、本当は生きていたかった、と本音を吐かせ、彼の死を認めたが、だったら生きてよ、というのが本当ではないのか。自分の意志でなく強制による死、それへの恨みは、浄化されるものではなからう。「生まれ変わったら」という甘い言葉に、もっと「死にたくない」が入ってこないか、TVゲームのリセット感覚で受け止められてしまわないか心配だ。近頃の小劇場系統の作品によく戦争が登場するが、国のために死ぬ事の悲劇性が、現代の若者にかっこ良くとらえられ、どうも戦争を結果的に肯定しているように見える舞台が多いという苦言が、しばしば呈されている。この作品はそうではないが、戦争の本来の問題点、その悪の部分に触れられないでいるのは、どうなのだろう。健太郎が、彼ら若者の死を正当づけるはずの、大東亜共栄圏の思想を述べたのに対して、孫娘がしたり顔に、「それを侵略とも言うね」と薄っぺらな批評をするが、この程度ですまして良しとする態度こそまさに、「黙ってる」と怒鳴り返されるべきものじゃないか。頭はあるが肚がない、という感想である。

舞台技巧に話しを戻すと、試みとして下手側にビデオ画

は魚雷発射直前に、アメリカに向かう威臨丸にタイムスリップしてしまう。そこには彼の祖父にあたる、命懸けでアメリカに渡った伝説の男、鉄太郎がいた。

作者が「潮流」に書いた前作、『ぼくらの不思議な七日間』では、幕末の侍が現代にタイムスリップしてきた。今回はその逆になる。出撃寸前の健太郎の前に、生まれなかった彼の孫娘が登場し、死なないで生きのびて、私を生まされたのだ。では今の満ち足りた時代の中で、若者たちはどうあるべきなのか。先人たちと比べて運が良いのだと言って、生と向き合うことなく、生きていて良いのだろうか。そう問い掛けて、その答えとして、作者は現実の光太郎を、足漕ぎボートで沖繩にむかわせた。彼には呼び掛けてくれる仲間がいる。その連帯感と余裕の中で目標遂行の努力が今の若者への期待として、作者、演出者が提出しているものなのだろう。それは把握しやすいく。

ここから苦言になる。死の危険を恐れて、嵐の中に沈みかける威臨丸のために働こうとしない鉄太郎を、健太郎が

面を映し、ボートを漕ぐ光太郎と、彼を応援する人達との交信をみせている。この試みはおもしろく、画像と演技もあってしたが、舞台の流れをそのつど切っているのが、難点である。芝居の中心部とのつながりの有機性も疑問だ。

若い役者たちは、『七日間』と比べてかなり良くなっている。健太郎になる岡田秀は、力んでのどがしまる避が、だいぶ矯正されてきて、セリフが聞き易くなった。特攻隊員の頑固さ、きまじめさが、素直に出る。更に努力を続けてほしい。生まれなかった孫娘の西原晶子は、不思議な少女つばさが魅力的。光太郎の杉本泰之もさわやかだ。海舟の付人赤沢研介を男装の少女にしたのは、例の思い付きで効果を疑うが、黒田恵がきりつと演じていた。祖母をやる池下雅子はやさしくかわいらしいお婆さん、海舟の藤本栄治は余裕というところ。総じて、中堅・ベテランよりも若手が、快い印象を与えてくれている。

なお、この舞台は今年度の新劇フェスティバル作品賞を受賞した。

大阪新劇団協議会プロデューサー

「がめついで奴」

昨年『カッコーの巣の上で』を上演した大阪新劇団協議会プロデューサー合同公演が、今年は菊田一夫作の『がめつ

「い奴」を舞台にのせた。劇団大阪が企画し、同劇団の熊本一が演出を担当している。

なにしろ、東宝で大ヒットした喜劇作品であり、何度か再演、映画化もされた名作である。私も梅田コマで見た記憶がある。そのような作品を、新劇人たちがどう表現するのか。大阪を舞台にした作品ではあるが、けっして関西の劇団にとってやり易い芝居ではない。方針を誤るとコケてしまうぞと、やや不安を抱いて客席に座った。

幕が開いてすぐ、これは新劇にはおなじみの芝居であったことに気付いた。『どん底』だ。生活力にあふれた『どん底』だ。ゴリキーの人物たちは、失意の中に生きている。彼らの現在を否定されるべきもので、いつもそこから抜け出すことを夢見ている。それがかなわないから彼らは不幸せだ。しかし釜ヶ崎に住む彼らは、不満はあっても、自己否定はしない。むしろ今の状況をいっばいに生きることを目指し、努力している。絶望という言葉を知らない。そこから抜け出そうと願う「普通」の人もいるが、彼らこそ「変な」存在である。この芝居は、そうした人間たちの生きざまを肯定して描いているから、喜劇になる。そして演出は、別世界の奇人たちを覗くような物珍しさではなく、隣町の住人を見る親しさで、その日常を描き出している。

簡易宿泊所の主人、お鹿婆さんと、婆さんに引き取られている孤児の女の子テコが中心人物ではあるが、釜ヶ崎

狙って来る。自称義弟の彦八（梶本潔）は案外不気味でなく、健太（上田啓輔）はともお鹿が後を任せられないようなお人好しに見える。その分、絹（橋野悦子）との率直な恋がほほえましく気の良いものになっている。釜ヶ崎ではいけないこと、裏切りをするポンコツ屋の熊（植田耕作）は、だから最後に殺されて当然なのだが、この自分勝手な男も、非情ではない。殺される姿は哀れであり、

殺す羽目になった初枝も哀れだ。彼女も釜ヶ崎を出たい「普通」の人であった。そのためかえて、土地の権利書と肉体を詐取された。ここで事件を起こすのは、外とつながらる人々だ。

写実で雰囲気があり役者が動き易い宿泊所の内部、裏ぶれた気分の釜ヶ崎の町の一隅、板坂晋治の装置が舞台をとでも助けている。音楽は、もっと明るさもあつたらどうか。役者陣はアンサンブル良く、みんなで舞台を盛り上げていく。お鹿婆さんの三沢和子、強欲というより、いかにもしたたかそうで、下品でない。役にはまった声の演技。難役テコの杉原末里子は、大きな明るい声でしゃかりしゃべって、なにより。大地主の娘のなれの果て、小山田初枝の夏原幸子は好演だが、もう一段気位を高くする方が、らしくなる。熊の内縁の妻、混血の占い師おたかの中村みどり、あてにならない男をたよって悲しまされる女のあわれを出した。

（但し実在のそれではない）の雰囲気そのものが主人公だ。大勢の人間の動きが事件を後押しし、芝居を進めてゆく。

だからワツと集まる人の群れの演出が、この芝居の基本になる。冒頭、表通りで衝突事故が起こる。その部品を盗み飛び出して行く、人、人、人。その駆け出して行く勢い。空になった宿泊所をサツサと掃除しながら、泊まり客の持参した米をガメてゆくお鹿とテコ。それぞれ戦利品を手を急ぎ戻って来る住人たち。たちまち騒然と市場が立ち、値切りと文句と金もうけ。やつと交通巡査が駆け付けた頃には、もう何も無い。知らんぷり。いや、紛れこんだやじ馬に、指を折られたと娘が言い掛かりをつけ、みんなで脅して金をふんだくり、仲良く分け前。そのテラ銭と宿賃の前払いを巻き上げのお鹿と息子の健太さん。ここまでの人の流れが良く、位置取りも形が良い。熊本演出はいつも丁寧で感心するが、今回も然り。だが、丁寧さが少しテンポを遅くしたかもしれない。もっと行儀悪く、騒がしくても良かった。同じく、健太がお鹿を殺した、と思われたところにみんなが集まって来て、お鹿を介抱、気がついて、息子を追いかけるお鹿を押さえるあたりの、それぞれの動きも目が行き届いている。その大勢の場面の後には、二人ほどのひっそりとした場面が来て、その対比も出ている。

登場人物たちが、あまりいやらしい人間になってこないのは、演出者が人間を好んでいるからだろう。お鹿の金を

脚本のせいだろう、テンポのある掛け合いのセリフがあまり無いので、大阪弁の魅力が十分には出なかったのが残念。だが、終わりにかけて客席に笑いもほどよく起こり、合同公演の成果のある、充実した舞台であった。

（二月二十一日 近鉄劇場）

神沢 和明氏のプロフィール

関西を中心に精力的な批評活動を展開されている神沢和明氏に「演劇会議」への定期的批評を依頼しましたのでプロフィールを紹介いたします。

国立奈良高専助教授。近畿大学非常勤講師（英語・演劇学）

一九五三年大阪に生まれる。京都大学文学部卒。

両親が現代舞踊家で劇場・劇団と関係があり、幼少時より「新劇」に深い関心をもつ。虚脱児だったので、舞踊よりも、声と言葉を専門に研究することを決める。

モダンダンスを父親の神澤和夫、狂言を木村正雄（大藏流）に学ぶ。

八二年、発声法の研究のため、高校教諭を辞職して、渡欧。ロンドンで演劇、ウィーンで音楽の発声法を勉強する。この間に、ロンドンの劇場で狂言ワークショップ等を行う。

帰国後、近畿大学、大阪放送劇団その他で発声法を指導している。

また、『テアトロ』誌に書いたのをきっかけに、劇評活動も始め、関係協力の新人研修公演審査員などを務める。現在、舞台批評紙『劇場通い』を隔月で発行している。（赤松）

顔

しぶ や さち こ
渋谷幸子

俳優
東京芸術座



その身体一杯にエネルギーを!!

演劇集団石るっ いとうエリコ

昨年秋、「夢幻乱歩館」上演の折のこと。
いつもながら、役者不足のため、東京芸術座にお願いし
て、出演OKを頂いたのが彼女だった。

「芋虫」という、乱歩作品の中でもとりわけ、重くて暗
い舞台で、つかず離れずの解説者というおうか、あるときは
弁士のように、ある時は講談調で芝居を進めていく人物。
そんな、重要な役どころであった。

聞くやに、劇団では小柄な彼女ゆえ、子役が多く、特殊
なせりふまわしの弁士役というのは、思い切りを必要とし
たのかもしれない。

はじめは、とまどいを感じながらも、稽古が進んでいく
うち、その身体一杯にエネルギーをたたえ、といった風に、
色々な挑戦を試みる。それは、稽古後の、ビールジョッキ
片手の話し振り（こちらのつきあひも大変良い）「最近、
役者をやることの楽しさ、と同時に恐さもとても感じて
…」に通じるのかもしれない。ある時は、私とのからみの

中で、彼女が涙ぐむのを見た。やさしい人だなと思った。
下町生まれの彼女の、気取りの無さ、ザックパランな人
柄をこんなところにも感じる。ぼらしても大丈夫だと思っ
が、一九六二年生まれ、そのわりに実はとても頼りになる
人なのだ。この辺は、きつと、劇団できたえられてきた所
以だろう。スタッフ方での彼女のささえに、ずい分と甘え
させてもらったかもしれない。

残念ながら、全部は拝見できなかったが、一九八六年
「新さるかに合戦」に始まり、八七「あわて幕やぶけ芝
居」、八八「冒険者たち」、九一「国定忠治」、九二「赤ひ
げ」、九七「子供の時間」が主な出演作品。現在、再び
「冒険者たち」で旅公演中。

あなたの言う無理せずに、長い目で芝居を続けたい、も
ちろんそこに、楽しみと、手ごたえも入っているのではし
ょうが、大いに期待しています。又、一献傾けそうね。

顔

きくちてるいち
菊地照一

俳優
神戸職演連



労働者俳優の道まっしぐら

劇団四紀会 梶 武史

国鉄鷹取工場の食堂の舞台上に登場する。とたんに作業服姿の観客から歓声と口笛が起る。芝居がすすむにつれて彼の台詞や仕種に共感の掛け声や笑聲が応える。大衆演劇ならともかく私たちの舞台では今日こんな光景はお目にかかれぬ。まことに役者冥利に尽きるといふものだ。鋭い眼光、堂々たる体軀、まるで山門に立つ仁王様のような風貌だが、豊かな感性と楽天性、そして何事にも怯むことのない不屈の精神力は、当時の観客にとっては待ち望むヒーローでありスターであったのだ。

菊池照一は国鉄を退職するまでの四十年間、配管作業現場で働いた。車両の床下に潜り込んだり屋根の上を這い回って、作業服は一日でたちまち油でドロドロになった。パイプを担いで歩くと必ず仲間が笑顔で声をかけてくる。二千人が働く工場で、工場長の名前は知らなくても菊池照一の名を知らないものはなかった。彼はそうした仲間の期待

に応えるかのように、労働運動への弾圧にも屈せず出世の誘惑に乗ることもなく、生涯、現場で働き、仲間にもまれながら演劇を続けた。そして七十歳を超えた今も労働者芸術家であることを誇りとして、舞台に励んでいる。

だが菊池照一は、いわゆる巧い俳優でも器用な役者でもない。また強烈な個性や特異な風貌を売物にするような俳優でもない。だいたい個性なんてクセとは紙一重なのだ。役の人物の魅力は結局、俳優自身の魅力だと言われるが、彼はその見本のような俳優だ。善玉、悪玉、無学、インテリ、貧乏、金持ち、どんな役でも一人の人間として哲学を持っていて、存在感においてひとときわ光彩を放つ。

最近、国鉄在職中の窮屈な作業姿勢が祟ったのか、背骨が歪んで姿勢が傾き、風貌も柔和になった。若い連中が「好奇心旺盛な老俳優」と評しているが、たしかに行動範囲は驚くほど広がって、志は益々みずみずしい。

顔

み さ わ か ず こ
三沢和子

俳優
劇団コーク



コークの〈お母さん〉

演出家・劇作家 ぶじたあさや

することといい、そっくりである。その上、大きな声を出すわけでもないのに、いつのまにか稽古場をリードしているところまでそっくりである。

三沢さんとは、二本作品を作ったが、いつでも稽古場のペースメーカーを、お願いしている。彼女がいれば、安心してその日の課題に集中できる。こちらの目の及ばないところに、きっちり目配りがとどいているからだ。かといって、演出家そっこのけで口喧しいわけでもない。いつも稽古場の下手の隅で、ニコニコ笑って見守っているだけだが、それでいて彼女がいると稽古場がピシッと締まる。なによりも嬉しいのは、解放と集中の度合いで、後輩の俳優たちの良きサンプルとなっているということである。

ぼくは、モスクワの彼女を、「羽衣」チームの〈お母さん〉と呼ばせてもらったが、三沢和子さんにも、コークの〈お母さん〉の称を進呈したい

三沢和子さんの、ぼくはファンである。一昨年、モスクワの青少年劇場で演出したとき、いい女優さんと出会った。それは西田豊子さんの書いた「羽衣」を、日本のスタッフの協力を得て、ロシア人の俳優だけで上演するものだったのだが、母親役をやったその女優さんは、同じことを二度とやらない。一回ごとにやることは違うのだが、いつも嘘がない。即興力があるということだろうが、単なるアドリブではない。即興的に何かが出来てしまうバネを内側に情熱として持ちながら、それを働かせる一つ手前までをきっちり運んでいるために、役の線から逸脱しない。だから、やることは違っても、印象はいつも同じになる。その上、いつも自分にとって実感があるかどうかの、冷静なチェックが働いている。演出家にとって、こんな頼りになる役者はそういない。

彼女を見ていて思い出したのは、三沢和子さんである。実によく似ている。即興性といい、実感をバロメーターに

顔

くりきひであき
栗木英章

劇作家・俳優
劇団名芸



やさしさとやさしさを貫く勇氣の人

劇団名古屋 久保田 明

いつもながらというより、いつも以上に心に沁みる温もりと哀切と、それではおさまりきらぬものを感じながら、劇団名芸平針小劇場をあとにした。作者であり、主人公を演ずる俳優でもあった栗木さん自身の心の内を聴き、その真摯さにうたれるという感動を、満員の観客と共有したと思っただ。

栗木さん、と皆は呼ぶ。あだ名は無い。親しみも尊敬も愛着もたっぷり含ませて、「栗木さん」と皆は呼びかける。五四歳。故拓殖洋さんを継ぐ劇団の代表者でもある。全り演名古屋劇団協議会、反核舞台人の集いの仲間として、一緒にする機会も多い。川端康成の『伊豆の踊り子』ではないが、「いい人ね」「いい人はいいね」と無条件に言いたくなる。いい人、やさしい人、誠実な人と、月並みなことばに実体を感じさせる人、だと思っていた。

昨秋の舞台『夢家族―汽笛はいつも切なくて』の主人公がみせたものは、そのほとんどが栗木さん自身を、ほうふつさせるやさしさであった。だが作者である栗木さんは、

その主人公にかつての恩師の言葉を思い起こさせる。「やさしい日本人が、戦争に突入し、人殺しをやってしまった。やさしさを貫くにはとても勇氣が必要な時があるものだ」そして主人公は、会社から送りつけられた退職願いの用紙を破り棄てる。やさしい涙だけではない光と熱のあるシーンであった。

昼間を演劇外の業（なりわい）に費やしている者は、その業のさまざまを創造のバネにすることが多く、これを僕は有効なものだと信じていた。

枯葉舞う平針小劇場からの帰り道、ふと思った。どうして栗木さんを「いい人」という呼び方などで括れるものか。大手企業に働きながら、あえてそこが舞台とわかる作品をしばしば書き出す栗木さん。自身も退職勧告の肩を叩かれ、崩折れそうになる自分を見つめ、遠くで切ない汽笛を聞きながら書き続け、演じ続ける栗木さん。やさしさを貫く勇氣の男と言うべきか。彼の創作の身近に居られる幸せを、改めて思う。

俳優レーベジェフ八十歳その他

付、日本とロシア演劇 VII

桜井 郁子

まずペテルブルグの話題を二つ。

97年1月15日、俳優E・レーベジェフは80歳になった。年末に電話した時、たいそう元気のいい声で「来ないか」と言われたのに、日程の都合で応じられず残念だった。『ある馬の物語』の主役の馬ホルストメールを演じた人、83年88年二度の来日公演で観た人も多いだろう。日本なら「人間国宝」と言われるこの人の記念の夕べが一晚ならず、一週間続いた。80歳で！ この前代未聞の催しについて少し書いておこう。彼はトフストノーゴフの義弟、ポリシヨイ・ドラマ劇場の俳優だが、お祝初日はマイルイ・ドラマ劇場であった。近年演出家ドージンの招きで『楡の木の下で』と『桜の園』に出演して、海外公演にも参加しているからだ。フィールス役で彼も参加しての『桜の園』（チエーホフ作）公演の後、同劇場の若い俳優たちによる朗読・歌・踊りで参加者をお笑わせ感動させた。15日はポリシヨイ・ドラマ劇場の大舞台、お定りの祝辞、讃辞の他歌あり、バレエあり、催しは深更にもおよんだが、お祝いを受

ける当人は殆んど座ろうとせず、最後に発言の権利を与えられた時は朗々たる声で歌をうたった。「シヤリヤーピンも羨むばかり」と記者は書いている。続く五夜は小ホールでの彼の夕べ。これまでのお得意の役からの抜粋、ホルストメール役の他、『賢者にも抜かりはある』の高官クルチツキイ役、『ワーニャ伯父さん』のセレブリヤコフ教授役等々。それから歌「仕事の歌」や民謡の数々を聞かされた。ホルルの傍を通るバスはお客を迎える花火を垣間見するためにブレーキを掛けたとか。このすばらしいマラソンに臨場できなかったのは口惜しいけれど、このニュースを読んで自分の事のように嬉しくなった。彼の書いた短編『妹』を早く訳さなくては…（これは傑作なのだ）

次の話はマイルイ・ドラマ劇場。年末年始は一月末にパリへ持っていく芝居、チエーホフの初期戯曲『プラトーフ』の稽古に専念していた。昨年私だけに稽古を見せてくれたプラトーフ作『チュベンゲール』ーシペリアの収容所などを描くシンボリックな告発劇の試みはまだ出来上つ



レニングラード・ポリシヨイ・ドラマ劇場
『ある馬の物語』ホルストメール=レーベジェフ

ていないようだ。主人公が社会主義についてたずねるのに、四人のレーニンが次つぎに登場、答えたり答えなかったりというおもしろい場面もあったが。

さてモスクワ。今冬はマイナス二十度以下の厳冬のなか、目覚ましいとは言えないが、それなりに演劇界の話題に事欠かなかった。

サチリコン劇場のプレヒト作『三文オペラ』、は豪華なお金をかけたと宣伝され、高額切符の上にダフ屋も出たと噂しきり、とうとう出たかという苦々しいニュースだが、今の所サチリコン以外に波及しそうにない。この『三文オペラ』、主演は同劇場の主宰者ライキン、演出は若いマシコフ。ピストルをむやみにぶっ放して花火の打ち上げしき

りだが、一体どこにお金を使ったのかわかりかねた。それよりサチーラ劇場、ブルーチェク演出の『三文オペラ』の方が満足度大。メッキー役他コーラスも合唱力抜群。斜めに歪むビルの背景、回り舞台などを活用しての舞台転換、演出のブルーチェクはベテランらしくそつがない、フィナーレがいい。絞首刑の縄を首に巻いたままのメッキーに思いのまま語らせ、歌わせた。

もう一つの話はモスクワ芸術座での『稽古の後で』。戯曲はスエーデンの映画監督ベルイマンの作。演じるのが俳優ユルスキイのファミリイ、彼は自らプロデューサーを抱える外部劇団の主だが、妻のテナヤコワ、娘のダーシヤ（初舞台、芸術座付属演劇学校卒）の三人だけ。演出家と女優の母娘（母は幻想場面）の物語、芸術談義に愛がからむ。テーブル、長椅子や舞台裏らしく小道具の散らばるだけの大舞台で、ユルスキイの見せる変幻自在な声と表情は片時も目が離せなかった。

他に新しい作品はやはりフォメンコとジェノヴァア演出のもの。これは後にして演出家としては、ペテルブルグのスピバークのモスクワ・デビュー。フランスのコメディイ『男性、単数』は性転換した男女のからむお話。ムロージエクなど哲学的題材を得意とする演出家だが、さりとて気の利いたヴォードビルをまずは仕上げた。劇作家カザンツエフの久しぶりの新作上演『漂泊者』は、現代人の一つ所

にとどまり難い愛の遍歴を夫婦、隣人、親子の関係の中に追求するドラマ。俳優たちのアンサンブルもよく、ユーモアもある現代的センスの活きた舞台だ。

フォーキンの新しい演出作品『笑話集』はタバコフ劇場で。ドストエフスキイ作『バボーク』とヴァムピロフ作『天使との二十分』各一幕をあわせたもの。第一幕は墓場の土の下の住人たちの会話によるグロテスク、第二幕は田舎のホテル宿泊客の金をめぐる小さな騒動を日常会話で展開するリアリズム劇、終って

みれば奇妙に響きあっていたのがおもしろい。タバコフ劇場の若い俳優マシコフやミローノフが達者な演技で見せてくれる。

さあフォメンコとジェノヴァチに話を移そう。まず今回は演劇大学で二つ。フォメンコ演出のチューホフ作『結婚披露宴』と、ジェノヴァチ演出のシエクスピア作『冬物



ツルゲーネフ原作『小喜劇』舞台より
マーラヤ・ブロンナヤ劇場

絶」と書いてある通り、息もつかせぬテンポの奇智と笑いの疾風だった。『冬物語』はおどろおどろしい悪魔の跳梁もさみながら、じっくり見せる三時間の二幕だった。

さて、ジェノヴァチのツルゲーネフへの取組みが話題をさらっている。彼は『白痴』の受賞によってか、マーラヤ・ブロンナヤ劇場の首席演出家になった。新しい作品は『フォメンコ工房』での『村のひと月』と、マーラヤ・ブロンナヤ劇場での『小喜劇』、いずれもツルゲーネフ作品だ。

チューホフが『かもめ』をコメディと呼んだのはよく知られているが、それより三十年も前にツルゲーネフは喜劇『村のひと月』を書いた。この作品はエーフロスがマーラヤ・ブロンナヤ劇場にのこした遺産の一つとして有名だが、ジェノヴァチ演出によってまた新しい生命を得た。

半円形ホールに、大きな円柱二本ずつを組んだ加動装置が左右に動いて、舞台にいろいろな表情を与える。ヒロインは莊園の若い主婦ナターリヤ、生活の不自由はないのに満たされない日々で、崇拜者ラキーチン相手に苛立ちを抑えきれない。夫は仕事一途、ラキーチンは節度を保って話相手以上に踏み込んでこない。苛立ちのもとがやがて判る。息子コーリヤの家庭教師、若い学生ベリヤーエフがもたらした新しい空気である。コーリヤや養子ヴェーロチカ17歳が歓声あげて彼とたわむれ遊ぶ姿に、彼女の秘めた

語。出演はいずれも演出科フォメンコ・クラスの四年生が主体、「工房」のプロ俳優が少数加わっているが、すっかり出来上って「工房」のレパートリーに入った。

『結婚披露宴』はテキストでは短い一幕が、マスターの手にかかると各人物のエピソードがふくらんで、音楽と踊りを混えた休憩なしの一時間半。プログラムに「十三の気

欲望が目覚めます。おまけにヴェーロチカが彼を恋していると知り、嫉妬に胸が騒ぐ。いささか長い一、二幕の終り、ボールのつべんでベリヤーエフが尻をくるくる回すクライマックスから、三幕は急転直下、解決のないままにベリヤーエフとラキーチンが去り、ヴェーロチカも出て行くという物語。無邪気に見えたヴェーロチカが、養い親ナターリヤに問いつめられると、相手の心の内も見透す女になる。然し才能を発揮する機会もなく一生田園に埋もれるのが19世紀の女の運命で、自由を希求しながら彼女がここを逃れるには気の染まぬ男と結婚するしかない。ここにこの芝居の鍵がある。他には何組かの男女が出て賑やか。「工房」の若い俳優たちはのびのび自由に演じていた。

ジェノヴァチはツルゲーネフに発見したものを更におし進めて、マーラヤ・ブロンナヤで『小喜劇』を上演した。『村のひと月』と同時期の一幕劇『郡貴族会長邸の朝食』、『田舎おんな』、『街道でのおしゃべり』三つを一夜に上演し『小喜劇』と名づけた。この命名はツルゲーネフ自身から出ている。彼は愛人ヴィアルドーへの手紙で度々「私の小喜劇」とこれらと呼んでいたから。

この三幕、それぞれに味わいの異なる喜劇だ。第一幕は地主兄妹の遺産分割土地争いの調停に集まった面々がみんな癖者で、大騒ぎの後何の結果も出せずに終わるグロテスク、笑劇。

第二幕は田舎地主の妻ダーリヤが、十二年ぶりに会った伯爵をとりこにして、ペテルブルグ行きを果たそうという話。彼女もナターリヤのように田舎生活にうんざり、違うところは都に憧れるが恋は欲していない。気のいい夫は妻を遠巻きにうろろするばかり、伯爵は常人の心も動作も持たぬマリオネット、ダーリヤの前に膝まずいても立ち上れない始末。結局、誇りだけ高い伯爵は、ダーリヤたちの望みを叶えてやる。人物の性格といい、関係といい、ちぐはぐの連続で笑わせる上質のヴォードビルだ。

第三幕は一転してロシアの広野を行く馬車の中、全財産をすってしまった若い地主が故郷をめざす。同行するのは召使と御者、延々と続くのはてんでに自分勝手なおしゃべりばかり。ところが故郷が近づくにつれ、地主の歌にあとの二人がハーモニイ始める。途端に前の幕の登場人物がずらりと前舞台に並んで大合唱、踊りもとび出す。この時になって背景に揺れる草原と農民（人形）の意味がいつそうはつきりする。これはロシアの大地、ロシアの民、ロシアの歌声なんだ。客席も揺れだした。

『小喜劇』はこの劇場の新世代、ジェノヴァチ・チームの俳優たちが楽しみに達者に演じてくれたが、圧巻は第二幕の伯爵を演じたタラマーエフだ。登場した途端、目を疑いたくなった。まるで人形のようなぎくしゃくした動作、白塗りの顔にどじょう髭、あの『白痴』のマイシユキンの

面影のかけらもない。

タラマーエフには全く驚嘆させられる。これまで彼の舞台はかなり見たが、どれも役に応じての工夫があつて、二度と同じ人間に会わない。『白痴』のマイシユキン、『森の精』（チエーホフ）のセレブリヤコフ教授、音楽劇『粉屋でべてん師、結婚仲介人』の粉屋、『深い淵』（A・オストロフスキイ）のキセリニコフ役……。『深い淵』では、疑う事を知らぬ求婚者・学生22歳から初まり、劇の進展につれて商人階級の中でおし潰され、みじめに変貌する29歳、34歳、フィナーレでは零落した父親で、旧友に拾われた我が娘を黙って見送る諦観の人39歳。背中がぞくぞくとする程凄味を感じる演技だった。勿論全て演出のジェノヴァチと共に作りあげた役なのだが……。

この際9年前「人間」スタジオで見た『パンノチカ』にも触れておこう。ゴゴリの『ヴィイ』を脚色したもの。地主のお嬢さんパンノチカが死後妖怪となり、夜な夜な若い旅の神学僧をたぶらかすという話。半裸の美女が天井近くの櫓から神学僧に迫る。彼女に魅入られた神学僧はもがき苦しみ、櫓にすがって自転車のペダルを踏むように空気を漕ぐ。美女は彼を背に闇の中を駆けめぐる。実はこの美女、パンノチカを演じたのが現在もタラマーエフのパートナーであるローザノワだった。この芝居を作った演出家ジェノヴァチも、極限に近い身体表現で応えた二人も、当



『パンノチカ』舞台より スタジオ劇場「人間」

味を失っていないかった。フォメンコは前回に書いたので、今回はジェノヴァチの事を書いてきたのだが、紙数が足りなくなってきた。簡単にデータをまとめておこう。

58年生まれ。クラスノダール文化大学卒業後、モスクワ演劇大学、フォメンコ、クラスを卒業したのが88年。大学のフォメンコの下で教える傍ら、88〜91年「人間」スタジオに所属して『パンノチカ』（89年）、コルネイユ作『イリユージョン』（90年）を演出。91年大学の演出科学生と共に『ウラジーミル三等勲章』（ゴゴリ断片戯曲による）

を出した。

91年からマレーヤ・ブロンナヤ劇場の演出家として仕事。92年シエクスピア作『リア王』、93年『深い淵』、『粉屋でべてん師・結婚仲介人』、『森の精』、95年『白痴』三部作、96年『小喜劇』、同劇場首席演出家となる。

時無名だったから、それと知らず見たのだが強烈な印象は今も目の底にのこっている。

巨匠フォメンコの『スペードの女王』は今年の「黄金のマスク」賞を獲得したそうだが、私は『罪なき罪人』を三度目の観劇。ペテランたちの舞台が出来立てのような新鮮

大学と「フォメニコ工房」共同制作のシエクスピア作『冬物語』と「工房」の『村のひと月』を96年発表。

彼の稽古はまずお茶、日常会話から初まる。生活の変化は微妙に舞台上に反映してくるからである。他人を入れないインケームな中で稽古は進む。彼自身はと言えば演劇ひと筋、彼の生活にはそれ以外の何ものも入る余地はないと言ふ。シャイで静かな人だ。

ソヴェート演劇という言葉は現在使われない。然しソヴェート演劇はあった。少なくとも三世代にわたる営みと成果が、それなくして今のロシア演劇は考えられない。

まず第一の世代は20〜30年代、スタニスラフスキイ、メイエルホルド、ワフタンゴフの時代、次に第二次大戦を越えて戦後、60年代人の時代、前号に書いた演出家たちと同時にアルブゾフ、ローゾフ、ヴォロージンなど劇作家が登場した時代、更に孤峯のように出現した劇作家ヴァムピロフと、その後のポスト・ヴァムピロフ世代が続き、ソヴェート連邦崩壊を迎える。というのが大ざっぱな俯瞰である。ペレストロイカから連邦崩壊、現在に到るのはもう一つの時代だが、これとてもソヴェート演劇という土台があつてこそである。

日本から言えば戦前から彼地への道は狭く、戦後も冷戦と安保体制のためにロシア社会とは遠く隔てられていた。

を氣にかけ、成功を喜んだ。

彼自身多作、毎年一、二編は書き、ほとんどが即上演された。自作の演出ではエーフロスを高く評価している、例えばレンコム劇場の『私のかわいそうなマラー』(65年)、マラーヤ・ブロンナヤ劇場での『不孝な男の幸せな日々』(69年)、『旧アルバート街の物語』(70年)など。自分の作風の特徴として、否定的人物が書けないことを言う。女性、愛を常にテーマとして、チェーホフ以来の伝統の会話のきめ細やかさ、ストーリー展開のうまさ、適度の甘さ。自らの作品をメロドラマと称してはばからない。観客の好みをつかんでいた作家と言えるだろう。日本でも特に60〜70年代には彼の作品上演が続いた。『イルクーツク物語』に続いて、『失われた息子』(日本題名『父と子』63年)、『私のかわいそうなマラー』(66年)から、『古風なコメディ』(日本題名『ターリン行きの船』79年)など。

アルブゾフと並び称されるローゾフも青年群像を描くのを得意としたが、人物に対する視点はより鋭く、辛らつ、社会観察も深い。ロシア全土を風びした『ごきげんよう!』(53年、日本題名は『GOOD, LUCK!』)やソヴレメンニク劇場の旗上げ公演に使われた『永遠に生きるもの』(56年)から『えぞやまどりの巢』(78年)まで、ロシアでの上演は数知れず、彼自身愛され尊敬されているが、日本での上演が少なかったのは残念。因みに『永遠に生き

そこへ開けられた風穴の一つ、演劇の場合は『イルクーツク物語』に初まるアルブゾフの登場だろう。シベリア建設に情熱を燃やす青年男女のユートピア伝説とラブストーリーがからむ『イルクーツク物語』は日本のみか、アメリカ、ヨーロッパをも駆けめぐり、新しい世界への眼を開かせてくれた。

アルブゾフ(08〜86年)はロシア演劇にとっても一つの山。少し彼の事を書いておこう。アルブゾフの登場は戦前から、『ターニャ』(39年)が主演女優にババーノワを得て大きな成功をおさめ、数々の批判にも耐えて新しい劇文学への道を切り拓くものとなった。この後演出家ブルーチエクや若い学生・俳優と共に「モスクワ演劇スタジオ」を創設し、共同制作『夜明けの街』(40年)を世に出した。このスタジオは戦時中野戦劇団になったが、アルブゾフが終生劇場と共にある作家としての出発点となったし、未だの劇作家を志す人びとに励ましとなった。戦後に作家として出発した同時代人ローゾフ(13年生まれ)、ヴォロージン(19年生まれ)を強く推したのも彼である。何年か後評論家クルイモワと共に作家同盟内に創った「劇作家工房」は「アルブゾフ・スタジオ」とも呼ばれ、現在活躍中の劇作家V・スラフキン、L・ペトルシエフスカヤ、A・カザンツェフ、M・ローゾフスキイなどはそこから巣立った。アルブゾフはこの「工房」出身作家たちの上演

るもの』はカラトゾフ監督によって映画化され、カンヌ映画祭でグランプリ獲得、『鶴は飛んで行く』の題名で日本でも度々上映されている。

ヴォロージンも日本上演は『工場の娘たち』(56年)、『うちの姉さん』(61年)ぐらいだが、映画化された『五つの夜』(59年)は日本でも上映され好評だった。彼の場合も社会の片隅に生きる人びとの生活をとりあげながら、背後にある社会を感じさせる。デリケートな心理描写にすぐれ、ちよっぴり苦味を含み、ペーソスを漂わせる。ヴィクトル、ヴォロージン共に戦前に演劇教育を受けながら、50年代劇作家として出発したのは、それぞれ戦争に一兵士として参加したためであった。

日本で60〜70年代に紹介上演された作家はこの三人に限られないが、あとは次号で…。

92号の正誤(↓の下が正です。)

P 66

上段一行目は次のように改めます。

『生者と死者』(K・シーモノフ作)、A・ボズネセン
スキイ叙事詩による構成。

P 69

下段9行目 漂あせて ↓ 漂わせて

正誤表

2行目 ネムローヴィチ ↓ ネミローヴィチ

(もくじ) 桜井邦子 ↓ 郁子

千年の丘

作・北野 茨

〈劇団支木上演台本〉

三内丸山の 丘に
秋雨 降れば
十字架 みてえな
土偶 見えて
庵ア それ
口に
くねえるんだ

登場人物

小川 サキ 祖母(70才) まだしっかりしている——完全な津軽弁
小川 龜夫 長男(47才) 大手企業部長 東京在住——標準語に近い
小川 達子 その妻(45才) 大学考古学室員 東京生まれ——東京弁
小川 糸子 長女(42才) 経営者 地元生まれ——青森弁
小川 賢太郎 その息子(20才) 大学生 地元大学——青森弁が残る標準語
小川 理恵子 その娘(19才) 大学生 東京の大学——青森弁が残る標準語
小川 文夫 次男(41才) 劇作関係 東京在住——標準語に近い

小川 翡翠 次女(34才) 放送局独身 地元在住——より標準語に近い
梅田 澄枝 賢太郎の彼女(20才) 大学生 京都生まれ——京都弁
佐々木栄蔵 翡翠の彼(30才) 放送局 独身 岩手生まれ——標準語に近い
河合 良二(良 りょう)(41才) 従業員 独身 地元生まれ——青森弁
小川 静夫 糸子の夫(44才) 精神病で入院中 秋田生まれ
小川 賢太郎の子ども時代(10才の頃)
小川 理恵子の子ども時代(7才の頃)

小高い丘の上にある、「千年電気工事店」の裏庭。
近くに青森三内丸山遺跡を臨む。

正面は広縁付きの和室。ブドウ棚のかかったテラスがかなりの間口で突き出ており、素朴なつくりの木の長テーブルと椅子。テラスの前は芝。下手前にけっこうな樹齢の白樺の木が一本。下手隅、木の近くに今は使わなくなった井戸。そして水道の蛇口。近くに白い丸テーブルと椅子。下手は家の東に面した庭で、砂利が敷かれており、奥(店舗前の道路)から通り抜けられるようになっている。

上手奥には家に隣接した作業場があり、木戸で仕切られているが上方にのぞく屋根や鉄骨の梁で、それが作業場なのだということがわかる。

幕が上がる。

今、縄文の悠久の彼方から続く、時の流れを想起させるかのごとく、朝から昼、そして夕暮れへと過ぎて行くかと思われる中、静夫が、井戸のそばで土器のかけらをていねいに拭いている。理恵子、賢太郎(幼少時の)が登場。二人に小さな土器のかけらを渡す。白樺の木の下に理恵子を抱いて座る静夫。賢太郎は傍らに立つ。三人は、千年の丘を前に立っている。やがて闇の中に消える。

セミ時雨の中から、澄明——。
一九九四年八月六日、屋下がり。

(1)

白樺の緑の葉が、丘の上を渡る微風にそよんでいる。時折風に葉が、ネプタのハヤシが微かに聞こえる気がする。作業場から、誰かの作業の音がある。文夫が座敷に寝そべって、手紙のようなものを出して、見ている。奥でサキ「亀夫! 亀夫!」亀夫「ハイハイわかりましたよ」と亀夫がウイスキーのボトルと新聞を下げて、縁側から登場し、テラスに下りる。机に座るが、かなり酔い気味。文夫は、手紙を文庫の中にしまひこむ。

亀夫 何を読んでるんだ
文夫 ー。

亀夫 文夫、どうだった
文夫 ー。

亀夫 あれだ、遺跡、そのの。
文夫 渋滞している。

亀夫 ネプタより、多いか、人出。
文夫 さあ。

亀夫 (新聞紙を読み上げ)よみがえる日本最大の縄文遺跡。太さ一メートルの栗の巨木が支える、謎の巨大建築。古代文明の常識を覆す、今世紀最大の発見、初の一般公開。お前、見にいかなかったのか。
文夫 追いかけてみたくて、大勢の人間にさ、昔拾った石ころ、ただきれいだから大事にしてきたのに、急に珍しい宝石だから見せろって。

亀夫 自分の庭、荒らされるようでは。
文夫 そんな思い入れなんかないだろう、兄さんにや。
亀夫 おれだけ除け者にするな。覚えてるか。秋になって鳥が終わるとな、あそここの斜面に雨が降る。土が流されて、氷山の頭みたい

に突き出てくる。土器や土偶のかけらだよ。わくわくしてきてな、拾うんだ、そいつを。こんな、これぐらいだったかな、十字架みたいな土偶をつまみ上げて——（口にくわえる。誰か見てないかってな。）

文夫 兄さんが教えたんだ、それ、俺と糸子姉さんに。

龜夫 ざらっとした土偶、黒土——

文夫 かけらを口に含んだまま、ここに駆け込んで来て、あの井戸水で口をすすいだ——。

龜夫 喰ったことあるんだよ、俺だって、その宝石

文夫 それだけだな。

龜夫 そんなもんだ。

文夫 比較されたよ、ずいぶん、兄さんと。

龜夫 何を言いたいだ。

文夫 出来のいい兄貴を持つと、弟が苦労するなんて知らないだろう。

龜夫 ばか言え。

文夫 親父によく言われた。他人（ほか）のやつと同じことするな、他人のやつ尻について行く人間になるな。

龜夫 お前は親父とよく喧嘩した。そんなに嫌いか親父のことが。

文夫 お前は兄貴より勉強じゃ劣るんだから違う方法で勝って。

龜夫 法要にも一度も来たことがない。ようやく七回忌に初めて来た。当てつけじゃないだろうな、俺への。

文夫 さあ——。

龜夫 ま、いいか。しかし、あれだな。飽きるほど人生哲學聞かせた割りには、親父も思い通りにならなかつた——。

文夫 家を継がそうと思っていたのが、兄貴が一流の大学に入っちゃまったもんで、田舎の電気工事屋より、商社勤め、こっちにお鉢が回ってきた。

龜夫 お前は、絶対継がないって、親父と喧嘩して飛び出して、芝居

なんか——。

良が木戸から登場。

良 昨日はごろうさまでした。

龜夫 ああ、良さん。あんたこそ、せつかくの休み。

良 いえ、副社長は？

文夫 副社長？

龜夫 糸子だよ。

文夫 あ、ああ。今、あそこ（向かいの遺跡）

良 そうですか——。

龜夫 良さん。この千年電気工事店あんたの思うようにやったらいいんだ。あいつ、いや、社長にも遠慮なくな。

良 いえ、じゃ、また。

良また木戸から作業場のなかへ。

文夫 （龜夫に）余計なこと——。

龜夫 余計なことあるもんか。救世主には相応しいグラスとワインを、そして栄光を、だ。

文夫 姉さんの前ではそのこと、気をつけるよ。

龜夫 お前、あの出来損ないに氣遣ってるのか。親父は心配が絶えな

かつた、あいつが来てから。

文夫 あいつって、少なくとも、俺たちの代わりに、この店継いだん

だ。静夫さんは。

龜夫 十年以上は寿命縮めたな、あいつのお陰で。

文夫 やめろって。

龜夫 飲むか、文夫。

文夫は木陰から出て、

文夫 アルコール依存症じゃないかて言ってたぞ、達子さん。

龜夫 これぐらいでアル中になるか。達子の方がもっとすごかつた。

アル中一歩手前。元に戻るのに二年だ。

文夫 親が二人とも。

龜夫 浩一もせんせん俺たちに寄りつかん。

文夫 浩一君、どうしてる？

龜夫 相変わらず夜の商売——バイトが本業になっちゃまう。

文夫 大学は？

龜夫 わからんな。

文夫 中学の時、家庭内暴力。

龜夫 大変なもんだつた。その頃だ、達子がアル中になりかけたの。

文夫 浩一君、好きなようにさせておいたほうがいい。いつまでもぐ

うたらしているような子じゃないよ、浩一君は。

龜夫 子ども持ったことないから。

文夫 子どもの話はやめよう。

龜夫 女なんて、子どもの話しかしないだろう。

文夫 子ども、欲しがらない女もいる、湘江みたいに。

龜夫 そうか——。お前、あれだ、まだ売れない芝居、書いているの

か？

文夫 兄貴に喰わせて貰おうと思ってる。

龜夫 芝居で喰える訳ないよな。ま、湘江さんが先生やってるから、

喰えてんだろが。で、どうなんだ、お前んとこ。

文夫 何が——。

龜夫 いや——。ところでな、お前、詳しく訊いたか、あいつのこと、糸子が母さんに。

文夫 入院、ちよつとだけだぞうだ。

龜夫 法事の席で、突然わけのわからないこと叫んだんじゃ、今度こ

そ終わりだからな。

文夫 終わり、って、何が？

龜夫 終わりつたら、終わりだよ。

文夫 それは糸子姉さんが決めることだろう。

(2)

部屋の奥から妻茶を持ってサキが現れる。

サキ なに大声出しているんだい。

文夫 母さん。

サキ （酒飲んでのを見て）龜夫、いいかげんにおしよ。今晚の夜行

だろう？ 文夫も。

龜夫 大したことない。

文夫 母さん、昨日は疲れたろう。

サキ まだ、ボケる歳じゃあないよ。何の話してんだい。

文夫 ——。

サキ 当ててみようかい。

文夫 いや——。

サキ 静夫さんのことだろう？ 言わなくたってわかるよ。

龜夫 ま——。

サキ ジイさん（夫）があんなに責めたからねえ、静夫さん、おかし

くなつちまつたのは、糸子が婿とるときに、どうして奥信所使わな

かつたのかわって、ジイさんそればかり言ってる死んでった。まあ静

夫さんの実家が秋田で調べなかつたんだよね、家系のこは、電気工

事士の免許取らせようと思つて、高校の卒業証明書取り寄せろつて

静夫さんにくら言ってもそうしないんだから、ジイさんがその学校に電話したら、そんな人この学校にはいませんでしたって。ジイさんに問い詰められて……。それからだよ。静夫さん、おかしくなっちゃってさ。真夜中にその稲荷神社のお堂に立てこもって、一日も。

龜夫 離婚させたかったら、親父は。

文夫 でも母さん。家系にそういう病気があつたつて、必ず出るとは限らない。

サキ 必ずだつたら、賢太郎や理恵子が心配だよ。静夫さんも、高校出てるなんて、うそつかなきやよかつたんだよ。どうしてかねえ。

文夫 それからは大丈夫だつたんだらう。

サキ 今まで誰にも言わなかつたけど、本当は……。あれは、理恵子が小学校に入った時だよ。糸子が具合悪くして、どういうわけか、PTAに静夫さんが行くつていうもんだから、ジイさんが無理やりやめさせて、静夫さんの代わりに良さんを学校に行かせたんだよ。そしたら、急に静夫さん、ふさぎ込んでしまつて。

文夫 どうした。

サキ 一階に閉じ込めて、三日間――。

ようやく良さんに部屋の鍵をこじ開けてもらつて、良さんには本当に世話になつたよ。ジイさんは、良さんが糸子の旦那だつたら、つていつもこぼしてねえ。

庭から野菜売りの母さんが登場。リヤカーが道路に置いてある。

母さん 野菜いらなか――小川さんや、暑いもう――。人、出てらもう――。おや、龜夫さんに――。

文夫 文夫です。

母さん あい、文夫さん。ずいぶん立派になつたじゃ。見違えてま

ど、店に戻つてきたら、急に静夫さん、良さんに嘔つてかかつたつて言うんだよ。ここんど、そんなこと滅多になかつたんだけど、ジイさんのことでもまた思い出したかね。

龜夫 やつぱり恨念だ、親父の――。

サキ ジイさんは何でも強引だつたからねえ――。

文夫 けど、そのガンコ親父と四十五年――。

サキ お前たちも、それ、わかる歳になつたらう。

龜夫 充分――。

サキ こういうことは「充分」でいいんだよ。でなきや、終わりつてこつたよ。

野菜の母さんがビニールに入れたトマトを持って登場。

母さん これぐれいでいかべえか。三百円。

サキ (持つて) あれ。こんなに冷えて。

母さん なんだべ? トツチャ死んでまつたら冷えて冷えて。

サキ バツチャも冷えてらんだべ?

サキ ばか。あたしや冷えたら、三内(さんない)の墓所(はかしよ)行きだよ。

母さん ハハ、なんだべんだべ。クーラーだ、クーラーで冷やしたのよ。

せば。

サキ はい、ありがとう。

野菜の母さん、退場。

文夫がトマト一つ取り、水道で洗つて、かじる。

サキ (作業場の音が聞こえて) 良さん。まだやつててくれるのかい。

たじゃ。

サキ あんたはいつまでも若いねえ。

母さん ひひ。毎日毎日、こうしてリヤカー引いて野菜売つて歩けば歳取る暇ねじゃ。

サキ 暑いのに、ごころうさんだねえ。

母さん やや、ワイは大丈夫だつたつて、何もかも暑くて、野菜アメテ(腐つて)まるじゃ。

サキ トマトは大丈夫かい?

母さん ああ、トマトだば、ワイの家のはこりつとしてるもの。

サキ じゃあ、貰おうかねえ。

母さん あい、今、持つてくるはんで。

サキ ああ。

野菜の母さんは表へ行く。

文夫 母さん、昨日の入院は?

サキ 静夫さんかい。

文夫 ああ。

サキ ここんど少し変だね。法事挟んで三日間だけ入院させてたんだよ。

文夫 そういえば、理恵ちゃん、言つてたな。何日前、静夫さん、良さんと口喧嘩したんだつて?

サキ 喧嘩じゃないんだよ。静夫さんはさ、菓のまなきやないだらう。すると、どうしても動くのが鈍くなつたり、あくび出たりするんだよ。一週間前くらいかねえ、良さんが高い所に昇つて作業しているときに、静夫さんが下で梯子を押さえていたらしいんだが、つい手を放して。幸い、怪我はなかつたんだが、良さんが静夫さんにもつと気をつけてつて言つたらしいだ。その場はそれでよかつたんだだけ

龜夫 朝から休みなし。

サキ 昼まででいいつて言つたのにねえ。

サキは作業場の木戸を開けて、

サキ 良さん。良さん。もういいんだよ。今日は休みなんだから。切り上げておくれよ。

奥から、「もう少し」などという良の声がする。

サキは「そうかい。すまないねえ。じゃあ、今冷たいものを持つて行くからね。」などと言ひ、戻つて、

サキ ありがたいよ、まったく。良さんにやどれほど、この店助けてもらつて居ることか。どうれ、おいしいスイカでも切つてやろうかね。(座敷に上がり退場)

下手陸奥から、明るい声が聞こえて来る。

(3)

糸子、達子、理恵子の三人が

理恵子 達子叔母さん、細文人つてどんな言葉喋つてたのかしら。

達子 ん――、多分、アイヌ語系かな。

理恵子 私ね、津軽弁だと思ふ。

達子 それはないでしょう。

理恵子 ゼツタイに津軽弁! ネ、母さん。アハハハ、ただいま!

といいながら遺跡を見学して帰ってきた。

亀夫 おう。どうだった、世界最大の縄文遺跡は？

理恵子 あね、すごい、達子叔母さんって、説明してくれる係の人に質問して、ね、母さん？

糸子 (頷く)

理恵子 さすが、考古学者。

達子 あたしは考古学研究室に勤めているヒラの研究員。

理恵子 そんなことないです。ああ、あたしも大学で考古学にすればよかったなあ。

文夫 理恵ちゃん、心理学だったな。

理恵子 (うなずいて) 文夫叔父さんも、くればよかったのに。自分の家のすぐ目の前に、こんなにすごい遺跡があるなんて、思ってもみなかったー。

亀夫 じゃ、変わったら。

理恵子 意地悪ー。

亀夫 理恵ちゃん。人生は、気づいた時にはもう遅いんだ。な。一番不幸な体験をした人間が、一番幸せになれる方法を考えて来たんだよ、古今東西な。

文夫 変なこと言出すなよ。またアルコールでエンジン空吹かしだ。亀夫 まだ全開までは程遠いさ。達子、どうだった？ 親父の七回忌の憂さ、晴らしてきたか？

糸子 兄さん。

達子 いいよ、糸子さん。お義父さんの法要ももちろんだったけど、三内丸山遺跡にも是非来たかったの。今なら、日本中の考古学者がここに来たがっつるとおもう。

理恵子 そう、ネプタも霞んじやうくらい。

達子 糸子さんたち、いろんな思い出あるでしょ、あそこには。

文夫 小さいとき、よくあの辺りで遊んだ。あそここれぐらい(二尋)ぐらいの塚があつて、その中に落としちゃったことがあつた、糸子姉さんを。

糸子 草が頭の上からぼうぼうおおいかさつて、もう、一生そこから出られなくなるんじゃないかって、まっくらで。

文夫 姉さんが泣いてるんで、俺も、中に入ったら、糸子 あつたよね、塚の中の土手の両側に。土器や、黒い石のヤジリが、いっぱい突き出てー。

文夫 かがんで、二人で、ずっと見てたー。

糸子 そのうち、何だか、何か胸に迫ってきて、恐くて恐くて。文夫の手引いて、あの丘に夢中で登って行つてー。

文夫 今じゃもう、塚もなくなつて、あの丘も俺たちだけのものじゃなくなつた。

糸子 (頷く)ー。

達子 千年の丘ー。(遺跡の全貌を臨みながら)

理恵子 千年の丘って、その丘のこと？ 達子さんが、一番、係の人に訊いてたのは？

達子 はい、質問、理恵ちゃん。あの遺跡、縄文時代のいつころからだったの？

理恵子 ええ？！

亀夫 五千五百年前から四千年。

理恵子 (新聞見て) ずるい。

亀夫 (新聞) ハハ、ここに全部書いてる。

達子 で、ね。北と南に一段高くなつた部分があつたでしょ。確か縄文中期遺物廃棄ブロックって呼んでたけど。あそこはね、縄文中期の千年間に渡つて、同じ所に土を盛つて、土器や石器を埋めたところなの。糸子さんが走つていった丘はその丘ね。堅穴住居を掘つた時に出る土をそこに捨てるでしょ。土器や石器と一緒に平にし、

達子 そう。確かエジプトの初代王朝が五千年前、ここは五千五百年から四千年。そんな昔に千年間、ひとつのことを続けられたエネルギーって、一体何だったんでしょね。

一同は丘を臨んでいる。

奥からサキの声。スイカを配んでくる。

サキ おや、また討論かい。

理恵子 おばあちゃんー。

サキ (糸子に) これ、良さんに。理屈聞いてあずましくなりやあ、今の童はんど学校であんな悪さしてないよ。

亀夫 ハハハー。こりゃ一本取られたな。リエちゃん。

サキ ばか。お前(亀夫)のこと言つてんだよ。

亀夫 ー。

サキ 戻ったかい、達子さん。

達子 はい、お母さん。

サキ 見てきたかい。蜂の巣。

理恵子 蜂の巣じゃないわよ。

サキ 石や粘土のがらくた、いっぱいあつたらう？

ほれ、こにも。(白樺の木の下の指す)

理恵子が木の下に行き、土器のかげらを拾いあげる。

達子も行く。

達子 縄文土器よ、これ。

サキ ジイさんが集めてたんだよ。近所の童たち、つまみだしては道端に捨てるもんだから、ジイさん、それ、いちいち集めちゃあ、そこに並べて井戸水で洗つて。

理恵子 何かをやり遂げる人間の意思が、千年も積み重なるなんて。亀夫 まあ、千年間と言えば、柴式部や清少納言が長生きして、インターネット通信でもやつてるとこつた。

理恵子 違います。代々伝えたいっていう、縄文人の意思、心、思いです。でなきゃ、残らないでしょう、千年の丘なんてー。

亀夫 さあ、果たしてそうかな。縄文の連中が俺たちに残したわけじゃないだろ。どっかの物好きな連中が穴をせつせと掘つたら出てきた。ただそれだけのことだろう。掘らなきゃ何も出ずに、誰も知らずに、チヨンだ。

理恵子 だって、あんなエネルギーー。

亀夫 昔の話だ。

サキ そうだ、これも知らないだろう。ジイさんはね、その堰から粘土掘りして、リンゴ箱に詰めて、茶屋町(ちやまち)の鉄工所に売りに行ってたことがあった。割れた鋳物塗るのに、粘土使ったんだってさ。

文夫 初耳だ――。

サキ そう言えば、静夫さんも、かけら、拾ってたね、ときどき。

糸子は、思いついたように長いテーブルの上を片づけはじめ。

理恵子 (突然思い出した) あ。あのね、あたし三日前、ここに帰って来る前の夜、東京のアパートで不思議な夢見たの。

サキ ジイサンのかい？

理恵子 ごめん、おぼちゃん。お父さんの。あのね、あたしね、夕方かなあ、この木の下で、お父さんと一緒に座ってるの。ずっと小さいとき。で、賢太郎兄さんがお父さんの後ろに立って――。ねえ、お母さん、そういうことあった？

糸子――。

文夫 小さい頃って。

サキ 理恵子が小学校入ったばかりの頃だよ、それは。

理恵子 そう、お母さん？

糸子 さあ――。

サキ あたしも見たことがあるよ、静夫さん、退院したばかりで。

理恵子 でしょう。で、お父さん、あたしの手に、こんなかけら握らせて――。

ねえ、あったでしょう？ お母さん。

糸子――。

理恵子 ねえ、お母さん――。

(4)

亀夫 縄文。千年か――。文夫。

文夫 ん？

亀夫 あいつ、土器のかけらなんか興味あったの知ってたか？

文夫 いや――。

亀夫 あいつ、かけらなんか見て。何考えてたんだ――。ひよっとして、自分の頭の中、バラバラになったの、わかってたのかな。

亀夫は木の下から土器のかけらを拾い、それに語りかける。
テラスでは別の話しが進行するが、亀夫のひとり言が交じる。

亀夫 かけらだ――。役に立たんな――。

文夫 文夫さん。絹江さんは元気なんでしょう？

文夫 バラバラだこりゃあ。

文夫 ええ――変わりますん。

文夫 昔はどんな形してた。お前。

文夫 もうずいぶん会ってないわ。

文夫 元の形に戻りたいか？

文夫 昔と変わりますんよ。

文夫 もともとひからびてたわけじゃないだろう。

文夫 絹江さんは芯がしっかりした人だから――。

文夫 それにしても、こんなになっちゃう運命とはな――。

文夫 達子さんたちが新婚で、みんなで行った、台浦公園に、泳ぎに

文夫 ゼロから生まれて、またゼロに戻るわけだ。

文夫 覚えてる、楽しかった――。

文夫 何も残らん、互いに――。(かけらを芝生に投げ捨て、椅子

に座る)

糸子 知らないって言うてるでしょ！

文夫 姉さん。

糸子 ――ごめんなさい、ちよっと――。(片付け物を持って奥へ) 達子 (理恵子に) お母さん、昨日からずっと、疲れたのよ、きつと。

理恵子――。

サキ さ、理恵子。夕御飯の支度手伝って。

理恵子――。

サキ みな今晚、帰るんだからね、早めにしなきゃいられない。

それに理恵子は、久しぶりに帰って来たんだから、友達とネブタもある。

理恵子 だって、おとうさん、入院――。

サキ 身体は大丈夫なんだから。

理恵子 うん――。

達子 ネブタ、あるんでしたね、今夜も。ねえ、あなた、帰りに見る時間、あるでしょう。

亀夫 俺はいい。芝居屋と行け、踊るのが好きだろう。こうやってな、

ラッセラー、ラッセラー、ハッ、イッペラセ、イッペラセ、ガガス

コ、ガアーン――(酔いに任せてだらしなく踊る)

達子 あなた、――。ごめんなさい、文夫さん。

文夫 なれっこそすよ。

サキ ほれ、理恵子。

理恵子は庭から去る。

サキは座敷から奥へ。

亀夫はへたばって木の下へ。

町内班長が回覧板を持参する。

班長 やや、暑してな。盆踊りの回覧板、置いていきやす。亀夫さん、先代の社長の七回忌、無事終わったようぞ。

亀夫 お陰様で。あ、班長さん、この前テレビさ出はったそうぞ。

班長 やや、あいだもの。急に縄文ブームさなってまって、町内班長として一言って載から棒に喋られてもワガネじゃ。とんだ恥かいて

まった。したって、地元者あ、なんも考えていねえんだして。

あいでねえか、あそこの畑だって、黒土の下からガリガリガリ

出はって来るだけで、百姓やるのに、邪魔臭くてマイネって――。

亀夫 そんなでしたか。そりゃ、迷惑しました。

班長 ま、わいどは別段、見物人ごっちゃり湧いて来ても、丸山饅頭

売り出すわけでもねえし、家で縄文ソバ喰うわけでもねえたってナ

ア。せば、婆っちゃやさ、よろしく。やや、そんだ、縄文盆踊りだべ

出来るなあ――。あ、ジョーモンジョーモン、どどんがどんと――。

いいかなあ――。(踊りながら、退場)

観光客三人が来る

男 ちよっとお尋ねします。三内丸山遺跡に行きたいのですが。

女1 道に迷ってしまったらしいのです。

女2 確か、このあたりだと思おうのですが。

亀夫 君達、どちらから――。

女2 千葉です。

班長もどり

班長 千葉のどこから。
女 浦安です。

班長 なに、浦安。俺家の息子が行つてるとさ。縄文遺跡、観たい
つてが？

男 ここから近いのでしょうか。

班長 すぐそこだ。転べば着く。案内してやるから、さあ、あべ！
三人 ——？

班長 あべつ、行くべし。

女1 あのー、アベツで何ですか。

班長 私についてきなさい、案内するからということ。さあ、すぐそ
こだから、アベツヘツ。

三人 はい。

「どうもありがとうございます」等、礼を述べて班長についてい
く三人。

班長、再びもどり、

班長 亀夫さん、いつまでいるの？

亀夫 今晩帰ります。

班長 ありや、残念だな、盆踊りまでいればいいのにな。せば、お元
氣で。

帰りながら「アツ、ドドンガドン、ジョーモンジョーモンと
——」。

亀夫 盆踊りか——。そういうえば、彩をこの盆踊りに連れてきたこ
とがあつたな。

連子 彩、無理にあなたが櫓の上へ上げるもんだから、泣きだしちゃ
つて。

文夫 いいよ、もう。

連子 よくないよ、文夫さん。この人、お酒飲むと、毎晩毎晩これ
ばかり。もう、うんざり。

亀夫 ほう、じゃあ、誰かさんは毎日毎日同じことは繰り返さなかつ
たんだ、朝から酒の匂いぶんぶんさせて絡んできたときには。

連子 あたしは自分の力で立ち直つたわよ、誰の力も借りないで。

あなた、浩一と同じで、まだ立ち直れないじゃない。

亀夫 立ち直る必要なんかない。俺は俺で、浩一は浩一だ。

連子 だつたら構わないでよ、浩一のことば、もう。

亀夫 どういうことだ。

連子 授業料払いつづけてるでしょう、大学。浩一が一日も大学に通
つてないのに。卒業どころか、進学の見込みだつてこれっぽちもな
いのにな、どうしてし授業料なんか払ってやるのよ。もういい加減に
子離れしたらどうなの。素直に自分の負けを認めなさいよ。

亀夫 勝ち負けの問題じゃないだろ？ じゃあ、なんだ、俺がお前に
大学の研究室辞めて、浩一のことごとく考えてくれて頼んだとき
に、どうしてお前はそうしなかつた。俺に勝とうとして、わざと仕
事辞めなかつたのか？ 奪？

連子 あたしだつて苦しんだわよ。

亀夫 一日中酒飲みながらな。(ウイスキーをあおる)

連子 そうよ、だから、今になってあなたが毎日酒ひたりになつても
あたしは何も言わないのよ。

亀夫 ——(鼻白む、そしてまた酒)

文夫 もう(酒を)やめろよ。

亀夫 (きかない)うるさい——。

文夫 兄さん——。

車の止まる音がしていた。

つて。

亀夫 変なことばかり覚えてやがる——。

連子 今でも言ってるわよ、それ。

亀夫 はいはい。

文夫 彩ちゃん、就職決まつたつて？

連子 ようやく、先月。なかなか口がなかつたんだけど、あたしの研
究室の先生が、商事会社の事務見つけてくれて、それも一部上場の。

文夫 そうか、就職難だつてのにな。

亀夫 彩ちゃんは、お母さんっ子だからね。

文夫 彩ちゃんなら、いい子だから——。

連子 真っ直ぐ育ててくれて——。

亀夫 そろそろ、浩一のことば自慢しないのか。

連子 浩一はあなたでしょう。あなたが手塩にかけた。

亀夫 手塩に？ そうでしたか——。

連子 あの子はもともと文科系だったんです。それをあなたが、あれ
からでしょう、あの子が——。

亀夫 ほう、そつたつたのか——。お母さんの言うとおりにすれば、
家で暴れたりしなかつたわけだ。

文夫 兄さん。

亀夫 自分よりいい暮らししてほしいと思ふのが親だろう？ 自分の
経験を正しく伝えてやるのが親の務めじゃないのか？

連子 あなたのは押しつけじゃない。それも、子どもがそれ出来なく
なると、今度はバカにして。

亀夫 バカになんかしらない。

連子 したじゃない。どうしてお前はこんなことわからないんだ、お
父さんが勉強してた頃は——。

亀夫 だつたら、お前はそのとき何してた。何か言つてやつたか、あ
いつに。

(5)

翡翠と佐々木が庭から来る。

翡翠 ゴメン、昨日は、七回忌、無事に終わった？ どうした？

連子 翡翠さん、しばらく。

翡翠 ええ、連子さん。兄さん、どうかしたの、ペロペロじゃない。

亀夫 翡翠か——。どうした、くだらないテレビ番組作りの方が楽し
いか。すつぽかして何やつてた？

翡翠 やめてよ、絡むの。仕方なかつたのよ、ねえ(佐々木に)。あ、
初めてだったよね。こちら同じ局の佐々木さん。ディレクター。今
度の仕事で一緒なの。昨日も下北まで。

佐々木 初めまして、佐々木です。翡翠さんのお父さんの七回忌は気
になつてたんですが。

文夫 放送の仕事で待たなしたろうから。

亀夫 ご同慶の至りです——。

翡翠 お母さんは？

文夫 いる。(呼ぶ)お母さん、糸子姉さん、ちょっと。

翡翠 いい。あたし行く。佐々木さん、ちょっと待つて。その方ね、
兄の奥さんで考古学の専門家の。遺跡のことでも訊いてみたら？

(奥へ)

亀夫 (佐々木に)飲みますか？

佐々木 車ですから。

亀夫 まあ、一杯——。

文夫 こつちへ座りますか？

佐々木 すいません。

連子 遺跡の特集とかはなさつたんですか？

佐々木 二度ばかり。僕も何回か行きましたよ。すごいです。

連子 何が、一番？

佐々木 そうですねえ。やつぱり、気の遠くなるほど長い年月続いたってことですねえ、あの遺跡が。弥生時代が六百年でしょう。それから、平安時代四百年、江戸が二百六十、鎌倉百四十、奈良時代に至ってはたつたの八十年ですよ。それが縄文だけで一万年そのうちの千五百年間ですから、あそこは、おまけに、泥炭地だったお陰で食物や繊維までそのまま残ってるんですから。まるで冷蔵庫の中にしまつてある冷凍食品みたいなものです。

連子 北の谷になった部分に、前期中期遺物廃棄ブロックつていうのがありますよ。

佐々木 ええ、いわゆるごみ捨て場です。

連子 あそこから、人間の骨や歯が出てきたそうですけど。

翡翠がリンゴジュースなど運んでくる。

翡翠 文夫兄さん。お母さん、ちよつと手伝つて。

文夫 ああ。(奥へ)

翡翠 いやんなつちゃう。お母さん、また見合いの話持ち出し。

亀夫 ほう、二回も離婚してるのにな。

翡翠 いいじゃない、勝手よ。

亀夫 ああ、勝手だ。

翡翠 ねえ、なに話してたの？

佐々木 だから、遺跡のこと。

翡翠 連子さん、見たんでしよう？

連子 ええ、糸子さんと理恵ちゃんと、さつき。

翡翠 あたしはごみ捨て場が一番興味あるな。

連子 それ、話してたの、今、佐々木さんと。

翡翠 人間の歯と骨でしょう？

連子 やめてよ——。

亀夫 ほう。リアリストも討論を回避することがあるんだ。

一同は場を察して鼻白む。

文夫が戻る。

文夫 翡翠、電話らしいぞ。

翡翠 あら。

佐々木 じゃ、僕はこれで。

翡翠 あ、ちよつと待つて。車の中に忘れ物。

佐々木 じゃ、持つてくるから。

翡翠 いいの、待つて。

理恵子が顔を出して、また奥へ。

理恵子 翡翠叔母さん、盛岡のホテルからだつて、忘れ物したでしょ。

う、昨日。

亀夫 何だ、お前。下北じゃなかったのか、昨日は。

翡翠 間違いないの。(奥へ)

亀夫 (どこか落ちつかない様子の佐々木に) 佐々木さん。如何でしたか、下北の取材は？ 恐山とか下風呂とか、いっぱい行かれたん

でしょう。ついでに、イーハトーヴとか——。あ、あれは岩手だったか。

佐々木 ええ、まあ——。

亀夫 そうですか——。イーハトーヴにも行きましたか。あれは、

(歌) あかいめだまのサソリ—— だつたかな——。

奇妙な間——。

連子 そう。お墓はちゃんと他にあるでしょう？ 大人と子どもに分

けて。どうしてそんな汚いごみ捨て場なんか。

翡翠 あたしも不思議なのよ。ごみ捨て場つていうけど、あそこは糞

便、つまりトイレの排泄物の流される所でもあったわけでしょう。

そんな所に捨てただなんて——。

佐々木 いろんな説が可能らしいですよ。部落の裏切り者が殺された

とか、敵前逃亡とか——。

翡翠 趣味悪い——。

佐々木 あ、それから、第二子、つまり、最初の子どもを焼いて捨て

るつてもありますね。

連子 生や死というものが、もつと鮮烈な意味を持っていたんですよ

ね、現代(いま)よりも。喜怒哀楽の感情や、生き続けるつていう

意味が、現代ほど、擦り切れたようになってる時代はいんじやな

いかしら。

翡翠 そう？ あたしはそう思わないけど。思うままに生きられるん

だから、現代の方が。

連子 じゃないと思わ。

亀夫 あのな、世界的に見ても、古くなればなるほど、戦争の回数

多かつたんだ。戦いで殺される人間の比率は、昔になればなるほど

高い。のどかな縄文時代とか何々時代とかはつかり言つてられ

ないわけだ。隣村同士殺し合つて、腹が空けば捕虜や奴隷殺して喰

つた。そのごみ捨て場の骨も、そうやって喰われてトブにぶん投

げられた連中のだよ。

連子 そうかしら。そんな殺伐とした時代だったら、あんなに長く同

じ社会が続かないんじゃない？

亀夫 確かに、我が家は殺伐としている。明日だつてどうなるかわか

らん。

翡翠が戻る。

翡翠 車の忘れ物、持つて来るワ。

翡翠は慌てて行くとするが、佐々木が動かない。

翡翠 ねえ、車！

佐々木 あ、ああ。

二人は行く。

亀夫 さて、どういふことかな。理恵ちゃんに訊いてみよう。(立ち

上がる)

文夫 やめとけよ。

亀夫 いいだらう。雨ニモマケズ 風ニモマケズ 雪ニモ夏ノ暑サニ

モマケヌ 丈夫ナカラダヲモチ 欲ハナク 決シテ 暎(イカ)ラ

ズ—— そういう家族が私は欲しい、と。(奥へ行く)

入れ代わりに、翡翠が戻る。翡翠は一瞬、躊躇するが、

翡翠 あら、良さん、今日も働いてるの？ そらだ、良さんと、ハネ

に行こうかな今晚、ねえ。(木戸の中へ) ねえ、良さん——。

連子 良さん、ずいぶん前からここにいらつしやいますよね。

文夫 翡翠が高校生の頃から。

連子 しっかりと方みたいね。

文夫 翡翠は本当の兄貴みたいだね、何をすることも良さん良さん、つて。

翡翠が良を連れてくる。

途中から、糸子が縁側に来ているが、出られない。

良 ねえ良さん。行こうよ。

良 いいです。

良 だつて、いないんでしょ、彼女？

良 ——。

良 だつたら、いいじゃない。

良 賑やかなの、好きじゃないですから。

良 悪かつたわね、賑やかな人間で。

良 翡翠さんのことじゃないです。

良 とにかく行こう。ね。じゃ、あたしがハネルから、良さん、見

て。

良 社長が入院していますから。

良 静夫さん？ いいのよ。

良 いえ、とにかく。

良 いい、もう！

良 じゃ、もう少しやってみますから。(行きかける)

良 誰と？ じゃ、誰とだつたら行くわけ？

良 誰とも行きません。

良 糸子姉さんに言われたら行くくせに。

良 しつこいぞ、翡翠。

達子が糸子に気づき、

糸子 翡翠、良さん困らせないで。

糸子 仕事じゃないのよ、指図しないで。

糸子 良さん、構わないでいいのよ。

糸子 今日休みでしょう？ どうして良さんばかり働かせるの。

良 俺が勝手にやってるんです。

良 ちよつと、お前(翡翠)、あっちに行ってる。(押しやる)

良 何するのよ。

良 良さん、本当にもういいのよ。

良 明後日の大野建設の仕事、ちよつと大変ですから。社長が来ても

心配しないように。

良 社長社長って、良さんがとくに社長みたいなもんじゃない。

良 従業員や仕事の割り振りから業者の付き合いまで、みんな良さんが

やってるんでしょ？ 大体、姉さんも姉さんよ。いつまでくすぐ

ず、

良 (翡翠に)俺、社長に失礼なこと言つて、

翡翠 そんなこと話してないでしょう、今！

糸子 翡翠！

達子 翡翠さん。

良 何よ、みんなで寄ってたかかって——。(白樺の木の下に行つて

しまう)

文夫 良さん、気、悪くしないで。

良 いえ。(作業場へ)

間

達子 糸子さん——。

糸子 すいません——。

達子 うらん。ね、ちよつと疲れた、休んでいいかしら。じゃ、翡翠

さん、また。

翡翠は振り向きもしない。

達子は糸子と奥へ

翡翠 あたし、達子さんで、好きになれない。

文夫 自分と似てるからだろ。

翡翠 あたしどう？ 冗談でしょう。

間

文夫 この店、お前が良さんと縁げばよかつたかな。

翡翠 何言ってるの。

文夫 佐々木さんがいるか——。

翡翠 そんなんじゃないのよ、あの人は。

文夫 昨日、どうして、来なかつた。

翡翠 来たくなかつたのよ。

文夫 ——。

翡翠 文夫兄さんはなぜ来たの？ 何かあつたんでしょ。

文夫 さあな——。

翡翠 目を見ればわかる。(顔向けてじつと見る)

文夫 よせよ。

翡翠 いいから、ちゃんと見せて。

文夫は翡翠のなすがままになっている。

一瞬、静止した不思議な時が流れる。

文夫がいたたまれず離れる。

文夫 お前、今やったみたいに見つめあつたらどうだ、糸子姉さんと、

翡翠 何よ、それ？

文夫 お前、糸子姉さんを、姉さんじゃなくて、違う見方して来たん

じゃないか？

翡翠 どういう風によ。

文夫 年も八つも違ふし！

翡翠 いくら離れてたつて血がつながってるんだから、姉は、姉よ。

文夫 土器のかけら、お前だけは口に入れなかつたな。

翡翠 ——。

文夫 糸子姉さんと俺と三人で、あそこの畠に遊びに行ったことがあ

つたら、かけら、口の中に入れてみるつて、姉さん、いくら言つて

も、お前、絶対——。

翡翠 イヤダつて言うのに、無理やり、口の中に！。

間

翡翠 あたしね、高校卒業するとき、良さんに結婚してつて言つたの。

文夫 だ？

翡翠 ふられちゃつた。

文夫 ばか。

翡翠 姉さんは、静夫さんが好きで一緒になつた手前、あの人が嘘を

つてたつてこと認めたくないのよ。父さんがいくら別れるように

つて言つてもそうしなかつたのは自分の間違い、認めたくなかつた

から。

文夫 勝手な想像だ。

翡翠 見たことあるのよ、ラブレター、糸子姉さんの。

文夫 盗み見か！

翡翠 違ふわよ。中学生の私にわざと見せてたわ。あの人は山登りが

好きで、姉さんと八甲田山に登つた写真も飾つてた。そのうち、そ

の写真の男が、店に入りしはじめて、婿になるために、自分は工

業高校出てます、なんて、嘘もつかなきやなかつたわけよね、父さ

んに気に入ってもらうためには。

文夫 ー。
翡翠 ひよっとして、その嘘も、姉さんの入れ知恵かもしれないわよ。
文夫 まさか。

翡翠 ま、それは想像だけど。でも、あの二人が、本当に好き合つていたことだけは事実よ。だから、姉さんも後に退けない、と、まあ、こういうわけかな。

文夫 お前も、立派過ぎる姉だ。
翡翠 そうよ、だからあたしはあの人にも、姉さんにも言う権利があるのよ。少なくとも、当時の家庭の一員だったわけだから。
文夫 何て言う権利だ。

翡翠 良さんを、自分の不幸の穴埋めにするな。良さんをいつまでも手元に置くな。便利に使うな。

文夫 失礼だろ、良さんに。

翡翠 そうよ、失礼よ、姉さんは。それもこれも、みんなあの人嘘と病気のせい。だから、いっそ、あの人、あそこ(遺跡)のごみ捨て場の骨みために、今からみんなで担いでいって、捨てちゃえばいいっていうのよ！

文夫 理恵ちゃんや賢ちゃんの前でそんなことを言ったら、ただじゃおかないからな！

翡翠 極楽トンボー。

文夫 何だよー。

翡翠 いいこと教えてあげようか。

文夫 手紙、盗み見した話ならもういい。

翡翠 勝手に家出て、父さんが死んだ時しか帰って来なかった人は、知らない話。

文夫 何だよー。

翡翠 殺そうとしたのよー。

文夫 誰が。

翡翠 あの人よー。あの人ね、夜中にガス栓ひねって、この家の者、道連れにしようとしたの。

文夫 おいー。

翡翠 あたしが結婚する、一回目だけど、その年に、ちよとあたしが泊まりに来てたのよ。その夜よ、ぐうぜん、あたしと姉さんがガスの臭いに気付いてー。秘密よ。あたしと姉さんだけのー。

文夫 じゃ、今まで。
翡翠 そう、都合三回ってことになるわね。あの人狂乱は、六年か七年に一回ずつ。だから、今年あたりは、やっぱり危ない年だったわけ。

糸子が縁側から翡翠を呼ぶ

糸子 翡翠、ちよとー。

翡翠 何？

糸子 いいから、来て。

翡翠 聞こえてるわよ。そこで言っつてよ、何でも。

糸子 翡翠ー。

翡翠 何？

糸子は何も言わずに去る。

文夫 おい。

翡翠 妬いてるのよ。さっきの良さんとのこと。

文夫 ー。

翡翠 男と女のこと、わかってんの、ホントに。

文夫 お前に言われたくない。

翡翠 そつー。

賢太郎と恋人の梅田が下手庭奥から顔を見せる。

賢太郎 こんにちは。

翡翠 あら、賢ちゃん。しばらく、元氣？

賢太郎 はい。

文夫 ネプタ行くんじゃないのかい。

賢太郎 うん、これから。

翡翠 彼女？

賢太郎 梅田澄枝さん。

梅田 こんにちは。

賢太郎 大学のサークルの。京都から来てる。今晚はハネト初体験。

文夫 そう、京都。帰らなくていいの、お盆？

梅田 こつちでバイトしてます。

翡翠 (梅田に) 縄文遺跡は？

梅田 まだです。

翡翠 そつだ。あのね、京都の大文字送りってあるでしょう？

梅田 はい。(奥で電話のベルが聞こえる)

翡翠 ある学者がね、こんなこと言っつた。京都の大文字送りは、つまり、静かな弥生の文化で、青森のネプタは熱狂する縄文文化だつて。

梅田 ネプタ見てるとそういう気がします。

文夫 確かに、縄文人だ。無謀だが情熱だけはある。

翡翠 誰のこと。

亀夫が顔色変えて、戻る。

文夫 兄さん、どうした。

亀夫 ー。

翡翠 どうしたの、兄さん？

亀夫 あいつー 病院で、これ(絵死)、やっちゃったー。

溶暗

(6)

その日の夜。

風鈴。カエル。虫の音。

白樺の上に星。

テラスに賢太郎と梅田の二人。

賢太郎は梅田から離れた所で、線香花火が燃え尽きるのを見つめている。

梅田 ねえ、お父さんの所に行かなくていいの。みんな行つたよ。

賢太郎 死ぬばよかつたんだー。

梅田 小川君ー。

賢太郎 昔から、ずつと隠してた。友達に誰にも会わせないようにしてきた。誰もこの家と呼んだことない。

梅田 でも、あたしは呼んでくれたでしょう。

賢太郎 スミちゃんは、わかってくれたー。

梅田 誰でもわかってくれるよ。

賢太郎 わかるもんか。隠してたけど、ずいぶんいじめられた。小学校、中学校、ずつとだ。みんなー。

梅田 そんなふうに考えちゃだめ、妹の理恵子さんだつて、お父さんのことわかるうって心理学勉強して。

賢太郎 俺は駄目なんだ。

梅田 理解しようと思つて言つたじゃない。あたしは、小川君のそういうところが、

賢太郎 理屈じゃわかつてる。けど、そうならないことだつてあるだろう。

梅田 もつと時間、かかるのよ、きっと。

賢太郎 俺、自信ない——。

梅田 あたしも力になりたい——。

賢太郎 スミちゃん、本当に気にしてないにか、俺と付き合つて。

梅田 どうして？

賢太郎 だつて？

梅田 俺は父さんの——。

梅田 それはもう何回も話し合つたでしょう？ ね、やつぱり行こう、お父さんの所。

賢太郎 いや——。

梅田 小川君——。

翡翠が一人戻る。

梅田 どうも——。

翡翠 あんたたち、まだいたの。ネプタは？

梅田 だつて、お父さんの——。

翡翠 もういいのよ、生きてんだから。でも、よく助かつたワ——。

ま、良かつたのか悪かつたのか、よくわからないけど、あ、ゴメン、賢ちゃん。

梅田 あの——差し出がましいようですけど、

翡翠 いいのよ。どうぞ——。

梅田 賢太郎さん、そういうことから、今一生懸命逃げ出して、お父

さんのこと、もう一度考え直そうつて、ですから、

翡翠 それはどうも——。そうなの、賢ちゃん？

賢太郎 ——。

梅田 あなたもおわかりなんでしょう？

翡翠 わかつてるわよ、それがどうしたの。

梅田 だつたら、

翡翠 あのね、こういうことはね、自分の身に降りかかつてこないと

わからないの。

梅田 あたし、自分の身で考えてます。

翡翠 あ、そう——。じゃ、いいじゃない。

賢太郎 ネプタに行こう。

梅田 小川君——。

賢太郎 まだ間に合う。さ。

賢太郎が無理やり梅田の手を引いて行く。

若い二人の後ろ姿を見ている翡翠。

車の音。

取り残される翡翠。

庭のテーブルに腰掛け、煙草に火をつける。

木の下に行き、土器のかげらを取り——口の中に——。

すぐに、激しく吐き出す。

蛇口から水を吸い、すすぐ。

間

翡翠は何かを感じた。

木戸の方に向かう翡翠。

翡翠 誰か、いるの？ 良さん？ 良さんなのね？

木戸を開けて中に入る翡翠。

すぐに翡翠は良の手を引いて走り出てくる。

翡翠 良さん！

翡翠が良に抱きつく。

良は身体が応じていない。

良 やめてください。

翡翠 ——。

良 離れて——。

翡翠が離れる。

翡翠 良さん——糸子姉さん——抱いたこと——あるでしょ？

良 ——。

翡翠 わかるわよ、あたし。あの、ガス自殺事件の前——。そうでしょ？

良 ——。

翡翠 ね、あの人をこの家から追い出して、糸子姉さんと一緒になら

ないんなら、あたしを抱いて！ 抱いて、良さん！ 一度でいいか

ら、ね、お願い——。

翡翠 お願いよ——。良さん——。

良は、翡翠の腕を降りほども、静かに木戸口から中へ——。

蛙の鳴き声、虫の音が異様に高まり、間——。

走り去る、翡翠——。

入れ替わりに文夫。

文夫 何だ、あいつ。

座敷から、達子、亀夫。

亀夫は降りてテラスに。

亀夫 ああ——。すっかり酔いが覚めた。

達子 静夫さんに悪いわよ、そんな言い方。

亀夫 どちらが。この家の者のほうが被害者だろう。二十年以上も、

分裂病だ癡病だ、自殺だつて。

達子 あなた。

亀夫 自殺未遂までしてるのに、隠してる場合か。みんなわかつてるんだ。

達子 だからつて。

亀夫 みんなぶちまけて言い合えばいいんだ、もう。

文夫 ぶちまけた後で、何をしてやるつもりなんだ、兄さん。静夫さ

んや賢ちゃんや理恵ちゃんに。それから糸子姉さんに？

亀夫 ——。

文夫 何やかや言つたつて、お父さんと同じことじゃないか。

亀夫 ——。

文夫 別れさせることしか考えていないんだらう？
亀夫 ——。

文夫 図星だろ。兄さんは、父さんの自慢の息子だった。どうしてだ
わかるか、兄さん。父さんの言うことなら何でも聞いたからだよ。
兄さんが考えていることは、今でも父さんと同じなんだよ。達子さん
言わせてもらうけど、兄さんが浩一君に、「自分はこうだったから、
お前もこうしろ」と言ったのは、親父に教えられた通りのことを
自分の息子にしたのさ。見事に失敗した。さまあみる。

亀夫 そうか、そういうことだったのか——。それほどお前、俺を妬
んでいたのか。

文夫 ああ、妬んでいたさ。俺はだから、何とかして、兄さんの鼻を
明かしてやりたかった。なるだけ兄さんの出来ないことをやるうと
した。俺はそれだけを考えてきたんだ。

亀夫 で、出来たか？

文夫 ああ、出来たさ。十分に。

亀夫 じゃ、言うことなしだろ。

文夫 絹江に言われたよ。なんでそんなに、家、何日も寄りつかずに
気遣いみたいになって芝居やつてのかわつて、おかしんじゃないか
つてさ。そつだ、おかし。ずつと考えてみた。この家で生まれて、
兄貴や糸子姉さんと育つて、親父と毎日のように言い争つて、家を
出て、絹江と暮らして、そして——。この歳になって、ようやく気
付いた——。自分の前走つてるやつ、追いかけてると思つたら、そ
いつは違うコース走つてるやつだった。俺はいつまで経つても、自
分のゴールが見えてこない——。

亀夫 ばか。そりや、思い込みしたお前が悪いんだ。目の前のやつ
の背中のゼッケンばかり見てたんだよ、お前は。

文夫 ああ、そつだ。でも、自分のゼッケンも分からずに走つてるや
つもあるよ。

文夫 ぬい。お医師さん何も何ともないって。
文夫 なら、いいけど。
達子 糸子さん、何なら、あたし、もう一日残つてもいいですけど。
糸子 大丈夫。あの人ももう命には別状ないっていうし、完全看護だ
そつですから。あたしも取り敢えず必要なもの持って行って、今晚
中には帰ります。

達子 そう。何か手伝うことあれば言つて——。
サキが起きてくる。理恵子がついてくる。

理恵子 おばあちゃん——。
糸子 母さん、寝てなくっちゃ。
サキ 亀夫、ちよつと話しがあるんだよ。それから、達子さんも。
文夫 母さん。
サキ 三人だけにしておくれ。
糸子 いいけど、ちよつとだけよ。
サキ わかつてるよ。時間がないだろ。早く、あつちへお行きよ。

糸子、文夫、理恵子は奥へ。

サキ 言おう言おうと思つてただけだね、なかなか時間がなくてね。
達子 お母さん、何でしょう？
サキ お前たちが来る四五日前にね——。コーチャンが来たんだよ。
亀夫 ここにか？
サキ ああ、バイクで一人だね。北海道一周して、その帰りに寄つて
いったんだよ。真つ黒に日焼けして。

達子 浩一が——。
サキ ちよつと家にはあたししかいなくてさ、コーチャンもあたしだ

亀夫 俺のことか——。
文夫 自分で考えてみるよ。

達子 この人には考えられないでしょう。だから息子が何考えてるの
かもわからないのよ。少なくとも、この人のお父さんはこの人のこ
と、わかつてたのに。

亀夫 じゃ、お前はわかつてるのか？ 浩一が今何を考えてるのか！
達子 あなたが勝手に育つてようとしたんだから、あなたがわからなく
つちやいけないのよ！

亀夫 俺は親父のこと考えた。だが、浩一は、俺の息子の浩一は、俺
のことなんか何にも考えていないじゃないか！

達子 あたしのことだつて、考えていないわよ！ 誰かさんのお節介
のお陰で！

亀夫 バカヤロ！（殴ろうとするが文夫が止める）

達子 殴りなさいよ、いくらでも。子どもに裏切られたバカな父親が、
自分で産んだ子どもに捨てられた惨めな母親を、どんな気持ちにな
つたら殴れるのか、やつてみなきゃわかんないでしょ！

間

糸子の声がある。

糸子 何してるの——。兄さん。いつまでのんびりしてるの。混むん
だから、ネプタの時は。

亀夫 ——。

糸子 どうしたの？

達子 いえ、いいんです——。

文夫 母さん、大丈夫かな？

糸子 今、一階に床敷いて、理恵子が見てくれるから。疲れただけ

けの方が都合がいいってね。一時間くらいいたかね。ずいぶんいろ
んなことを話してつた。あの子はもともと優しくいい子なんだよ。
おばあちゃんはお茶が好きだからつて、わざわざ高いお茶買つて来
てくれて。でね、もう行かなくちゃつてときにね。——おばあちゃん
んから、お父さんとお母さんに話してくれてね。いいかいコーチ
ヤンは、大学、休学して北海道の牧場で働いてみるつて。自分で選
んで、自分で決めたそつだよ。それから、絶対に、別れちゃ、駄目
だつてよ、お父さん、お母さん——。さ、伝えたよ。あんたたちの
息子が、今考えてること。じゃ、あたしは向こうへ行くよ。疲れた
よ。明日から、また糸子と頑張らなきゃ——。（奥へ）

長い間

亀夫と達子——。

文夫が来る。

文夫 兄さん——。遅くなるぞ、支度しなきゃ。

動こうとしない亀夫と達子。

文夫 どうしたんだよ、

間

亀夫がようやく口を開く。

亀夫 文夫——。

文夫 ん？

亀夫 ネプター—まだ、見られるか—。
文夫 なに言ってるんだ。もう終わりだろ。
亀夫 そうか—。

間

連子 来年—あるわ。また—。
亀夫 ああ—。
文夫 —?—

三人は奥へ。

明かりは木戸だけに絞られて行き、やがて、溶暗

(7)

数時間後—。

家の明かりはすっかり消えている。
車が止まる。

糸子が病院から、一人戻ってくる。
テラスの入り口に座る糸子。

間

丘から、暗い丘を臨む糸子。

木戸が開き、良が静かに入ってくる。

気づかない糸子。

急な物音にハッとする糸子。

糸子 良さん—。帰らなかったの?

良 社長のこと心配で。

糸子 うん。

良 大丈夫なんですか?

糸子 良さんにも、病院来てもらおうと思っただけど—。

良 俺は、病院なんか—。

糸子 どうして。

間

良 (土下座する) すいません!

糸子 良さん—。

良 俺が、社長にあんなこと、

糸子 もういいから、さあ、さあ、立って。

良 分かりきってること、今更みに—。

糸子 当然よ、周りの人が怪我するんだもの。

良 自分で、そんな仕事頼んでおいて。

糸子 必要なんだから。

良 雇い人の梯子、押さえる仕事なんか、

糸子 仕方ないのよ。

良 俺が悪かったんです。

糸子 立ってちょうだい、良さん

良 すいません

糸子は卑屈な良の態度に、

糸子 やめていたら、やめて!

良は反射的に立ち上がる。

糸子 どうして、そんなことするの。良さん悪いなんて誰も言っていないでしょう。あたしが言った? 理恵子? 賢太郎? 誰が言ったの? どうして—。

良 —。

糸子 良さんがいなければ、やってこれなかった。そうでしょう?

良 —。

糸子 家族みんな、あなたに頼って来たでしょう?

良 (否定)

糸子 どうして?

良 この店に勤めさせてもらってからのこと、考えました。

糸子 —?—

良 俺が初めて店に雇ってもらったとき、理恵子ちゃんが生まれると

きでした。

糸子 —。

良 それから、理恵ちゃんが小学校に入ったとき、俺がPTAに出さ

れて。

糸子 —。

良 それから、あの時—。

糸子 あの時—?

良 社長が、ガス自殺しよう—。

糸子 —。

良 社長は、知ってたんです、俺たちが—。

糸子 そんな。あの人は—。

良 俺がいなければよかつたんだ—。俺が社長を—。

糸子 —違う—違うわよ—違う—。

良 社長は俺が憎くて—。

糸子 そんなこと—。

良 俺は、糸子さんを助けたくて—。

糸子 助けてくれたの。それだけよ。良さんは何もしてないのよ。

良 俺なんです、悪いのは。

糸子 悪くないわよ。

良 あのと—あのと—あのと—、やっぱり辞めなきゃいけなかつたんです!

糸子 あのと—あのと—ただ、寂しくて—。

良 俺が、誘ったんです—。

糸子 違う—。みんなを—あたしを助けてくれたの、良さんは、

そうなの。これからも、良さんは、あたしを助けてくれるの。ね、

良さん。

良にとりすがる糸子。

離れる良。

糸子 良さん—。

間

良 これまで、本当の俺も、本当の糸子さんも、ここにいなかった—。こんなの、何十年、何百年続いたって、生きてたことになら

ないじゃないですか—。

糸子 お願い—。

間

良 俺がいなくても、取り敢えず、明後日の仕事には、かかれませう。

山内と、武田に、段取り、伝えて、おきましたから――。

糸子 良さん――。

良 永い間――。

糸子 だって、

良 もう――二度と――。

糸子 ああ――。

良は木戸口から入って行く。

店の表で車が発進する。

糸子――。

糸子 良さん――良さん――良さん――待つて！

激しい痙攣に襲われる。

しばらくの間、糸子は立ち上がれない。

(8)

庭から文夫が。

文夫 姉さん！ どうした！

テラスに連れて行く文夫。

文夫 救急車、呼ぼうか？

糸子 呼ばないで――。

文夫 大丈夫、こんなに震えて。

糸子 いいの。

文夫 本当に、大丈夫なのか――。

糸子 しばらくこのままにして。

文夫 そうか――。姉さんまで倒れたら大変だろう。

文夫は木戸口が開いているのに気づき、

文夫 良さん、いつ帰った？ 遅くまでやってたようだったな。まず

まず、良さんが頼りだな、この店は。

糸子――。

文夫 俺――。もう一日、いようかなって。

間

文夫 俺、芝居――辞めたんだよ――。

糸子――。

文夫 母さんにだけは言おう言おうと思ってたんだけど、なかなか言えなくて。これ以上、心配かけたら、母さんの方が病院行きだからな。

文夫は手紙を渡す。

文夫 絹江とはもう一緒に住んでない――。

文夫はウイスキーのポケット瓶を取り出し、口にする。

縁側に明かりがつく。

理恵子である。

理恵子 声がすると思ったら――。

理恵子 今度は、文夫叔父さん、酔っぱらい？ 乗り遅れたでしょう？

文夫 ああ。間抜けだ――。

賢太郎が来る。

手にハネトの鈴のついたタスキを持つてる。

賢太郎 たいだいま。

文夫 よお、賢ちゃん、お帰り。

賢太郎 あれ、夜行じゃなかったの？

理恵子 乗り遅れたんだって。

賢太郎 亀夫叔父さんじゃあるまいし――。

文夫 一応、兄弟だからな。

文夫が賢太郎に歩み寄り、タスキを取り、かける。

少し、踊ってみせる。

賢太郎 似合わない、全然

理恵子 ヤダ――。

文夫は何も言わずに、静かにハネ始める。

文夫の踊りは次第に熱を帯びて行く。何も声を発せず、汗を流し

ハネる文夫の狂気。驚いて見ている三人。

そのうち、賢太郎がたまらず文夫を止めようとするが、振り切つ

て踊りつづける文夫――。

やがて、白樺の木の下に倒れ込む文夫――。理恵子、文夫の傍らに座り込む。

賢太郎 叔父さん。

理恵子 文夫叔父さん。忘れないでいいよね。東京で見た夢――

父さんと賢太郎兄さんとここに、こうして座って、あそこの丘見つ

めて。(間) あたし、みんなのこと思ってる。死んだ人、生き

ている人、明日生きていく人――父さん！――(間) きつと、つ

くれると思うの、生きて行けば。もっともっと高い、あたしたちの

千年の丘。ね。そうでしょう。

文夫、起き上がり、糸子の傍らに。

糸子 文夫。お前と二人で、あそこの草ぼうぼうの塚に入った。矢じ

りや、土器のかけら見てたら、何か胸に迫ってきたよね。それ――

何だったか――ようやく判ったよ。

文夫がうなづく。

糸子 さあ、休んで。

文夫 ああ。

理恵子 あ、あたし、荷物――。叔父さん、休もう。

文夫と理恵子は奥へ。

賢太郎 どうしたの、叔父さん。

糸子――。

賢太郎 何かあったのかなあ。

糸子

賢太郎 母さん。

糸子

賢太郎 彼女――。

糸子

賢太郎 父さんのところに明日、どうしても、行けて――。良さんに訊いてみるかな――。

間

糸子が立ち上がり、行くこととする。

賢太郎 母さん。どうしたらいいかな。

糸子が振り向く。

糸子

賢太郎 母さん――。

間

糸子 決めなくや――ひとりで。

恵理子が来て、

理恵子 何してるのよ。早く。

糸子と賢太郎が座敷に上がるうとする。

糸子

テラスの三人は、何かを感じている。

一同は、千年の丘の前に、立っている。

幕



熱門話題

中国話劇のホットな話題

今なぜ北京でイブセン?

劇団息吹 坂手日登美

一九九六年秋から一九九七年新春にかけて首都北京で上演された話劇は結構たくさんある。そして、それぞれ面白かった。

『演劇会議』九二号で劉平氏が紹介されている作品の他にも、北京人民共術劇院がアメリカからマルグリット、ヴェッカーを演出に招きアウグスト、ウエルソン作『離色(かきね)』を上演している。

中央戯劇学院のキャッツ上演クラスが、ミュージカル『想変成人的猫(キャッツ)』を上演した。まだ劇団にも、ミュージカルのグループとしても独立していない、いわば学生の公演だが、四十ステージも上演しており、彼等の力量も大したものだと思つた。

しかしその中で私が特に面白と思ったのは、中央実験話劇院の『人民公敵(人民の敵)』で、原作ヘンリック・イブセン、翻訳潘家洵・演出呉曉江(ウシヤオジャン)。

北京の中央実験話劇院小劇場において上演された。この作品は、北京での公演に先だち八月にノルウェーで行われたイブセン国際演劇祭に参加し、大きな評価を得た作品の北京公演であった。

中央実験話劇院は、今年、アメリカの凡亜州劇団(パンアジアドラマシアター)と、技術交流のための公演を予定されているとの事で、海外を視野に入れた活動が展開されつつある。

更に、上海の話劇界も北京とはまた異なる文化行政のもと、劇社と呼ばれる自由な組織形態による公演が活発なようだ。一月の新民晚报には、今年七月の香港返還をテーマにした『帰去来兮(いざかえりなん)』を上海人芸が上演するという記事が出ている。

こうして見ると、中国の話劇界は、中国経済の発展と共に、質的にも量的にも大きく発展するのではないかと期待される。

今回、ここに掲載されるインタビューは、先に紹介した『人民公敵』の演出、呉曉江氏に十二月に行われたものである。

実は、私は、会場でパンフレットを読むまで、イブセンの『人民の敵』であるとは知らずにいた。そして、その舞台のイブセンにしてイブセンに非ず、中国にして中国に非ず、といった様な不思議な、独特な演出と演技に興味をお

ぼえ、さっそく演出の呉曉江氏にインタビューを申し込んだ。

幸いな事に、氏の快諾を得ることが出来、実現したのが以下で紹介する記事である。これを読んで頂ければ、中国において、今なぜイブセンなのか、という事や、中国の話劇人（新劇人）の芝居に対する思いなどを、ある程度理解して頂けるのではないかと思います。誌面の許される限り、そして出来るかぎり、氏の言葉に忠実に書いたつもりである。又、このインタビューは中央実験話劇院の小劇場及び会議室で行われた。

坂手 今日、『演劇会議』の読者のために時間をさいて下さり、本当にありがとうございます。『人民公敵』を観て、とても面白いと思いました。それに、この小劇場は、ただ四角い空間があるだけで椅子も移動式で、まるで日本の小劇場のような感じですね。私は中央実験話劇院は北京で最も新しい演出を試みている劇団の一つではないかと思うのです。それで早速ですが、呉曉江さんは、なぜこの作品を上演しようとおもわれたのですか？

呉 一九九六年八月にノルウェーでイブセン国際演劇祭が開催されました。ノルウェー政府がこの演劇祭への参加をいろんな国に要請したのですが、その要請に答える形で『人民公敵』をもって、私達は参加したのです。

坂手 なるほど、それにはどんな国が参加したのですか？



《人民公敵》

して興味をもつだろうかということですが。

第二は、中国において、イブセンの社会劇は一九二〇年代にすでに『人形の家』以外全部上演されています。が、では現代我々の劇団が上演する意義がまだあるのだ

ようか？

呉 ソ連、イスラエル、フィンランド、スウェーデン、チエコスロバキア、ウクライナ、中国、ノルウェーが参加して、合計14作品が上演されました。その他数ヶ国は上演はしませんが、演出や俳優やその他色々な方面の専門家が参加していました。

坂手 そうですか。それで中央実験話劇院の『人民公敵』が、とても高い評価を受けられたそうですが、それはコンクールだったのですか？

呉 いいえ、コンクールではありません。主催者は、どの作品が良いとか、良くないとかの討論をしたものではありません。けれど、上演活動を通して、多くの人から、今回参加上演したもので、最も傑出している。面白いという評価を受けたのです。

坂手 では、この公演の評価された点や、又、呉さん自身の話劇に対する考え方や、作品の上演意図など、もう少し詳しく話していただけますか？

呉 御承知のように、イブセンの芝居は世界的によく知られ、多くの人が読んでいます。しかし、上演にあたり私はいくつか問題があると考えました。それをどのように演出するのかわからない色々と考えました。

その第一の問題は、九〇年代の中国人が、一〇〇年以上のノルウェーの小さな街に起こった物語に、はた

うかということでした。

第一の問題については、我々が演じることで、人々は百年前のイブセンの思想も、まだある意味で今日的意義があると思ってくれるはずだと考えました。第二の問題ですが、約一〇〇年前、ヨーロッパから中国に話劇が伝わり、中国の話劇も約一〇〇年の歴史があります。けれど東洋人は話劇の発展にあまり貢献していないと思うのです。そこで中国の話劇人として、この上演を通して少しばかりの貢献が出来る、つまり社会に新しい話劇を提供し、観客を楽しませる事が出来るのではないかと考えました。

坂手 それで、呉さんは、具体的にはどのようにされたのですか？ 例えばセリフの改稿などをされたのでしょうか、実は私の中国語の能力では、原作と上演稿のセリフが違っているかどうか聞き取る事は出来ませんでしたので。

呉 この脚本は一九四〇年代に潘家洵という人が翻訳したのですが、現代の中国人に理解しにくい難しい言葉が多いのです。又、ノルウェーの歴史を知らなければ、中国の観客の眼は、単に舞台上の食べ物や、飲んだり、ケンカをしたりという日常の事件に止まってしまいます。しかし私はパンフレットや何かで、当時の、ノルウェー社会の事をあれこれ説明しても意味がないと考えました。

そこで、色々方法を考えた結果全ての出来事を、まず中国の観客に容易に理解出来る事件に置きかえました。それから、イブセンの思想をその中にはめ込でいきました。坂手 なるほど、それで呉さんは、作品の舞台を中国に置きかえたのですか。それに、衣裳なども中国的な感じでしたね、では次にイブセン作品の中国化について少し話して頂けませんか。私はイブセンを中国化した事がとても面白いと思っただけです。

呉 私は脚本に手を入れるについては、基本的な原則をもっています。それは中国人にとって難解な言葉や、状況、内容等を省略する以外は出来るだけ言葉の趣むきを大切にすると共に、基本的な内容や思想は変えないということです。

そして、演出に際し私は俳優達に『貴方たちは、中国人に扮しているし、衣裳も中国の伝統的な衣服である長袍、馬褂（解放前、知識層の男性がよく着た中国服）や、人民解放軍の兵士の服や、ヨーロッパ風の背広等色々。しかし貴方たちは今、自分が中国人か外国人かという事は考えなくて良い、ただ言葉の意味をしっかり話せば良い、観客に意味がきちんと伝わればそれで良いのだ』といいました。俳優達はきくと、「セリフはどうも外国の作品の感じがするが、場所も事件も中国のものだ。しかも衣裳は、現代のものもあれば、清朝時代のものもある。

否応なくその潮流に乗ってしまっていると思うのです。知識人の社会的責任感、本当に以前に比べて、大きく劣っていると云えます。ただ自分のことだけを考えている。私は彼等を買っているではありません。ある意味では仕方のない面もあります。が、公正感（正義感）といったようなものは、昔に比べて非常に衰えてしまいました。

中国には、封建時代からずっと、「先天下之憂而憂」という伝統があります。知識人は、封建社会からこのかたずっと社会や朝廷に対して、意見や考え方を提出して来ました。そして、この知識人達の議論や考え方は、社会に大きな影響を与えて来ました。しかし私は現在、知識人が政府や社会に直接的に影響を与えるべきだと言っているではありません。知識人は本来的に、このような社会的責任を負っているのではないかと考えています。この劇の主人公ストックマン医師は、失敗した英雄です。しかし、知識人の責任と権利を追求します。この点に大きな今日的な意義があると思います。

坂手 私も、「知識人は社会的に責任を負っているのだ」という考え方に同感です。

私は、「人民の敵」を読み直してみました。知識人の問題と共に一般大衆の社会的責任の問題はどうなのかというとても大きな問題をイブセンは提起していると思う。

る。いったいこれは、どういう芝居なのだろうか」と不思議に思っただけでしょう。

坂手 それは、どのような意味があったのですか？

呉 実は、私はわざとこのように作ったのです。中国では解放前も、解放後も、イブセンのたくさんの社会問題劇、例えば、『人形の家』、『青年同盟』、『棟梁ソルネス』等が上演されました。御存知のように、私達中国にも、一〇〇年前のノルウェーと同じような社会的な悩みがありました。

一〇〇年後の今日、私達は、改革解放をして、経済的にも大きな変化が起こりました。社会はますます良い方向に向かっていきます。このような状況下ですがイブセン作品を中国で上演する意義はまだあるし世界的にみても単に現実的な意義だけでなく、もっと深く大きい意義があると考えます。

例えば、ある種の問題は社会の問題であると共に、それは往々にして個人の問題でもあります。そして、それは中国以外の国にも存在すると思います。環境汚染の問題などがその顕著な例です。中国では目下、多くの人がより快適な生活と、より多くのお金を稼ぐために、自分の本当にやりたい仕事を放棄したり、違法行為的な商売をしています。私はこの人達は社会的な責任感といったものがあるのだろうかと思うと共に、自分達知識人も又、

のですが、この点についてはどうでしょうか、呉さん少し話して下さいませんか？

呉 全くその通りです。ご存知のように私達中国は、多くの、複雑な特殊事情も含めて、解放後も大きな政治的な闘いを経験しました。又、解放前後、ほとんどの都市生活者の中年男女は、この政治闘争の経験があります。そして、この人達、個人個人が取った、政治闘争への参加方法や、考え方、態度などは、皆、同じではありませんでした。

御覧のように、この芝居の中で俳優が着ている衣裳は、時代や年代がバラバラです。ある者は清朝の長袍馬褂と呼ばれる物で当時の知識人が着ていたものですし、ある者は現在の解放軍の服装ですし、背広を着ている者もいます。このバラバラな衣裳はこの人達がストックマンに對して取った態度、かって私達がそれぞれの時代に、それぞれの異なる政治運動において取った態度や考え方に似ているのではないかと思います。

しかし、これは一種の連想であって、決して個々の知識人がこんな態度であった、あんな態度であったと言っている訳ではありません。つまり、私達がそれぞれの時代や政治的場面において異なる衣裳をまとったり、異なる態度を取って来た、又は行って来た事に非常によく似ているのではないかと思います。

坂手 そういう意味だったのです。十月に中央実験話劇院の小劇場で、この芝居を観た時に良く理解出来なかったのです。衣裳の時代が非常にバラバラで不思議だなあ、どういう意味だろうと思っていたのです。

呉 これには、もう一つ、別の意図もあります。この芝居は政治的な色彩が比較的強いものです。ですから観客は単純に、私達が、この芝居をもって現在の政府の批判をしていると誤解をする可能性があります。けど、私達は決して現在の政府や、全ての過去の社会を否定している訳ではありません。

ですから、異なる社会、時代の衣服を同じ舞台に出現させることによって、誤解を避けられると考えたのです。坂手 そして又、ノルウェーの観客に非常に高く評価された原因の一つでもあったのです。

呉 そうなのです。舞台で演じられているのは、まさしく中国の芝居なのだけれど、科白はイブセンのそれです。(註科白は舞台両脇に設置されたスクリーンに写し出される)しかし、それはイブセンの翻訳劇だとは感じられないという事で、この点が特別成功していると評価されました。

その他、「自扱家門」という中国の伝統的な型を取り入れたり、叫劇(四川省の伝統劇)の唱の方法を取り入れ、長い科白や、心理描写をわかりやすくしたり、情緒

人達で、熱心に舞台に見入っていたのが印象的でした。衣裳以外にも登、退場に車椅子を使用されるなど、いろいろ新しい試みをされていて、とても面白い舞台でした。今日は本当にありがとうございました。

呉 曉江演出へのインタビュの話題は、ここに掲載した以外、現在の全中国の演劇状況や、氏が後々演出したいと思っている作品のことなど、多岐にわたった。氏は私のつたない中国語の質問にも、明快に丁寧に答えて下さった。

又、このインタビュにさいし、北京在住の叢林春氏が仲介の労を取って下さり、又通訳として、この席に同席して下さった。年末の忙しい時間をさいて、「演劇会議」の読者のためにインタビュに応じて下さった呉曉江、叢林春の御二人に心からお礼を申し上げます。

中央実験話劇院の紹介

中央実験話劇院は一九五六年に設立され、四〇年の歴史をもつ。中国でも有数の話劇団である。所属する俳優は六〇人余、スタッフや、事務局関係者を合わせると一六〇人に及ぶ大劇団で、年間、五作ないしは六作の新作、一五〇余りのステージを上演する。

創立当時は、イタリヤ、ソ連等の翻訳物も多く上演しているが、文革終了後は四人組批判の作品等、創作が多く上



《人民公敵》

う。又ノルウェーの観客に、イブセンが中国ではこのような意義があったのかと改めて受け取ってもらえたことが成功の原因でしょう。坂手 そして、北京では客席を埋めたのはほとんどが若い

的な盛り上げを強化したりしました。もともと、中国の伝統劇では、科白で満足出来ないところは唱うし、感情が盛り上がって来れば踊ります。

演された。近年はドイツやイタリヤ、アメリカ、イギリス、ノルウェーなど外国の作品の上演も増加しているようだ。海外公演も多い。自まえの小劇場と附属施設を有している。

◆呉曉江氏のプロフィール

中学卒業後、中国東北黒龍江省の国营農場にて、農業に従事する。一九七九年、中央戯劇学院に入学し一九八四年に卒業。同時に中央実験話劇院に所属する。演出作品には、「二个死者対生者の訪門(ある死者の訪門)」、「周君恩来」、「瘋狂過年年(氣違いじみた年越し)」、「離婚了、就別来找我(離婚したのよ、もう来ないで)」、「故意傷害(故意による傷害)」、「人民公敵(人民の敵)」など。

◆坂手日登美さんのプロフィール

一九五七年創立の劇団息吹に五九年から参加し制作や演出にたずさわる。主な演出作品は東川宗彦作「大和川」、篠間ひろし原作、横山幸代脚本「かえるのつなひき」等。

一九九一年から中国北京語言学院(現北京語言文化大學)に留学し、九五年本科卒業。現在同大学高級進修生として在籍しながら話劇の勉強を始めており、今後北京での各劇団の稽古場訪問や演出家、俳優達へのインタビュを行い、現場の人達の創造への思いをシリーズで伝えていきます。(赤松)

報 訃



〈故 寺下 保〉

大阪の劇団未来の副代表で、演出家・舞台美術家であった寺下 保さん（タモさんと愛称されていた）が、去る一九九七年二月一五日（土）午前九時四十分急性虚血

性心不全で逝去されました。享年六四歳。寺下さんは、一九三二年十一月二六日に大阪の河内平野の真中で生まれ、大阪府立四条巖高校を出て大阪府庁に就職。

五三年に大阪府職演劇研究会（第一次）を創立。中谷稔さんと組んだ創作劇を創りだすとともに、宮本研さんが中心になっておられた、東京の妻の会と盛んに交流した。演出作品一八本。

第一次大阪府職演劇研究会後の六四年、劇団未来に入団。以来三三年間に演出した作品、三一本、舞台美術を担当した作品二一本。

大阪において四四年間休むことなく「働きながら芝居を創り続けてきた唯一の人」でした。

もう一つの顔がありました。

それは「働きながら芝居をつくる」ということでした。

一九五三年、第一次の大阪府職演劇研究会を創立。

宮本研さんが主宰しておられた「東京・妻の会」との交流。その中から奥さま繁子さんとのカップルが生まれ、結婚されたのでしたよね。

その後、第一次大阪府職演劇研究会を解散された時期に、「タモさん、一緒に芝居しようよ」と劇団未来への入団をお願いしたのが、三三年前の六四年暮れのことでした。

《弔詞》 ありがとう タモさん！

私たち友人は、六四歳という若すぎる突然の出来ごとに、「悔しい」——としか言いようがありません。

しかし、誰よりも思っているのは、タモさん、あなた自身かもしれません。

あなたには、職場での顔の他に、誰も真似ができない、

二六年前の「日本の公害一九七〇」が、大阪文化祭賞に。一四年前の「翔びたてば鳥」が、大阪文化祭奨励賞に燦然と輝いています。

最近レパートリーの幅もぐんと広げ、昨年の一二月、タモさんが演出した「ラヴ」——こころ甘さに飢えて——で若い娘を演じた森田祐利菜が、大阪新劇フェスティバル女優奨励賞をいただき、「さあ、これから！」という時ですよ、今は——。

ここ八年程、仕事の条件から演出できず、タモさんにはばかり演出させて負担をかけていた僕が、あと五〇日で劇団活動の第一線に復帰できそうだという時ですよ、今は——。

以前のように、タモさんが演出する時は、僕が舞台監督。僕が演出させていただく時は、タモさんに舞台監督をお願いするという関係を復活させようと、二人で手を取りあいながら話しあったのは、つい一ヶ月前のことではなかったのですか、タモさん——。

一昨日、仮通夜でお家へ寄せてもらってタモさんの部屋の机の上に置かれた細かい分析の朱が入った劇団未来の次の公演の戯曲を見つけた時の早鐘を打つ僕の心臓——。

「タモさんは、次回公演の準備を誠実にしていたんだ」という事実が接したとき、今回の出来ごとを一番「悔しい」と思っているのは、タモさん、あなた自身であると、僕は確信したのです。ありがとう、タモさん。

関西の誇る俳優。波田久夫さんの生涯に残る作品を近々やろうよと、宮本研さんの「夢・桃中軒牛右衛門の」について話しあいましたよね。

タモさんの特大ポスターを、僕は一生忘れないでしょう。

タモさん、できることなら目をさまして欲しい。あの澄んだ瞳で、僕らに語りかけて欲しい。

でもタモさんは、「働くものの演劇の担い手」として、大阪で唯一人、休むことなく四四年間走りつづけ、「働くものの芝居をつくる」ことにおいて、大きな成果をあげてくれました。ありがとう。

この四四年をかけて創りだしてきた、あなたの成果を更に大きくしていくのは、あとに残された僕たち・私たちの仕事です。

必ず引きついでいきます。

タモさん、いつまでもいつまでもお空の上から、宮本研さんと二人して、祭壇の写真のような暖かい瞳で、僕たち・私たちの歩みを見守っていてください。ありがとうタモさん、ありがとう！

一九九七年二月一七日

劇団未来代表 森本 景文

事務局だより

劇団たけぶえ(福井) 神戸ドラマ館ポレロ が加盟

全リ演にまた二つの集団が加盟することになりました。

東の方では、福井県武生市の劇団たけぶえ(柴野千栄雄代表)です。同劇団は、人口7万の地方都市で、「地域の歴史と風土に根ざした地域文化としての演劇の創造」を目指して一九七九年に創立、以来十八年間に三十数本の作品を上演、市の市民文化功労賞、県のすいせん賞などを受賞したほか国際演劇祭等でも最優秀舞台技術賞など受賞しています。日本アマチュア演劇連盟(NADA)に所属していましたが、昨年そこを退会し、今年三月、全リ演への加盟に踏み切りました。四年前の三重県大安町フェスティバルのとき「人を喰った話」を上演した劇団です。加盟に当たっての推薦劇団は、劇団すがお、劇団はぐるまです。

所在地 千九一五 福井県武生市四郎丸二二二

電話 〇七七八一三三〇一四七
FAX 〇七七八一三三〇四〇九五

西の方では、「神戸ドラマ館ポレロ」です。

二年前の一九九五年九月にできたばかりの劇団で、男三名、女五名、合計八名ですが、全リ演の仲間にとって顔なじみの人もいます。現在、神戸市内で活動しており、最近の作品は井上ひさしの「マンザナ、わが町」。代表者三村省氏。

推薦劇団は劇団四紀会と劇団どろです。

所在地 千六五〇 神戸市中央区山手通九一九一七

西藤ビル二F

電話 〇七八一三六一九八七〇

(三村代表の自宅の電話は 〇七九八一三三〇五四四二)

アポロストロフィは退会

なお、劇団アポロストロフィ(埼玉、平石耕一代表)は劇団活動もなく会費も滞納となっていることから退会扱いとしました。

二集団の加盟により、四年連続で加盟集団が増えたことになり、全リ演加盟集団は東三十七集団(休会中の集団は含まず)、西三十三集団(休会中の三集団を含む)、合計で七十集団となります。

会議では、全リ演を活性化させるために加盟集団を増やす運動を続けていこうと話合いました。また、個人として全リ演に関心を持っている人や、逆に全リ演として入って貰いたい人がいることから個人会員を増やしていくことにも力を注ごうということになりました。(現在、個人会員は十名)

議長団・編集合同会議

フェスティバルの大綱を決める。

全リ演議長団と「演劇会議」編集委員の合同会議が三月十四、十五の両日、名古屋のつちやホテルで開かれました。「演劇会議」の編集、発行が今年後半から西会議に移行することになっていることから、その体制をどうするか、相談する必要もあって、議長団と合同で開いたものです。(出席者)敬称略、十六人中十三人出席。

議長団 こばやし、後藤、仲、藤沢、猿渡、梶

事務局 城谷、熊本

編集委員 早川、境野、石垣、栗原、赤松

まず、今年八月に行われる第七回全日本演劇フェスティバルIN神戸について討議、つぎのように決めました。

出演集団を決定

開催日 八月二十九日(金)午後一時半から

三十一(日)午後一時半まで(二日間)。

会場 神戸市アートビレッジセンター、

シンガホール之二会場。

参加費 一人 一万六千円(二泊三日)

出演劇団(出演順)

地元の高校(選考中)

神戸をほんまの文化都市にする会「五十年目の戦場・神戸」

劇団道化「ピアニヤン」

プロデュース(北海道)一人芝居「ナウマン象」

演劇集団石るつ「鍋屋の紐はなせ朱い」

劇団はぐるま「カンナの咲き乱れるはて」

劇団大阪「タッチューから吹く風」

京浜協同劇団「日本の太鼓」(広場など劇場外で上演)

以上八集団が選ばれましたが、これらの作品や集団が並ぶことは、まさに神戸のフェスティバルならではのメニューで、きつと見応えのあるフェスティバルになると思います。

もう一つの目玉は狂言の茂山千之丞先生による実演と講演があることです。ご存知のように茂山先生は狂言の第一人者で今年三月芸術院選賞を受賞された方で、こんな機会はめったにありません。ご期待下さい。

予算について。三重県でやったときは県や町村からの助成があったのでなんとかやり繰りができましたが、今回は

県や市が被災地ということもあって助成はかなり厳しい見通しです。事務局では文化庁に助成金の要請をしましたがこれはダメ、日本芸術文化振興会に対しては再三に渡って助成要請した上で、出演予定の各集団を通じて助成申請をしていますがこれも決まってみなければ分かりません。参加費を上げようという意見もありましたが、参加者の負担を少しでも軽くしたいということから一万六千円に据え置くことにしました。

出演集団に対しては本来ならせめて実費だけでも払わなければならぬのですが、参加者の目標を東百二十名西百二十名、合計二百四十名と目一杯あげてみてもまだ赤字で、実費の半分も払えない状況です。そこで、出演集団をはじめ全リ演加盟の各集団に対してもそれぞれの地域で自治体や観客、市民に呼び掛けて、「被災地神戸を演劇で激励するための資金カンパ」を募ってもらおうということにしました。各集団の公演会場などにカンパ箱をおいてもらうなど各集団のご協力をお願いしたいと思います。

フェスティバル実行委員会

神戸ええとこや、 梶事務局長の話

震災地神戸で開かれることになったことを歓迎します。このことは、文化復興という点でも大きな意義があります。

しかし、神戸への激励というだけでなく、神戸という街の良さもぜひ楽しんでいただきたいと思えます。特に、若い人達には神戸はきっと喜んでもらえると思えます。未加盟劇団を含め近くの劇団の人や自分の劇団の観客や支援者、家族の方たちもぜひ誘って来てください。二泊三日で芝居も数本見れて一万六千円だなんて、全リ演のフェスティバルでなければできないことではないでしょうか。今から準備してください。

実行委員会／連絡先

電話・FAX〇七八一九一―一五二三 梶

総会も東西合同で

総会はこれまで東と西に分かれて開いてきましたが、フェスティバルとの関係もあり、たまには合同でやろうということになりました。八月二十九日（金）午前九時から運営委員会を別々に、午後一時半から四時まで総会を合同で開くことにしました。総会が地元高校の上演時間と一部重なりますが、やむをえずと判断しました。

今秋から西会議に移行

「演劇会議」編集・発行体制

「演劇会議」の編集・発行については二年半前、新体制

が発足するとき、三年したら東から西に移行しようということにしていました。今年の十一月、第九十五号から移行することになります。また、編集長についても同様の考え

方でした。会議では、このことを巡って話し合いました。まず、編集と発行の体制についてですが、編集・印刷・

発送については西会議に移行することになりました。発送は東・西両方の加盟劇団、個人のすべてに西会議が発送することにしました。発行所については、どこにするか、西会議で検討して決めることになりました。しかし、誌代の会計については京浜協同劇団の担当でようやく軌道に乗ったところでもあり、これは引き続き京浜にお願いするこ

一九九六年十二月掲載

「今どき現代史講座」正誤表

誤

◎P 97上段12行目と13行目の間に「妻」のせりふが入る。

女教師 とにかく良かった。みなさんがお揃いで。で、何でしよう、お母さん。

夫 そのようなことを先生にお話しても……

◎P 103下段5行目「老婆」末梢。

娘 一寸、押し付けがましいんじゃない。愛とか何とか言っただけ、あなた、強請とかじゃない、マニュアル通りの筋書きが決まってるみたいね。

老婆 アナタノ国兵隊達に

◎P 121下段10行目

娘 ……日大芸術科卒ルソン島にて戦死……

とになりました。

つぎに、編集長については、早川編集長から「二、三年のつなぎとして引き受けたのであり、この機会にぜひ三代、四十代の人に替わって欲しい」との意見が表明されました。しかし、これまでの企画が好評なこと、人脈が豊富なこと、また、編集長は雑誌の顔であり、そう簡単に替わらない方がよいとの判断もあり、ぜひ早川さんをお願いしたいという希望が強くなりました。そして、早川さんの意向を受けて、なるだけ早く若い編集長を探すという条件で早川さんをお願いすることに決まりました。

正

女教師 とにかく良かった。みなさんがお揃いで。で、何でしよう、お母さん。

妻 もうもう、主婦業、母親業にすっかり疲れてしまいました。夫 そのようなことを先生にお話しても……

娘 一寸、押し付けがましいんじゃない。愛とか何とか言っただけ、あなた、強請とかじゃない、マニュアル通りの筋書きが決まってるみたいね。アナタノ国ノ兵隊達……

娘 ……日大芸術科卒昭和二十年四月ルソン島にて戦死……

全日本リズム演劇会議住所録

東 会 議

B	劇 団 名	住	所	電 話	F A X
北 海 道	劇団さつぼろ	063	札幌市西区宮の沢3条4丁目14-8	011-663-6259	011-663-8198
	劇団新劇場	065	札幌市東区伏古11条2-396-47	011-784-9908	
奥 平	ドラマシアターども	067	北海道江別市高砂町37-90 安全智康方	011-384-4011	
	劇団弘演	036	青森県弘前市品川町1 プラザル内	0172-35-4670	
羽 越	劇団支木	030	青森県中央2丁目4-6	0177-77-4677	0177-77-4677
	黒石演劇研究会	036-03	青森県黒石市之徳兵衛町51 加賀谷方	0172-52-4097	
東 北	劇団やませ	031	青森県八戸市大字鼓町字下松苗場14-183 抵谷方	0178-33-3850	
	劇団未来半島	035	青森県むつ市緑町26-2 (株)丸二物産内 仁木方	0175-24-1189	
東 北	劇団山形	990	山形市東青田町5丁目8-5	0236-32-4105	
	劇団たいごん座	997	山形県鶴岡市青柳町42-32 たんぼぼ保青園内	0235-24-1688	
東 北	仙台小劇場	980	仙台市青葉区五橋1丁目5-13 平和友好会館2F	022-264-2340	022-264-2340
	劇団群馬中芸	371-01	群馬県勢多郡富士見村大字赤城山大河原626-498 未来スタジオ	0272-88-2700	
東 東	劇団埼玉	362	埼玉県上尾市日の出町4-508-1	048-777-4430	
	劇団久喜座	346	埼玉県久喜市中央1-3-13 江原方	0480-21-0664	
東 東	青年劇場	160	東京都新宿区新宿2-9-20 間川ビル4F	03-3352-6922	03-3352-9418
	劇団錦纏	175	東京都板橋区成増5-1-2 米丸ビル	03-5997-9461	03-5997-9463
東 東	東京芸術座	177	東京都練馬区下石神井4-19-11	03-3997-4341	03-3904-0151
	劇団展望	166	東京都杉並区阿佐ヶ谷南3-3-32	03-3393-2739	

B	劇 団 名	住	所	電 話	F A X
関 東	演劇集団石るつ	134	東京都江戸川区西葛西3-15-8-701 境野修次方	03-3804-0507	
	演劇集団土くれ	105	東京都港区虎ノ門1-12-1 第一法規ビル福田事務所内	03-3508-0104	03-3508-0140
東 東	劇団阿修羅	157	東京都世田谷区南島山2-33-15 川崎方	03-3309-8633	
	京浜協同劇団	211	神奈川県川崎市幸区古市場2-109	044-511-4951	044-533-6694
東 東	劇団蒼生樹	220	神奈川県横浜市西区伊勢町3-133-824 濱田方	045-242-3584	
	三浦半島劇団海	238-01	神奈川県三浦市南下浦町菊名56	0468-88-3142	
山 静	劇団やまなみ	400	山梨県甲府市青沼1-8-5 梅津方	0552-33-9556	
	劇団静芸	420	静岡県沼府町1丁目10-37	054-273-0604	
山 静	劇団からつかぜ	431-02	静岡県浜松市篠原町21505	0534-49-0937	
	劇団火の鳥	421-21	静岡県安倍口団地5-38-308 泉地守方	054-296-1297	
山 静	阿峰演劇集団	444	愛知県岡崎市元次町3-10-3 浅井方	0564-21-2614	
	劇団名芸	468	名古屋市天白区平針1丁目1808 (457名古屋市南区沙田町11-8(栗木)急ぎ、小包類は)	052-803-2922	
中 部	劇団名古屋演集	451	名古屋市西区庄内通4-16-3	052-821-3691	
	劇団名古屋	456	名古屋市熱田区新尾頭町2-2-19	052-524-5975	
中 部	劇団上野市民劇場	518	三重県上野市丸の内 共同ビル3F	0595-23-5252	
	劇団すがお	511	三重県桑名市森忠睦美丘1058	0594-31-4210	0594-31-4210
中 部	劇団夜明け	508	岐阜県中津川市北野丸山	0573-65-4937	
	劇団はぐるま	500	岐阜市西野町1丁目11番地	058-265-1852	
中 部	劇団たけおえ	915	福井県武生市四郎丸2-2	0778-23-0147	0778-23-4095

西 会 議

B	劇 団 名	住	所	電 話	F A X
大 阪	関西芸術座	557	大阪市西成区岸ノ里東2-10-2	06-661-2112	06-661-2060
	劇団潮流	557	大阪市西成区松1-6-17 橋モータープール内	06-658-2315	06-656-4121
	劇団未来	536	大阪市城東区成育1-4-25	06-939-5777	
	劇団きつがわ	551	大阪市大正区泉尾4-2-7	06-553-7991	
	劇団大阪	542	大阪市中央区谷町7-1-39 新谷町第2ビル 103	06-768-9957	06-268-9957
	劇団コーロ	546	大阪市東住吉区公園南矢田2-4-7	06-695-6401	03-695-6405
	人形劇団クラルテ	559	大阪市住吉区南加賀屋3-1-7	06-685-5601	
	大阪府職劇研	540	大阪市中央区大手前元町 大阪府職労第2書記局	06-941-0351	
	劇団息吹	578	東大阪市中野 224-14	0729-64-4441	
	座わだち	572	寝屋川市東神田町 22-21 安田方	0720-28-1349	
京 プ ロ ッ ク	劇団京芸	612	京都市伏見区納所北城堀 31-18	075-631-2609	
	人間座	606	京都市左京区下鴨東高木町 11	075-721-4763	
	人形劇団京芸	611	宇治市白川鍋倉山 35-20	0774-21-4080	
和 歌 山	演劇集団和歌山	641	和歌山市和歌浦南 1-1-14	0734-45-4537	
	劇団四和会	650	神戸市中央区元町通 2-9-1-612	078-392-2421	078-392-2422
神 戸 プ ロ ッ ク	劇団どろ	652	神戸市兵庫区大開通 7-4-7 谷垣ビル 4F	078-576-6488	
	神戸職演連	650	神戸市中央区下山手通 9-9-7 西藤ビル	078-351-6969	
	劇団かすがい	660	尼崎市昭和通 1-17-1 石和久ビル 3F	06-489-8984	06-489-8984
	神戸ドラマ館ボレロ	650	神戸市中央区山手通 9-9-7 西藤ビル 2F	078-361-9870	
中 プ ロ ッ ク	劇団月曜会	730	広島市中区豊町 4-27 岩井方	082-234-9656	
	劇団若者座	755	宇都郡松山町 4-10-24 東洋鍼灸院内	0836-21-7468	

B	劇 団 名	住	所	電 話	F A X
中 国 クロ	演劇サークル・トラム	753	山口市大字吉敷 2025	0839-20-2835	
	劇団演劇街	753	山口市中国町 1-3 やの舞台美術館内	0839-24-0075	
	劇団あしぶえ	690-21	島根県八束郡八雲村平原 481-1 しいの実シアター	0852-54-2400	0852-54-2411
四 国	劇団こじか座	790	松山市木屋町 4-35-1 酒井方	0899-24-3415	
	福岡現代劇場	810	福岡市中央区薬院 1-6-5-410	092-751-7982	
	劇団生活舞台	815	福岡市南区長丘 2-15-4-401 平原義行方		
	劇団道化	818-01	福岡県太宰府市大字太宰府 2629-10	092-922-9737	
九州 プ ロ ッ ク	劇団テアトルハカタ	812	福岡市博多区上川端 10-15-901 ローゼンション 9F	092-271-5090	092-282-4513

個 人 加 盟

氏 名	住	所	電 話	F A X
桜井 裕子	921	石川県金沢市山科 3丁目 6-10 早川方	0762-44-2802	
大橋 喜一	210	神奈川県川崎市幸区小向仲野町 3-2-406	044-533-3779	
岡田 和義	176	東京都練馬区羽沢 2-12-8	03-3991-1723	
こ じ 谷 一 郎	924	石川県松任市若宮町 2-4	0762-75-2755	
大原 穂子	215	神奈川県川崎市麻生区万福寺 2-14-5	044-966-8125	
川島 柳一	270	千葉県松戸市金作 57-57	0473-84-6207	
小松 徹	663	西宮市宮前町 8-8 ネオハイツ宮前町 401	0798-36-8341	
栗原 省	643-01	和歌山県有田郡吉備町庄 684-32	0737-52-5963	
又川 邦義	563	池田市豊島北 2-4-6 共栄アパート	0727-62-5675	
阿部 好一	565	吹田市千里山西 3-30-16	06-385-3330	

友好劇団

劇団名	住	所	電 話	F A X
アトスナージくしろ	085 銚路市貝塚1-6-19 加藤たけはる方		0154-42-8009	
劇団新芸	047-02 小樽市鏡函町3-23-162 鹿角優一方		0134-62-3254	
劇団河童	090 北見市幸町8-3-4 冨谷国男方		0157-24-3357	
劇団湖(ちみ)	068-21 三笠市本郷町578-9 加藤元方		01267-2-3044	
劇路演集	085 銚路市寿2-5-1 中山知征方		0154-23-6551	
劇団ペルソナ	062 札幌市豊平区平岸4条12-8-4 秋本博行方		011-811-9036	
函館創芸	040 函館市川原町2-5 長谷川潔方		0138-53-7520	
劇団海鳴り	094 紋別市瀬見町2-3-40 我孫子正好方		01582-3-3238	
演劇集団未踏	121 東京都足立区梅島1-9-1		03-3880-0034	
演劇サークル麦の会	133 東京都江戸川区北小岩7-3-20		03-3659-8704	
川崎演劇塾	214 川崎市多摩区寺尾台2-8-1-12号504		044-951-9819	
劇団津演	514 三重県津市大門31-28 仏教会館内 岸武雄方		0592-26-1089	
演劇研究所	420 静岡市秋山町2-1715		054-271-0177	
劇団はにわ	461 名古屋市長区矢田町3-9 一ツトリーム矢田町401 下高原方			
演劇集団 驛(とき)	602 京都市上京区芦山寺通り千本東入ル北玄蕃町51-7 山路方		075-414-8624	
演劇集団 あり	683 米子市昭和町23-2 宮倉方		0859-33-9302	
劇団・自立の会	520 大津市榎木1-10-17 谷田方		0775-23-1891	

議 長 団	劇 団 名	住	所	電 話	F A X
こばやしひろし	劇団はぐるま	501-01 岐阜市寺田852 円成寺		0582-51-0490	
後藤 陽吉	青年劇場	184 小金井市貫井南町5-12-13		0423-81-1590	
中沢 研郎	京浜協同劇団	211 川崎市幸区古市場2-109		044-555-4066	
中野 健	劇団支木	030 青森市中央2丁目4-6 劇団支木内		0177-77-4677	0177-77-4677
仲 武司	関西芸術座	675-01 兵庫県加古川市平岡町土山953-8		078-944-5013	
藤沢 薫	劇団京芸	615 京都市西京区榎原内短外町25-1-A403		075-391-5039	
梶 武司	劇団四紀会	673 兵庫県明石市東野町1-5-1009		078-911-1513	078-911-1513
猿渡 公一	福岡現代劇場	814 福岡市早良区有田2-10-4		092-831-1696	
事 務 局					
城谷 護	京浜協同劇団	211 川崎市幸区東古市場9-21 (事務局長)		044-544-3737	044-544-3737
浅野真理子	劇団はぐるま	500 岐阜市西野町1-11 劇団はぐるま内		0582-65-1852	
加納美千子	"	"			
熊本 一	劇団大阪	542 大阪市中央区谷町7-1-39-103 (西会議事務局長)		06-768-9957	
田中 実	劇団息吹	581 八尾市山本町南7-6-7 (事務局長)		0729-99-9437	
清原 正次	劇団大阪	570 守口市金下町1-12-13 (事務局次長)		06-993-3113	
編 集 委 員					
早川 昭二	劇団鶴纏	168 杉並区和泉1-9-12-201 (編集長)		03-3323-8943	
境野 修次	演劇集団石るつ	134 江戸川区西葛西3-15-8-701		03-3804-0507	
石垣 政裕	仙台小劇場	983 仙台市太白区西中田5-23-1		022-264-2340	
栗原 省	劇団いこら	643-01 和歌山県有田郡吉備町庄684-32		0737-52-5963	0737-52-5963
赤松比洋子	劇団きづがわ	663 兵庫県西宮市高須町1-1-11-859 古川方		0798-45-3307	
橋本 幸男	演劇集団和歌山	640 和歌山市加納271-14		0734-73-7589	

全日本演劇フェスティバルIN神戸

集まろう！ 神戸へ！

8月29日(金)・30日(土)・31日(日)

アートビレッジセンター・シーガルホール

会費(2泊3日)=16,000円

北海道プロデュース 『ナウマン象』

京浜協同劇団 『日本の太鼓』

演劇集団石るつ 『鍋屋の紐はなぜ朱い』

劇団はぐるま 『カンナの咲き乱れるはてに』

劇団大阪 『タッチューから吹く風』

劇団道化 『ピアニャン』

神戸をほんまの文化都市にする会 『五十年目の戦場・神戸』

(地元高校は未定)

特別出演 茂山千之丞氏 狂言一題+講演

阪神大震災から二年。傷ついた心を街を蘇生しつつある神戸の暑い夏。人間らしく生きるとは、わが街とは……それぞれの地域で生まれ育った感動ドラマでわいわいがやがや交流しましょう。山と海に抱かれた街並、すばらしい夜景、うまい食物もふんだんに準備して、神戸の仲間があなたを待っています。いまから参加の準備をして下さいネ。

(現地事務局) 〒650 神戸市中央区元町通2-9-1-612 劇団四紀会
☎ 078-392-2421 FAX 078-392-2422 昼間連絡☎/FAX 078-911-1513 (梶)

編集後期

★巻頭論文(リアリズム・シリーズ)の原稿を連続二回にわたって、お忙しい中本先生にお願いした。今回は、(その1)日本のリアリズム演劇創造(運動)の柱の一つであったロシア、旧ソ連のそれを、建前と実体のズレに着目し、見直してみる。そこから、(その2)では、我が国のそれに於けプラスとマイナスを整理して、リアリズム演劇の未来を模索しようとする。(H)

★中本先生の論文中に若い人には馴染ない文字・コトバがあると思います。それは劇団の先輩などに聞か、この論文を集団討議するなどして、判らないことは理解するように努めて下さい。因みに(プロット)とは、1日本プロレタリア劇場同盟(のちに演劇同盟と改称、一九二八年、全日本無産者芸術団体協議会(略称ナップ)の構成団体として、左翼劇場、新築地劇団、めざまし隊・大阪戦旗座・京都青服劇場などのプロレタリア演劇の全国組織をつくり、国際労働者演劇同盟(三二年、国際革命演劇同盟に改称)の日本支部でもあった。三四年、弾圧によって解体した。(新日本出版社、社会科学辞典編集委員会編『新版・社会科学辞典』より)

★ナップ(全日本無産者芸術連盟、のちに、全日本無産者芸術団体協議会)各専門別組織、文学、演劇、美術、音楽、映画がありそれらを統一する協議会)の成立によ

って、プロレタリア劇場と前衛劇場とは合同し、東京左翼劇場が生まれた。最初のナップは、全国的な地域別組織をとって、この東京左翼劇場はナップ東京支部の演劇部として存在していた。

★プロットの綱領主旨は、「一切のブルジョア演劇を実践的に克服しつつプロレタリア演劇の組織的生産並びに統一的发展」の演劇活動を通じて「無産階級の解放の為に闘うこと」「演劇に加へる一切の政治的抑圧撤廃の為に闘うこと」。この綱領は、ナップが創立にあたって決定した綱領の主旨と全く同じものであった。

★九三号の発行が五月にずれ込んでしまったが、次号は何としても七月中には発行したい。今年は今日本演劇フェスティバルの年だ。七月号には、フェスティバルの準備の盛り上がりやを反映したいものだ。

★早速ですが各劇団にお願いしたい(劇団通信)を(五月中)に寄稿して下さい。また、舞台写真は、必ず劇団、作者、演出者を記して写真に添付して下さい。ひどいのは写真一枚が封筒に入ってるだけ。写真を見てどんな作品か判断出来るほど、芝居を観る機会がありません。どうかよろしく。

★消費税が5%になり、米軍用地特別措置法も国民無視で。国会は民主的論議もせず、結局、政府は米国の要求にこたえ、その政府を支える野党(共産党を除く)では、民主主義が踏みにじられる。ああ、腹が煮えかえる!!

演劇会議 第93号 1997年5月1日発行

定価 700円(送料240円)

編集委員 早川昭二 境野修次 石垣政裕 栗原省 赤松比洋子 楠本幸男

発行所 演劇会議発行所

〒134 東京都江戸川区西葛西3-15-8-701 境野修次方

電話 03(3804)0507

誌代振込先(郵便振替) 口座番号 00200-4-78639

全日本リアリズム演劇会議事務局(〒211 神奈川県川崎市幸区古市場2-109(京浜協同劇団・城谷護)